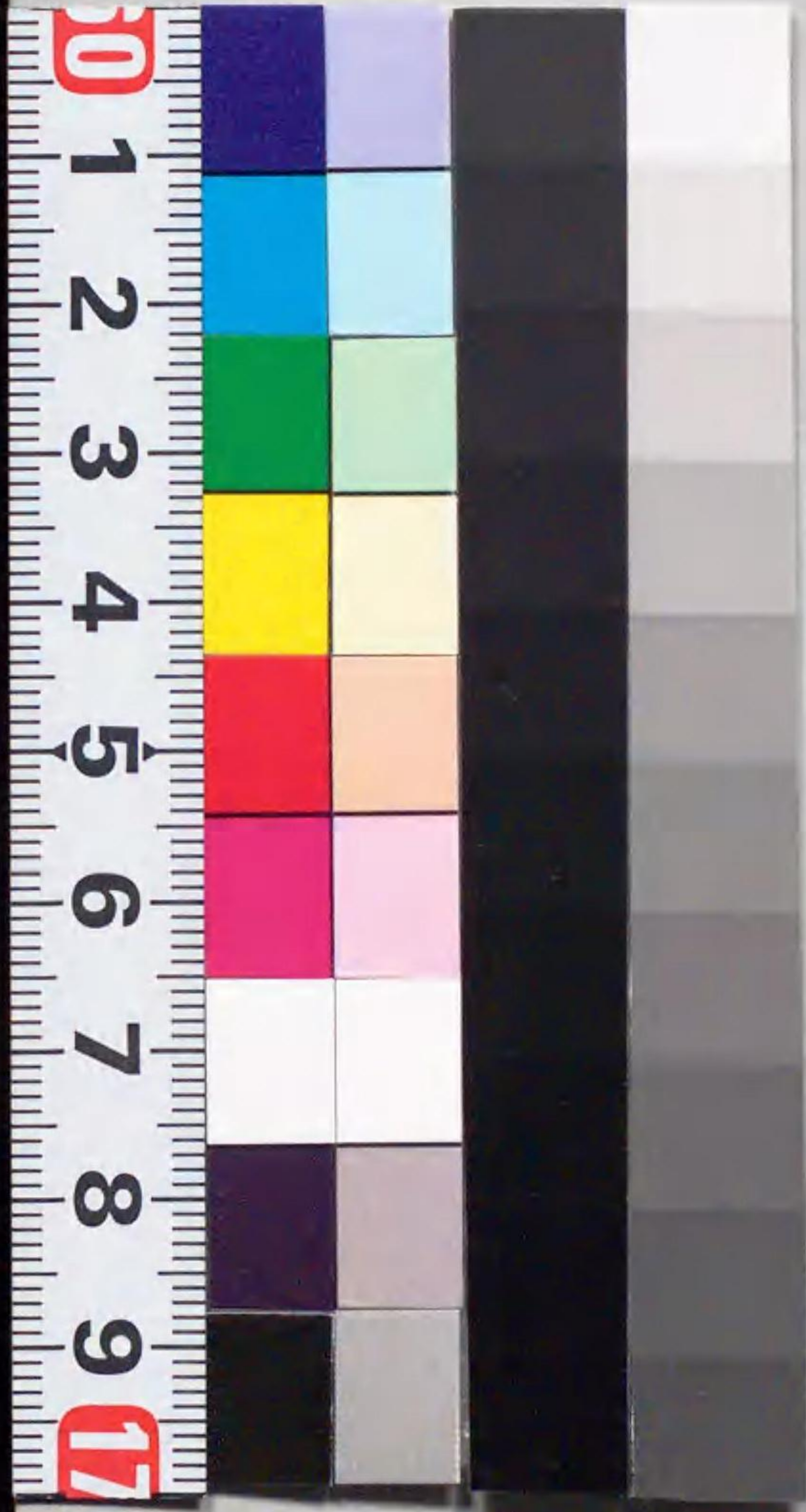


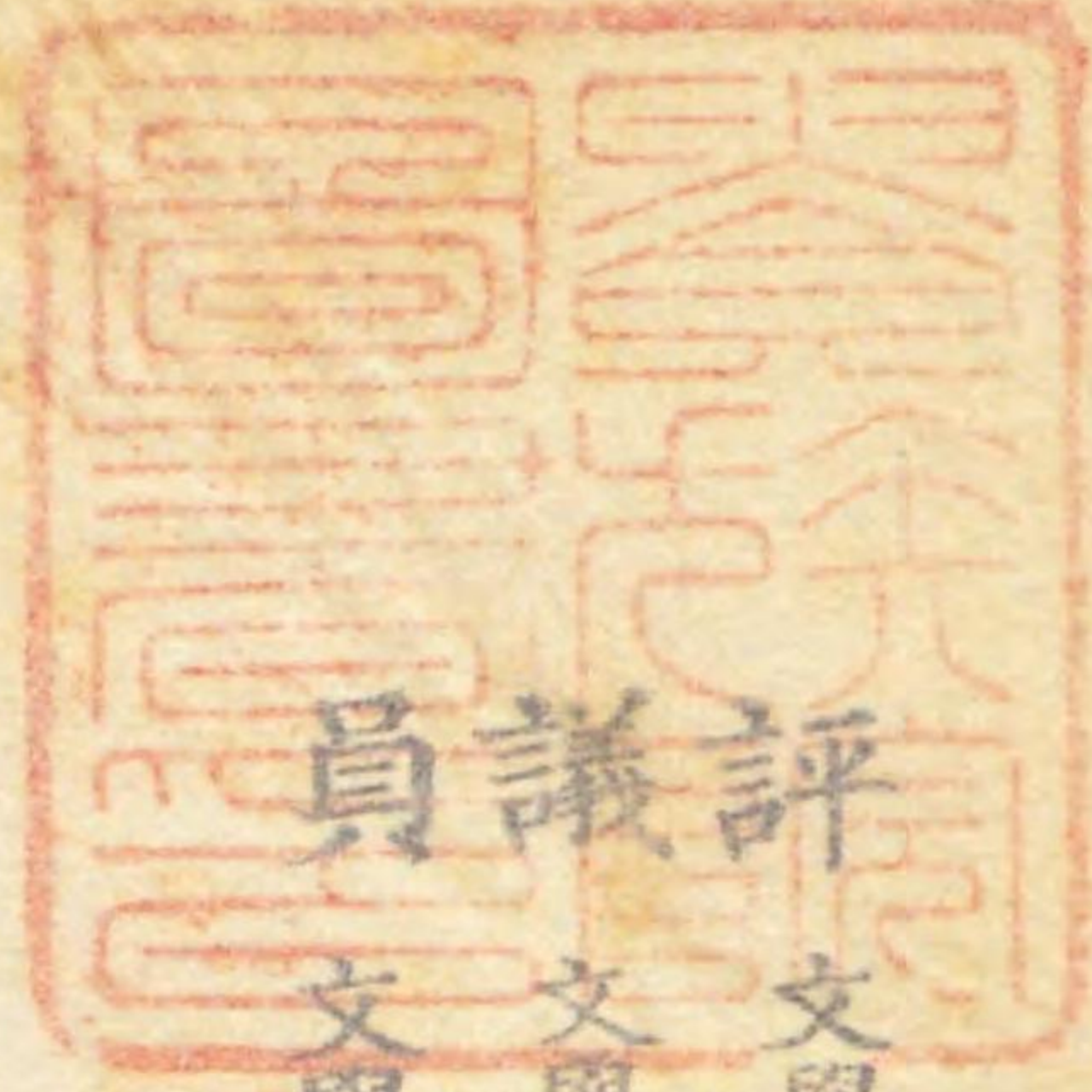
210.08
Ko5483



00712655







評
文學博士
議
文學博士
員
文學博士

萩野由之
文學士
笹川臨風
黑板勝美
文學士
菊池謙二郎
松本愛重
文學博士
三宅米吉

黑川真道編

(順一四)

國史叢書

石田軍記 全
仙道軍記 全

國史研究會藏版



評
文學博士
議
文學博士
員
文學博士

萩野由之
文學士
笹川臨風
黑板勝美
文學士
菊池謙二郎
松本愛重
文學博士
三宅米吉

黑川真道編

(順ハロイ)

國史叢書

石田軍記 全
仙道軍記 全

國史研究會藏版

210.08
K05483



712655

時に間断なく、往・今・來は一線の上に繋れり。夫れ現在に過去の生む所にして、未來を説き得るもの、現在に其の基脚を置けばなり。顧ふに世の人、多く現在を重んじて過去を輕んず。過去を輕んずるものにして、現在の眞想を窺知し得るものなく、現在の眞想を窺知し得ざるものにして、安ぞ未來に想到するの餘裕を存せんや。言ふ迄もなく我國の現在に、數千年に亘れる過去の産物なり。皇室の尊嚴・國民の性情、將又文物發達の徑路・治亂盛衰の顛末等、仔細に之を觀察すれば、現在の由つて來る所以を明かにし、隨つて未來の赴趨する所を察するに難からざるなり。

抑過去を觀察するには、根本史料に據らざるべからずして、一篇の成書に據るを非なりとす。蓋人各見る所あり、自家の見地は、是れ他人の見地にあらす。一篇の成書に頼りて過去を知らんとするは、即ち自家の見地を没却して、他人の見地に傾倒するものなり。讀史餘論・日本外史は、各其の著者の心に映り眼に現れたる日本歴史にして、之を以て眞箇の日本歴史と稱し得べからず。自ら眞箇の日本歴史を知らんと欲せば、根本史料たる當時の記録に由りて研鑽討究せられざるべからざるなり。是惟に日本の過去を正當に知り得るのみにあらず、研究の興味、亦實に津々たるものあらん。本叢書は眞に我國を了解せんと力むる特志者に、根本史料を提供せんと欲して刊行す。

蓋世には現在にのみ齷齪して、過去を觀察する興味と餘裕とを有せざるもの多しと雖、又孜孜として往を彰にし今を知り來を考ふるの士尠しとなさす。此の書、或は少數篤學の士に容れらるゝも、多數俗庸の人に迎へられざるは固より期する所なり。さばれ需要の多少を論ぜず、必ず全部の刊行を大成すべし。敢て爰に之を聲明す。

解題

石田軍記 十五卷

本書内容は、最初豊太閤治世より筆を起し、秀頼誕生、秀次讒言、秀次自殺、秀次公達并に妾等の誅戮、秀吉薨去、秀頼大坂在城、上杉景勝征伐として家康會津へ進發、諸大名關東に發向する事、石田三成陰謀、家康江戸城に歸着、伏見落城、丹後田邊城攻、關ヶ原合戦前に於ける諸大名の動靜の數々、家康關ヶ原に發向、三成大垣より關ヶ原に出張、關ヶ原合戦、筑前中納言裏切、三成大敗、佐和山城、大垣城落居、小西・石田・安國寺等捕はる、右三人六條河原に頸を刎ねらる、終りに關國を諸將に與へられしかば、人々家康の萬歳を祝したりと筆を止めたり。

本書の内容、大略以上の如くにして、此の内三成の最大事件として、豊臣秀次の讒言と、關ヶ原合戦とは、最も作者の注意して記せしものと思考せらるゝなり。

本書は、絶版を命ぜられしものと見え、絶版書目に掲載せられたり。但内容は、前條掲げたるものにして、別段三成を稱讃せし事蹟をも記さざれども、石田軍記と題せれば、内容の如何に拘はらず、石田の事蹟を記せりとの疑あれば、絶版を命ぜられたるなるべし。さればにや、予が藏本の如きは、所々缺丁缺卷さへあり。是れ恐らくは絶版當時、版木の幾分かを破棄せしものか。然るを其の後いつの頃よりか、書肆が内々缺丁缺卷のまゝ、賣捌きたるものなるべし。いづれも作者及出版の年月を掲げず。幸にも帝國圖書館本は全本なれば、補寫することを得て、茲に採收することゝなしたり。

石田三成の事を記せる本に、本書と同名異本あり、又類本あれば、掲げて研究者の参考に供すべし。國書解題に左の種類あり。

一、石田軍記 五冊

解題に云、石田三成に關する軍記なり。三成が、秀吉在世の時に寵愛を受け、秀次を讒せし事などより説き起し、秀吉の薨後、幼主秀頼を擁して、諸大名を談ら

ひ、徳川家康と難を構へて、關ヶ原の大戦に及べること、終に小西行長等と共に、誅戮せらるゝに至りし始末等を記したるなり。

一、石田軍記 寫本四卷

解題に云、關ヶ原合戦を中心として、當年前後の軍戦を記せり。一名「關原物語」ともいふ。第一卷は、東軍會津進發の事より、木曾川の川越、同新加納合戦の事に至り、第二卷は、岐阜落城の事より、野州會根城に於て、敵の火付を召捕る事、第三卷に、安藝中納言を味方に引入るゝ事より、關ヶ原合戦の事に至り、第四卷に、江州佐和山城落居の事より、三成・行長・安國寺伏誅梟首の事に至る。凡そ廿九箇條より成れり。

一、石田城跡集 寫本一冊

解題に云、石田三成歿落の後、其舊城下の傳説を集め記したるものなり。記者の名明かならず。

一、石田三成記 寫本一冊

解題に云、秀吉薨後、石田三成に關する軍記にして、三成謀叛の始より、其歿落の終に及び、徳川氏が征夷將軍に任せられし事に筆を止めたり。

一、石田三成記 寫本二卷

解題に云、石田三成に關する記事を主として、秀吉家康等の事を録せり。最初太閤秀吉の事、大津落城の事より、家康進發、秀秋降參、秀忠對軍となることに至る。以上廿七箇條より成れる略記なり。

此の他、近くは文學士渡邊世祐氏の編纂せるものあり。

一、稿本石田三成 一卷

本書は、石田三成の事蹟を、諸書により研究し記したるものにして、明治四十年の出版に係れり。

石田三成の事蹟は、以上列擧せる外許多あるべけれど、繁にわたれば略しつ。由來三成の事蹟の書物は、徳川氏時代に於ては、出版すること能はず。寫本にて傳はりたれば、遂には世に顯はれずなりしものもあるべしと信せらるゝなり。

仙道軍記 二卷

仙道とは、大日本地名辭書に云、「中山道の訛にして、古陸奥中央の山道にあたり、數郡に汎稱す。即ち阿武隈(逢隈)の河孟にして、南北に延長し、白河(東西)・石川・岩瀨・田村・安積・安達・信夫・伊達九郡の域是なり」と見えたり。

本書は、其の仙道の内なる岩瀨郡須賀川の地に居城を構へし二階堂家の始末を記したるものなり。抑二階堂家の先祖藤原爲綱は、遠江を受領し、承久の亂に、鎌倉に來り評定衆となり、子孫相續いで同所に居住せり。其の後裔式部大輔某、足利持氏に仕へ、奥州岩瀨郡を與へられしかば、一族治部大輔某を領國に遣し、同郡須賀川の地に城廓を構へ、これを守らしめたり。式部大輔は嘉吉三年逝去し、子の遠江守爲氏家を繼ぐ。此の時に當り、治部大輔爲氏の幼少なるを侮り、己れ忝の振舞あり。爲氏遂に須賀川に至り、一族の戰爭となり、治部大輔敗績して自殺す。よりに爲氏須賀川に留り居住す。其後裔盛義に至る。盛義天正九年逝去し、

繼嗣定まらず。爲に盛義の妻家事を督す。此の虚に乗じ、伊達正宗遂に二階堂家を亡ぼし、其の地を併呑す。これ本書の主眼として記せし所なり。豊臣秀吉に至り、蒲生氏郷を會津に封じ、此の地を領せしめ、伊達正宗を仙臺に封じたりしかば、是より須賀川の地は、蒲生氏に歸したり。最後には秀吉の徳を頌し、薨去の後豊國大明神と祀られ、天下泰平國土安穩の御代となれりと筆を擱きたり。

本書一名「藤葉榮衰記」といふ。續群書類從卷六、百廿九に收められたれども、未だ出版に至らず。但史籍集覽には組入れ出版せり。然れども今回採收せし本書と全く異本なり。且本書は二卷本にして、集覽本は三卷本なり。又排列の順序、書出し等異り、集覽本には奥書なく、本書には正徳の奥書あり。恐らくは此の書の方は原本ともいふべく、集覽本は其後書き改め、「藤葉榮衰記」と命名せしものか。記して後考を俟つ。

本書作者詳ならず。但奥書に、「正徳五乙未八月念八鳥試毫於奥州山東長沼郷」と見えれば、正徳五年の作なることは知られたり。按ずるに本書は、二階堂の創業より筆を起し、同家滅亡に至る迄の事蹟を悉く記したれば、恐らくは同家の遺臣などの筆に成れるもの歟。姑く記して後考を俟つ。また家藏に、「奥州仙道表鑑」三卷あり。正徳甲子奥陽松苜散松一逕の序文あり。作者は序文中に芳山子とあり。葦名家・二階堂家・田村家・結城家・佐竹家・石川家・石橋家・會津家・伊達家・二本松家・大崎家・相馬家・最上家・岩城家等の事蹟を記し、最後に豊臣太閤奥州下向、蒲生氏郷會津恩賜に筆を擱きたり。此の書前書の参考となるべきものなれば、其の大略を記して紹介することゝなしぬ。

大正三年六月

黒川眞道識

例言

- 一、本編には石田軍記十五卷並に仙道軍記二卷を採收す。
- 一、石田軍記は原本片假名なりしも、本編には悉く之を平假名に改めたり。
- 一、石田軍記には、原本の特長とすべき文字及び熟字頗る多く、而も其用法古雅の掬すべきものあり。依つて本書は、毫も此等の文字と熟字とを改竄する事なく、且傍ら一々振假名を施し、原本の面影を窺ひ知るの一助とはなせり。
- 一、原本假名交り文中に、反讀の字句を挿入せる個所少なからざりしも、此等は讀誦の晦澁を避けんが爲め、皆讀下しに改めたり。
- 一、原本の記述多くは語尾を示さず。今悉く語格を正して本編の體を備へしむる迄には、甚しき手数を重ね、且讀悪き個所には振假名を施したる等、讀誦の平易を期せんが爲め、一字句の参照讐校に實に數日を要したるもありき。
- 一、本書の終卷に^{何々}とあるは、原本の註記にして、當編輯部にて、補入したるものに

はあらず。

一、仙道軍記は、原本古寫本にして筆路巧みに、文字殊に假名に於て典雅を極め、爲に校訂上、熟慮考竅を重ねたる場合少なからざりしも、假名には漢字を補填したれば、讀誦の平易を計るに於て、遺憾なきに庶幾からん乎。其能はざりしものは、稀に假名のまゝとしたるもあり。

目次

石田軍記



卷之一.....一

太閤秀吉公治世の事 秀頼公誕生の事

石田三成讒秀次公の事附秀次公家臣評議の事

秀次公於高野山伏誅の事 秀次公之君達被誅事附三十餘人嬪妾の事

淺野吉長・六角義郷被讒言の事

卷之二.....三五

秀吉公薨去の事 秀頼公自伏見大坂在城の事

内府公會津御進發の事 長束大藏獻膳の事附島左近夜討巧の事

諸大名發向關東の事

卷之三……………六一

石田治部少輔謀叛の事 兩御所爲景勝退治江戸御進發の事
兩公從小山江戸御歸府の事 長岡越中守忠興之妻自害の事
伏見落城の事

卷之四……………六九

丹後國田邊城攻の事并玄旨古今傳授の事
岐阜中納言秀信與石田一味の事
江州六角右兵衛の許へ從大坂遣使者事 眞田父子義絶して牛角となる事
前田肥前守利長攻大聖寺事附大谷刑部の事

卷之五……………七九

前田利長與丹羽長重淺井暇合戰の事 勢州阿濃津落城の事
自關東使者行加藤清正事 東西兩軍諸城一味の事
大津落城の事 筑前中納言秀秋返忠于東軍事附諸將内通の事

東國軍勢上方に進發するの事

卷之六……………八五

伊藤彦兵衛明退於大垣城事附三成移大垣事
尾州犬山城從西軍籠置兵卒事附郡上城攻の事
美濃高洲城主高木十郎左衛門退散の事
同州福束城主丸毛三郎兵衛落去の事

卷之七……………九四

林半助乘取曾根城謀相違の事 西美濃高橋修修亮方遣三成使者の事
岐阜城河端合戰の事 諸將河を渡し相戰ふ事 老翁茶話の事

卷之八……………一〇四

竹鼻城落去の事 瑞龍寺山砦城攻破る事 郷戸合戰の事
岐阜落城の事 赤坂定御陣所事

卷之九……………一一二

黃門秀忠公從江戸御進發の事附内府君御書賜淺野長政事

濃州赤坂御着陣の事 笠木村合戦の事又福田繩手迫合ともいふ

信州上田合戦附伊豆守簾中家人質取る事 會津合戦の事

卷之十.....三〇

景勝攻出羽山形最上の事 内府公御軍評定の事

三成從大垣出張子關原の事 濃州關原合戦の事附東西諸軍備を定むるの事

井伊本多先陣諍の事 東西兩軍大關村合戦の事附東西斥候行合ふの事

筑前中納言裏切の事附島左近逃足の事 東軍一同に勝鬨して攻討つ事

可兒才藏賜笹名字事

卷之十一.....二五七

井伊本多功名の事附大谷刑部自害の事 西兵敗北の事附島津退口の事

大谷刑部が屋敷怪異の事 佐和山城落居の事 大垣城攻落居の事

卷之十二.....二七九

小西攝津守被生捕事 石田治部少輔被生捕事

卷之十三.....二九二

安國寺被生捕事 備前中納言秀家關原退口の事

島津兵庫頭義弘退口の事

卷之十四.....三〇一

立花左近將監退口の事 石河備前守關原退口の事

増田右衛門登高野山事

卷之十五.....三二二

爲御上使徳永法印往六角右兵衛督義郷宅事

於御前諸大名之家臣被召出の事 小野木縫殿助并石河掃部落着の事

長曾我部落着の事 白杵合戦の事 三津浦合戦の事

諸將賜闕國事

仙道軍記

卷之上……………三三

- 二階堂家の事 治部大輔下向附二階堂民部大輔逝去
- 二階堂爲氏公下向の事 伊藤左近物語の事
- 爲氏公治部大輔息女御縁の事 御臺御自害 岩瀬郡御廻文の事
- 爲氏公須賀川へ寄する事 翌日合戦の事 城中放火附治部大輔切腹の事
- 多川・梶原兒玉最後 民部大輔濱尾城明退く事 御臺怨靈
- 御臺御供養 濱尾尾州所帯の事 曾禰彌四郎・荒川新三郎喧嘩の事
- 植宗、岩瀬・白方郷衆と牛庭合戦の事 田村、岩瀬・澁川と合戦の事
- 田村兵楯籠南横田松山事 岩瀬重隆公御娘 岩瀬と白河無事の事
- 疾來鳥の事附照行逝去

卷之下……………三九

- 岩瀬御曹子會津へ遣さるゝ事 岩瀬御曹子會津御家を繼ぐ事
- 盛隆公高倉城を攻むる事 人取橋合戦の事 田村、白岩城攻め給ふ事
- 田村郡守山、岩瀬旗本衆と合戦の事 滑川合戦の事
- 田村、鹽松と合戦の事 伊達照宗、二本松義次に虜せらるゝ事
- 御代田籠城の事 盛隆、正宗と郡山合戦の事
- 三左衛門、盛隆公を討ち奉る事 猪苗代盛國嫡子盛種を取返す事
- 義廣會津落附摺上合戦の事 岩瀬西の方の衆正宗へ降参の事
- 須賀川城に於て御臺直言の事 須賀川上下神水の事
- 竹貫・岩城・佐竹より加勢の事 須賀川落城 守屋筑後守謀叛の事
- 御臺新井田へ落ち給ふ事 遠藤雅樂頭内室阿隈河へ身を投ぐる事
- 石川昭光須賀川へ入る事附大里籠城會 津仙道爲氏卿の知行の事

目次終



石田軍記卷之一

太閤秀吉公治世の事

夫能扶天下之危者、則據天下之安。能除天下之憂者、則享天下之樂。能救天下之禍者、則獲天下之福也。能く天下の危きを救うて、則天下の福を獲る者は、前關白秀吉公なり。公は本尾張の州愛智郡中村の人にして、天性勇悍ありて、母の家に在ることを意とせず。漸く人となり、肇めて松下加兵衛に従うて、僕使となる。然るに十六の春の頃、熟思案して曰、予松下如き小身の者に事ふるとも、幾許人いかにに知らるるの勳功あらんや。如かじ命を捨て、主を求めんにはと、則松下が家を出でて、大將軍信長公に仕へ奉る。誠に胯の下を潜りて、漂母に食を乞ひし程の身體なりしかども、智謀飽く迄群を抜き、武略至つて世に超えたり。此に依つて年を追つて次

第に昇進して、今は棧道・陳倉をも、越えつべきの勢とぞなれりける。此時にして天下大に亂れて、七雄群を争ひ、隣國相討つて八狄治まらず。便ち信長公の命を得て、遂に山陰道に向つて合戦するに、金鼓一度撃つて攻むれば、雷公電を撃つが如く、旌旗二般靡して闘へば、礮を以て卵に投ずるが如くに折る。乃し備前・備中・播磨・但馬・因幡を伐つて、而も五箇國の太守とぞなり給ふ。然る處に信長公の家臣明智日向守光秀逆心を起し、賊兵を率ゐて、洛陽の本能寺にして、信長公父子を弑し奉る。爰に秀吉は、備中高松の城に在つて、毛利右馬頭元就と戦ひ、雌雄未だ決せざる最中に、將軍父子、明智日向守が爲に討たれ給ふと聞きて大に驚き、悽み悲み給ふ事甚だ深し。則ち金鼓を納め旌旗を捲いて、元就と和融せんと議して、馳て使者を遣し、無二の志を演べ、且又明智を滅すべきの計策をぞ談じけるに、元就聞きて、義仁なりとして其心を感じ、慙に秀吉の請に應じ、元就も使を以て、先づ信長公の變を弔ひ、次に軍勞を慰めらる。剩へ軍馬を行装して、兵糧を運送せんことを約せらる。秀吉は、漢の蕭何を得たる思して、悦喜淺からず。急ぎ都へ打つて上り、山崎表に於て明智

と合戦す。其形勢は、圓石を千仞の山に轉すが如く、積水を萬仞の谿に決るが如く、嶽ちに光秀を討滅して、則ち先君の讐をぞ報い奉らる。是よりして武名天下に播し、威風四海に扇ぐ。奇正するあれば、天下其の戦に當る者なし。直に大將軍となつて、朝鮮國をも征伐し、高く關白の職に居て、從一位に昇らる。城廓を京都伏見・大坂に構へて、天下列國の大名小名をして、朝覲番衛せしめられしは、咸陽の昔に超え、金殿玉樓美盡し善盡して、鳳絃鸞聲の嘩しきは、秦の宮人にも過ぎたり。然りと雖、世繼の若君なきに依つて、甥の三好秀次を養子とし、關白を譲りて、京聚樂の城に据ゑ置かれ、其身は大坂伏見の城に隱居して、太閤の御所とぞ申しける。

秀頼公誕生の事

斯くて太閤秀吉公は、江州淺井備前守長政の息女、艶色類なしと聞及びて、娶り給ひて妾とせられけるが、文祿元年壬辰の冬よりも、懐胎の心地なりしに因つて、四箇の大寺に課せて、貴僧高僧を請せられ、大法祕法を修し、變生男子の法をぞ、別けて行

はせ給ひける。明くれば文祿二年八月廿日、安産成就の爲の御祈禱に、大坂の城中にして、連歌の會を北よはぞ促し給ふ。其頃の宗匠花下紹巴の發句に、

大般若はらみ女の祈禱かな

一二は過ぎて産の紐とく

脇昌花

秀頼誕生

昌花未だ百韻満たざるに、若君誕生あるこそ不思議なれ。天下の大名は言ふに及ばず、下萬民に至るまで、千秋萬歳の其聲は、欣々然として阡陌ちまたに満てり。頓て元服あらせ給ひ、秀頼公とぞ申し奉る。三歳になり給ひし頃、秀吉公寵愛の餘り深く思慮し給ひしは、我一世の後に、秀頼が敵とならんずる者は、關白秀次なり。如何はあらんと宣ふ時、石田治部少輔三成といふ奸臣、折を得たる思ひして、早秀次公、豫て逆心の風聞有之由、御前近く馴れ倚つて、低語してぞ讒しける。是ぞ秦の趙高が、權柄を檀にし富貴を極めんと欲して、扶蘇を上郡に弑し、蒙恬を謀らんとするに同くして、後に至りて、關原軍の張本とはなれりける。

石田三成讒秀次公の事附秀次公家臣評議の事

石田三成
奸譎

一令逆なる則ば百令失し、一惡施す則ば百惡結ぶ。太臣主を疑ふ則ば衆姦集り聚まるとかや。されば石田治部少輔三成、密にして遠き慮を、秀吉公の他界の後に廻らして、天下を奪はんと謀りけるは、冷すさじくぞ聞えける。聿こゝに以後の大病となるべき者は、關白秀次公と、東君内府公とに歸せり。何卒して二公を失ひ奉りて、事を遂げんとのみ日夜巧みける。文祿四年乙未の春の頃より方便てだてを作して、秀次公謀叛の街談をば流して、兒女に謠はしむ。猛獸の將に搏たんとするとき、耳を引れて俯伏なれすとかや。暴虐殘賊暇を伺うて讒を容れ、人を傷るに言を以てす。劔戟よりも甚だしと。然りと雖、秀吉公聊許應あらざれば、三成猶も深く思察して、計をぞ企みける。秀吉公より後見の爲に、中村式部少輔・田中兵部大輔兩人を附置かれしに、兩人の者共、強く諫言せし故に、秀次の御前、次第に疎くなりける。其頃田中は、攝河兩國の堤普請の奉行として、彼地に居けるを、夜通しに召寄せて、先づ石田が宅へ呼

入れ、奥の亭に請じ、二人頭を指合せて、三成密語さくやくぎ申しけるは、何いかに田中殿、御自分の命をば、三成が助け候といへば、田中も思寄らざる故大に駭き、珍しき仰かなといひければ、三成重ねて、今度の一大事、争でか遁れ給ふべき。御首は某續ぎたりといひけるにぞ、田中ただ氣色を變じ、何と申さるゝぞ石田殿、過言がましき仰に候。日本の諸士の中に、田中が身上あからさま、白地にいはん人は覺なし。御邊が當時出頭して、諸事思ふ儘に振舞はるとて、首を續ぎたるは、命を助けたるは、坏、無用の誇言に候。假令讒言するとも、上には豈用ひ給はんや。若罪科紛なきに於ては、速に我首を捕つて、見參に入れ奉られよと、臂を張り、刀の柄に手を懸けて、思ひ切つたる有様は、樊噲にも増れる風情なり。時に石田申す様、事の仔細を述べざれば、御氣に障りたるも尤なり。秀次公、御謀叛を企て給ふ事、隠れあらざれば、太閤の上意に、中村は病氣付きて引籠あるなれば、知らぬ事もあるらんが、兵部は豫て淵底を知らぬ事はよもらじ。當世の人の心は、頼み難きぞかし。急ぎ兵部を謀たばかり寄せ、腹切らせよと仰せられしを、此三成御前へ祇候して、斯程不覺を思立ち給ふ分野ありさまなれば、争でか彼等に

御心を許し給ふべき。況や兩人の者共、度々諫言仕る故、機嫌を損ひ、近所にも參り難き仕合なれば、存知ざるこそ必定に候はんと、種々に陳じ申す故、それはさもあるらん。されども用意支度せんに、不審の立つべき事多からんに、兎角を知らぬといふは心得ずと、苦々しき上意なりしを、彼者共、豫て物語仕る事の候へども、御野心あらんとは、努々ゆめく存知も寄らざる事にこそ、其議なし。愈萬事に目を配り、意を付け候様に計らひ申さんと、言葉を盡して退出仕ると談りければ、田中聞きて、某が身上を、何者が讒言しつらんと思ひ候に、存の外なる一大事を承り候。仰の如く頃日は、外様者の儀になり候へば、争でか大事の企を知らせ給ふべき。上意に、惡しと思召すも至極せり。さり乍ら夢にも存せざる段は、如何様にも陳謝申すべし。此上は愚意を盡して、窺ひ申さんといひければ、三成悦んで、御邊は普請場に、早々歸り給ふべし。上意の使者を以て申さんとて、田中を河内へぞ還しける。其後上意ありとて、使者を以て申し遣しけるは、堤の普請は、誰にても申付け置かれ、秀吉公御成前なれば、急ぎ歸京候て、聚樂の御殿、萬事心を付けられ、掃除等に至るまで氣を配り、然

るべき御誕の由傳へける。田中は夫より聚樂へ參り、萬端に心を付くれども、差して思當りたる事はあらざれども、覺束なき事も多かりけるにや、昨日今日の兎角の様共を、石田が許へ告げければ、三成、略は就りとして、同年の七月八日に登城して、秀次公の逆心、事既に露顯仕る條、速に征伐なくんば、天下の大事近き憂たらんと、則一味同心の大名を誌して、認め置きし謀書をば、太閤にぞ見せ奉る。秀吉驚き給ひ、此上は擬議するに及ばずとて、石田治部少輔三成・増田右衛門尉長盛・長束大藏大輔正家・徳善院玄以法印等を以て、急ぎ聚樂の城を御披きあれと仰付けられければ、こは如何と思ひ乍ら、急ぎ聚樂へ參りて、四人の使者申されけるは、先づ高野山の方へも御越ありて、一旦の御憤を静められ、御誤なき通り仰せ披かれなば、其虛名、などか晴れさせ給はざるべきやと、理を責めて申上げられければ、秀次公も、暫し案じ煩はせ給ひ、所詮聚樂にて、兎にも角にも作るべきと、思ひ定め給ひけるが、然りと雖天恩父子の義を重んじ、一先づ高野山へ趣かんと是ならんかと、御心をぞ苦しめ給ひける。實にや樹靜ならんと欲すれども、風此を動す習にて、秀次公奥に入らせ

給ひ、宗臣白井備後守・木村常陸守・熊谷大膳正、此三人を一間所に召され、我今進退爰に谷れり。面々の心底如何とありければ、白井備後守、自餘の辭をも顧みず、今聚樂を御披あらんは、中々勿體なき次第なり。愚案するに、此三人の内一人伏見へ遣され、一往理を盡させ、其上にも御承引なく、討手の向はんするに於ては、我々眞先懸けて討つて出で、一命を塵芥よりも輕んじ討死して、叶はぬ時節到來せば、御腹召され給はんに、何の仔細か候はんと、氣色忘じてぞ申しける。其時熊谷大膳申しけるは、備後守申さるゝ處も、一理あるに似たりと雖、某退いて愚案を廻らすに、此城にて一戦を勵し、御腹召されんする事、流石天照太神より、讓を受けさせ給ふ王城を、穢さるゝ恐其一。次に太閤より、讓り得させ給ひし聚樂なれば、天道の惡む所其二。次にきのふけよ昨今まで、六十餘州に關白と仰がれ、今更下路々々と籠城に及ばん事、日本の諸士の、言甲斐なく思はんも其三。彼是世の誹多ければ、唯今宵志賀の山越に、東坂本へ移らせ給ひて、父子の禮儀なれば、一旦帝都を退き、讒者の實否を糺し、其明めなきに於ては、討手向ふべし。其時は大嶽を本城とし、我々は唐崎表へ打つて出で、日

本を引請けて合戦に及ばんこと、願ふ所の幸なり。凡御人数も、三萬餘はありぬべし。若し御運盡きさせ御腹召されんに、何の残念かあるべきと、募り切つてぞ申しける。斯る所に木村常陸申す様、此節に臨んでは、如何に退き給ひて、御誤なき通を盡させ給ふとも、太閤に限つては、御宥免あるべからず。秦の子嬰が果し降れるを項羽許さず、終に弑しつ。今以て和漢相同じ。逆も迫りたる御身の上なれば、四人の使者を忽に討ち果し、今宵伏見へ取懸け火を付け、城を枕として、相戦ひ申さんは、弓矢取つての面目なり。君も戰場に御名を残し給へかし。然らずんば京中を焼拂ひ、御帝を此城中へ御幸なし奉り、一支支へなば、太閤も、などか天子へ弓を引き給ふべき。先づ京中の兵糧を取籠め、玉薬を用意して、城を固く堅めなば、あつかひ 噤と仰あらんは治定なり。其時は十分の利を得給ふべしと、手に取る様にぞ勧めける。善を見て怠り、時至りて而も疑ふとやらん。秀次公も、一所懸命の思案なれば、只十方にくれて御言葉もなし。常陸重ねて申す様、君の斯程まで、言甲斐なく渡らせ給ふこそは口惜しけれ。唯今伏見へ御出あらんか、高野へ御登あらんか、何れの道にも、都へと

ては再び還し給ふべからず。路にて雑兵の手に懸り給ふか、遠國へ流され給ひて、俊寛が思ひをなし給ふか、又は御介錯もなき御生害あらん時は、後悔あるともかへ 反るまじと、ひだけたか 居長高になつてぞ諫めける。爰に阿波木工頭進み出で、常陸守申す所も當理なれども、伏見の大殿は、心早き大將にて候へば、君の御謀叛必定と思召さば、緩々の沙汰あるべからず。即時に押寄せ給ふべし。只石田が種々にさまぐ 讒し申すにてぞあらん。太閤御心底には、承引なきと存じ候。さあらん時は、何心もなく御參勤あらば、彌御心も解けさせ給ふべし。唯今伏見へ押寄せたりとも、抄々しき利を得させ給ふ事思も寄らず。其故は、彼方は譜代重恩の士なれば、十騎が百騎にも對ふべし。此方は大勢なりとも、諸國の借武者にて、伏見に親を持ち子を居きたる者、或は妻愛に心引かされ、何の用にも立つべからず。又此城に籠りたりとも、厳しく合戦せば、頓て勝負も窮まるべきか。遠攻に打圍まれ、數日を送らば、兵糧乏くならん。爾時は親類縁者に付きて降參し、敵には力を附くるとも、味方の用に立つ者は候まじ。人の心の替り易きことは、古今其例多ければ、今更言ふに及ばず。さりとは頼なき

人の身と、理を盡してぞ申しける。元より臆したる秀次公にてましませば、實にもと思召し、聚樂を出で給はんと志、御運の程こそ拙けれ。

秀次公於高野山伏誅の事

去程に關白秀次公は、文祿四年七月八日、御輿一挺に道具をも差置き、御供二三十人歩立からだちにて、聚樂の城を出でさせ給ひ、伏見の城へと急がせ給ふに、五條の橋を打渡り、大佛殿の前を過ぎ行かせ給ひけるに、何とやらん、前後の體騒ひしめしく聞ゆきかいて、行違ゆきかふ人も立迷ひければ、供奉の人々、是は早討手の向ひたると見え候。雜兵の手に懸り給はんより、東福寺に御輿を入れられ、御心閑に御腹召され候へかしと申上げければ、扱は法印めに、謀られつる事の無念さよ。是より引返し、聚樂にて腹切らんと仰せける處に、御跡より若黨共馳來り、早五條邊には、敵數千騎入廻りて候へば、還御は思も寄らずと申しければ、秀次公、さるにても弓矢取る身の、假初にも乗るまじきは輿車ぞかし。馬上ならば、何者なりとも蹴散らして通らんに、犬死すべき事の口惜し

さよ。常陸が言葉の末、今ぞ思ひ合はせ給ふとある所へ、増田右衛門尉參り迎ひ、馬より飛んで下り、輿の前に畏りて、以の外の御惡心に候へば、一先づ高野山へ忍ばせ給ひ、連々に野心なき通を、仰披かれ候へと申しければ、秀次公の仰に、聚樂を出づるより其覺悟なれば、今更驚くべきに非ず。城に居て理を申すは恐多く思ひ、是までは出でたるなり。只今無實にて果てなん事、何よりも無念なれ。捨つる命は、露塵よりも惜からず。秀次程の者に、最後を知らせざる事やある。尋常に腹切るべしと宣へば、右衛門尉承つて、いかで御生害に及ぶべきや。一旦の御憤なれば、時節を伺はせ、御自筆の御書を以て、御心底言上あらば、和睦ありて、讒者の輩を、如何様にも仰付けらるべしと、辯舌を盡して進め奉る。秀次公何とか思召されけん、夫よりも武士共に前後を打圍まれ、大和路に差懸り、夢路を辿る心地にて、南を指して赴かる。將憂ふに則ば、内外相信せずとかや。物の哀は、聚樂に残りし人々なり。太閤の御對面も叶はせ給はず。我君は、路より武士共に圍まれて、高野とやらんに、登らせ給ふと聞えければ、皆呆れ果てたる有様は、悉達太子の王宮を出でさせ給ふに、六

秀次高野
山に遁る

萬の采女一度に咄と喚び、三后貴妃髪を亂して啓えしも、是には争で増るべき。孺き君達卅餘人の上臈達、其儘前後を知らで泣沈み、倒れ臥してぞ歎かる。御子五人持ち給ふ。嫡子は仙千代丸として、五歳になり給ふ。次をば百丸殿とて四歳。三男は於十九とて、玉を磨ける如くにて、秀次公の御寵愛、最淺からずぞ思はれける。平日太閤へ御參勤の折節には同車にて、片時も離れ給はぬに、此度は何とて連れさせ給はぬぞ。急いで父の御座す方へ倡ひ行け。我もく先に行かんと、三人の若君達、聲々に泣渡らせ給へば、母上達詮方なさに、大殿は、西方淨土と申して、目出度國へ入らせ給ひ候。頓て御迎參り給ふべしといひも敢ず、涙に搔暮れ給へば、末々の女童に至るまで、皆婉轉びてぞ泣叫ばる。こは何と成行く世の中ぞや。斯くあるべきとだに知るならば、たとひ地獄の底までも、御供申さであるべきか。神ならぬ身の淺間しさは、御爲と計り心得て、跡に残りし墓なさよと、悲む聲は暫も止む事なし。中にも厚恩深き人々は、順禮者の姿に身を褻し、跡を戀うて出でけれども、此彼にて改められ、力及ばず。夫よりは諸國巡るも多かりけり。斯くて秀次公は、高野

山へ登り給ひ、木食上人の坊へ案内ありければ、上人急ぎ驚き請じ奉り、只今の御登山は、思召寄らざる事なりとて、墨染の袖をぞ濡らされける。秀次公、何とも物を宣はずして、御袖をば顔に押當て、涙に噎び給ひしが、我れ斯様の事のあるべきとは思も寄らずして、世に在りし時は、心を付くる事もなく、今更淺間しくこそ候へ。自ら露命も早窮りたれば、今にも伏見より檢使來らば、自害すべし。爾らん跡は、誰をか頼み申すべきと、御涙ぐませ給へば、上人、御誕には候へども、當山の衆徒一等に訴へ申さんに、縦ひ太閤御憤り深く座すとも、なか承引し給はざらんやと、頼もしくぞ申されける。秀次公、頓て法體とならせ給ひ、道意居士とぞ申しける。供奉の人々も、皆髻切つて、偏に後世の祈にて、上使をば今やくと待ちたりける處に、福島左衛門太夫・福原左馬助・池田伊豫守を大將として、都合一萬餘騎、七月十三日の申の刻に伏見を立ち、十四日の暮方に、高野山にぞ著きたりける。三人の上使、則ち上人の庵室に參りければ、折節入道殿は、大師の御廟所へ詣でんとて、奥院に御座しけるを、上人より、此由申されければ、頓て御下向ありて、三人の上使に對面ある。

左衛門太夫畏つて、御姿の替らせ給ふを見奉り、涙を流しければ、入道殿御覽じて、如何に汝等は、入道が討手に來りたるよな。此法師獨り討たんとて、事々しき振舞かなと仰せければ、左馬助畏つて、さん候、御介錯仕れとの上意に候と申せば、扱は我首を討つべきと思ふか。如何なる劔をや持ちたるぞ。入道も腹切らば、首討たせん爲に、形の如く太刀をば持ちたるぞ。いで汝等に物見せんとして、三尺五寸ありける金作の御帶刀するりと抜き、此見よとぞ仰せける。是は左馬助若輩にて、推參申すと思召し、重ねて物申さば、討つて捨てんとの御所存とぞ見えにける。三人の小性衆は、御氣色を見奉り、少しも動きなば、中々御手には懸けまじきものをと、互に目と目を見合せて、刀の柄に手を掛け居たる有様は、如何なる天魔鬼神も、退くべきとぞ見えにける。入道殿は、御帶刀を鞘に納めて、如何に汝等、入道が今迄命存へたるを、さこそは臆したると思ふべし。伏見を出でし時、其夜如何にもなるべきと思ひつるが、上意を待たずして切腹せば、すはや身に誤あればこそ、自害をば急ぎつれとて、所以なき者共を、多く失はれん事の不便さに、今まで存へしぞかし。今は最後の

用意すべし。由なき讒言にて、我こそ斯く成行く共、我に仕へし者共は、一人も罪ある者はあるまじければ、能きに言上し、申扶けて、入道が饗應にせよ。相構へて面々頼むぞと宣ひしは、有難き御志とぞ感じける。扱座を立たせ給ひて、最後の用意をぞ務いとなまれける。爰に上人を始め、一山の衆徒出合ひ、三人の上使に對ひ、當山七百餘年このかた以來、此山へ登りし人の命を害せし事、其様ためしなし。一端此由言上申さではと、一同に申されける。三人の使聞きて、去事にては候へども、逆も叶ふまじき事にて候と、再三の問答にても、衆徒の評議止まざれば、福島進み出で、衆徒の議尤もあるべし。去乍ら時刻遷りなば、勘氣を蒙り、腹切れと有るべきなれば、是非に於て言上と思はれば、先づ斯く申す者共を、衆徒の手に懸けられ、其後は心次第と、膝を立直して申しける。さすが出家の事なれば、上人を始め一山の衆徒も、力及ばず立たれける。其夜は評議に時遷り、漸く曙になりぬれば、巳の刻計に御最後の有様、さも神妙にぞ見え給ひける。附隨ひ参りたる人々を召して、汝等是迄の志こそ、返々も淺からね。多くの者の其中に、五人三人最後の供するも、前世の宿縁なるべしと、御涙をぞ流さ

る。如何に若き者なれば、最後の程も心元なし。其上自ら腹切ると聞かば、雑兵共亂入り、事噪しく見苦しかるべしと、則ち山本主殿に、國吉の脇指を下され、是にて腹切れとありければ、主殿承り、某は御介錯仕り、御跡にこそと存じ候に、先へ參り、死出三途にて、俱生神共に道清めさせ申すべしと、莞爾と笑うて戯れしは、悠にこそは見えにける。彼脇指を押戴き、西に向ひ十念して、腹十文字に搔切つて、五臓を繰出しけるを、御手に懸けて討ち給ふ。今年十九歳。次に岡三十郎を召して、汝も是にて切るべしとて、厚藤四郎の九寸八分ありけるを下さる。承り候とて、是も十九にて、さも神妙に腹切れば、御手に掛けてぞ討ち給ふ。三番に不破の萬作には、しのぎ藤四郎を下され、汝も我手に掛れと仰せければ、辱しと御脇指を頂戴し、生年十七歳、日本に隱なき美少年、雪よりも白き肌をば押開き、初花の漸綻ぶる風情なるを、嵐の風に吹散らさるゝ氣色にて、弓手の乳の上に突立て、目手の細腰まで曳下げたるを御覽じて、いしくも仕りたりとて、太刀振上げ給へば、首は前にぞ落ちたりける。誠に彼等をば、人手にも掛けじと思召す、御寵愛の程こそ淺からね。入道殿は立西

堂を召して、其方は出家の事なれば、誰かは咎むべき。急ぎ都へ上り、我後世を弔ひ候へと仰せければ、是まで供奉仕り、唯今暇給はり、都へ上り候ても、何の樂候べき。厚恩深き者なれば、出家とても遁るべきや、僅の命存へて、都まで上り、人手に掛らん事、思も寄らずと、申切つてぞ居られける。此僧は博學多才、和漢の書に闇からず、富樓那の辯を持ちたれば、御前去らず祇候して、酒宴遊興の伽僧となられしは、國士筵中總て宜しからずの詩を見られざるにや、最後の供まで、仕らるゝこそ不思議なれ。次に篠部淡路守を召して、此度躰を慕ひ、是まで參る志、生々世々まで報じ難し。汝は迎もの事に、我介錯して後、供せよと仰せける。淡路畏つて、今度御躰を慕ひ參らんと存する者、幾許あるべき。中に某武運に叶ひ、御最後の供申すのみならず、御介錯まで仰付けらるゝ事、今生の望、何事か之に過ぐべきとぞ悦びける。入道殿、心地よげに打笑ませ給ひて、兩眼を塞ぎ、迷故三界城悟故十方空と觀念して後、さらば御腰物と仰せける時、篠部四方さまの供饗に、一尺三寸の正宗の脇指の、中巻したるを差上ぐる。右の手に取り給ひ、左の手にて心本を揉下げ、弓手の脇に突立て、目手へ

秀次自殺

きつと引廻し、御腰骨少し掛ると見えしを、淡路立廻りけるに、暫く待てと宣ひて、又取直し、胸先より押下げ給ふ所を、頓て御首をぞ討ち奉る。惜むべきかな。御年卅一を一期として、南山千秋の露と消え給ふ。哀といふも餘りあり。則ち立西堂、死骸を納め奉りて、是も供を申しける。淡路守は、關白の御死骸を拜し奉りて後、三人の檢使に對ひ、某身不肖なれども、此度慕ひ参りたる恩分に、介錯仰付けられ候は、誠に弓矢取つての面目と存じ候といひも敢ず、一尺三寸平作の脇指を、太腹に二刀刺しけるが、切先五寸計り後へ突通して、又取直し、首に押當て、左右の手を掛けて、前へふつと押落しければ、首を膝に抱いて、體は上に重なりける。見る人目を驚かし、適れ大剛の者かな。腹切つたる者は世に多けれど、斯る様は傳へても聞かずとて、諸人一同に、噫といつてぞ感じける。木村常陸も、攝津茨にて腹を切る。子木村志摩助は、北山に凌ぎ居たりしが、父の最後を聞きて、其日寺町正行寺にて、自害してぞ失せにける。熊谷大膳は、嵯峨の二尊院にて腹を切る。白井備後は、四條大雲院、阿波木工は東山にて、腹をぞ切つたりける。有爲轉變は世の習、生者必滅の理とは

いひ乍ら、昨日まで聚樂の春の花の宴も、今朝は野山の秋の露と、皆散り果て給ふぞ哀なる。

秀次公之君達被誅事附卅餘人嬪妾の事

大將諫を拒く則ば英雄散じ、策從はざる則ば謀士叛く。財を貪る則ば姦禁められず、内に顧みる則ば士卒姪す。一ある則ば衆服せず、二ある則ば軍式なし。三ある則ば下奔北る。四ある則ば禍身に及ぶと、大將たる者の、先づ慙づべきは女色なり。扱も關白秀次公は、類なき好色にて、洛中近國はいふに及ばず、遠國田舎の端までも、大名小名の息女に寄らず、土民百姓の娘に限らず、容色の美婦を尋出して、都へ聚め給ひしかば、唐の玄宗の、三千の美女を、華清宮に置かれしも斯くあらんと、事荒しくぞ聞えける。中にも勝れたるを選び出し、別けて卅餘人の夫人をぞ寵愛せられける。金銀を鏤めたる聚樂の殿に、玉の簾に錦の茵、庭には牡丹杓藥咲亂れ、梅や櫻の春の花の宴には、色を盡せし重の絹、裳を翻して婉媚きしは、人面桃花相映じて紅

秀次淫佚

と、崔護がいひしも是ならん。鸞臺鳳閣の秋の夜は、月を嫉む娥眉の景、遠山を畫ける風情して、絃歌魂を惱ましめ、蘭麝心を痛ませしを、羨まざるはなかりけり。是ぞ杜牧が、月明に花落ちて又黄昏と、作りし折ならんに、早いつしか今は打替へて、君野山の塵となり給ふと聞くよりも、鬢髪は蓬の如くに取亂し、翠黛は淤の如くに消失せて、御髪を落し髻を拂ひつゝ、高野へ送る人もあり、黒谷へ遣す方もあり、思々の寺にぞ納めらる。杜陵が、風翻萬點將愁人といふも愚なりしに、八月二日に、若君上臈夫人達を、誅すべきとの上使立ちければ、彌が上なる悲こそは増さりける。扱あるべきにあらざれば、我もくゝと、最後の出立せられしは、芙蓉の嵐に向ひ、紅葉の霜を待ちしに似て、花麗にも又哀にぞ見えにける。檢使には石田治部少輔・増田右衛門尉を先として、橋より西の片原に、布皮敷いて並居たり。斯くて若君達を車に乗せ、上臈達を警固して、上京を引巡り、一條二條を引下し、三條の河原へ懸りしは、牛頭馬頭阿訪羅刹が、十惡の罪人を、無間叫喚の大地獄に拏るも、是にはいかで勝るべき。橋にもなりしかば、檢使車の前後に立向ひ、先づ若君達を害し奉れと下

知すれば、青侍雜兵共走寄り、玉の様なる若君を車より抱卸し、替らせ給ふ父上の御首を見せ奉れば、仙千代丸は、長くも御覽じて、こはそも何とならせ給ふぞやと、噫といひて歎かるゝを、母上達を始め、貴賤男女警固の武士に至るまで、前後を忘じ、共に涙に咽びしが、太刀取の武士共、心弱くて叶ふまじと眼を塞ぎ、心本を一太刀宛に害し奉れば、母上達は、人目も辱も忘れ果て、音を擧げ、こは何とて、我をば先に害せぬぞ。急ぎ我を殺せ我を害せよと、空しき死骸に抱付きて、臥轉るゝ有様は、焼野の雉の身を捨て、煙に噎ぶに異ならず。夫よりも目錄に合せ、次第々々に直居らるゝ。一番に上臈、一の臺の御局、前大納言殿の息女にて、卅に餘らせ給ひける。是ぞ今はのすさみとて、

存へてありつる程を浮世ぞと思へば残る言の葉もなし
二番に小上臈於妻御前なり。三位中將殿の息女にて、十六歳になり給ふ。紫に柳色の薄絹の重に、白袴引しめ、練貫の一重絹帔、緑の髪を半切り、肩の廻にゆらくと振下げて、君の御首を三度拜しつゝ、斯くなん詠せられける。

槿の日影まつ間の花に置く露より脆き身をば惜まじ

三番に、姫君の母上中納言の局於龜の前なり。攝津國小濱の寺の御坊の娘にて、年は卅三、榮に少し過ぎ給ふが、西に向ひ、南無極樂世界の教主彌陀佛と觀念して、

頼みつる彌陀の教の違はずば導きたまへ愚なる身を

四番には、仙千代丸の母上於和子の前なり。尾張國日比野下野守が娘にて、十八歳になり給ふ。練貫に經帷子を重ね、白綾の袴着て、水晶の珠數を持ち、若君の御死骸を抱きつゝ、泣々大雲院の上人に十念授かり、心靜に回向して、斯くぞ詠じ給ふ。

後の世を掛けし縁の榮えなく跡慕ひ行く死出の山路

五番には、百丸の母上なり。尾張國の住人山口將監が娘、十九歳になり給ふ。白装束に墨染の衣を帔き、若君の御死骸を懷に抱きつゝ、紅の房付きたる珠數持ちて、是も大雲院の十念を受け、心靜に回向して、

夫や子に誘はれて行く道なれば何をか跡に思殘さん

六番には、土丸の母上於ちやの前なり。美濃國竹中與右衛門が娘にして、十八歳。

白装束に墨染の衣着て、物毎に輕々しくぞ出立たる。豫て禪の知識に參學し、飛華落葉を觀じ、世理無常を悟つて、少しも諛ぐ氣色なく、本來無一物の心として、

現とは更に思はぬ世の中を一夜の夢やいま覺めぬらん

七番には、十九の母上於佐子の前なり。北野の松梅院の娘にて、十九歳になり給ふ。白紋しらあやに練貫の單衣の重に、白袴引しめ、戻の衣帔け、左には御經を持ち、右には珠數西に向ひて、法華普門品を心靜に讀誦して、入道殿并に若君、我身の菩提を回向して、一筋に大慈大悲の影たのむころの月のいかで曇らん

八番には、於萬の前なり。近江國の住人多羅尾彦七が娘、廿三にぞなり給ふ。練貫に白袴引しめ、紫に秋の花盡摺りたる小袖帔け出でらるゝ。折節病中の事なれば、見る目も最悲しく、心も消え入るやうにぞ覺えける。是も大雲院の十念受け掌を合せて、

何處とも知らぬ闇路に迷ふ身を導き給へ南無阿彌陀佛

九番には、於與免およめの前なり。尾張國の住人堀田次郎右衛門が娘にて、廿六。是も白

装束に、珠數と扇子を持添へ、西に向ひ十念して、

説置ける法の教の路なれば孤り行くとも迷ふべきかは

十番に、於阿子の前なり。容かたちよりも猶勝りたる心にて、情深くぞ聞えける。毎日法華讀誦怠らず。最後にも此心をなん、

妙なれや法の蓮の花の縁に引かれ行く身は頼もしき哉

十一番には、於伊満の前なり。出羽最上殿の息女にして、十五歳になり給ふ。東國第一の美人の由傳聞き、様々に仰せられ、去る七月上旬上洛なりしが、旅の疲にて未だ見參なかりける内に、此難儀出来ければ、淀の御方より、如何にもして申し請け參らせんと、心を碎るゝ故、太閤黙し難くや思召しけん、命を扶け鎌倉へ遣し、尼になせとありければ、伏見より揉みに揉みて、早馬を打たせけるに、今一町計にして害しける。哀といふも餘あり。最後の際きざ妮しくも、

つみを切る彌陀の劔に掛る身の何か五つの障あるべき

十二番には、阿世智の前なり。上京の住人秋葉が娘にて、卅に餘られける。月の前

花の宴事に觸れて歌の名人とかや。最後の時も、先を争はるれども、目錄窮りたれば、力なく辭世に、

迷途にて君や待つらん現とも夢とも分かず面影に立つ

彌陀たのむ心の月を知べにて行けば何地に迷あるべき

十三番には、小少將の前なり。備前國本郷主膳が娘にて、廿四歳になられける。是ぞ關白公の御装束を承はりし人ぞかし。

存へば猶もうき目を三津瀬川渡るを急げ君や待つらん

十四番には、左衛門の後殿なり。岡本某が後室にて、卅八とかや。琵琶・琴の名人にて、歌書の師をぞせられける。是ぞ今はの氣色にて、

暫くの浮世の夢の覺め果て、是ぞまことの佛なりけり

十五番には、右衛門の後殿なり。村瀬何某が妻とかや。村井善右衛門が娘にて、卅五にぞなられける。廿一にて村瀬に離れ、今又重きが上のさよ衣、重々の憂涙、よその袖さへ乾る間もなし。

火の家に何か心の留るべきすゞしき道にいざやいそがん

十六番は、妙心老尼なり。同坊の普心が妻にてありけるが、夫に離れし時も、自害せんとしたりしを、無理に止めて、御伽婆にぞなられける。最後の供を悦んで、

先達ちし人をしるべに行く路の迷を照らせ山の端のつき

十七番は、於宮の前なり。是は一の臺の御娘、父は尾張の何某にて、十三にぞなられける。母子を寵愛ありし事、只畜生の有様ぞと、太閤深く嫉み思はるゝとかや。最後の體、おとなしやかに念佛して、

秋といへばまだ色ならぬ裏葉迄誘ひ行くらん死出の山路

十八番には、於菊の前なり。津國伊丹兵庫が娘にて、十四歳にぞなられける。大雲院の上人に十念授かりて、心靜に取直り、

秋風に促はれて散る露よりも脆きいのちを惜みやはせじ

十九番には、於喝食の前なり。尾張國の住人、坪内市右衛門が娘にて、十五歳とかや。武士の心に男子の姿ありて、器量類あらざれば、兒の名をぞ付けられける。細に練

貫の一重衣の重に、白き袴引しめて、君の御首を拜し奉り、残りし人に打向ひ、急がせ給へ。三津瀬川にて待連れ參らせんと、檢使の旁にも暇乞し、西に向つて高聲に、斯く二三返ぞ吟じける。

闇路をも迷はで行かん死出の山清る心の月をしるべに

廿番には、於松の前なり。右衛門の後殿の娘にて、十二とかや。未だ幼く座すれば、唐紅に秋の花盡し縫うたる薄衣に、練貫を帔け、袴の裳を攪取りて、母上の死骸を拜しつゝ、

残るとも存へ果てん浮世かは終には越ゆる死出の山路

廿一番には、於佐伊の前なり。別所豊後守が内なる客人といふ者の娘にて、十五の夏の頃、始めて見參し、新枕の後、中打絶えて召されば、拙き身をぞ恨みけるが、又ある酒宴の折に、君やこじ我や行きなんと謠ひしより、一入勝りて寵愛せられけるが、後に如何は思ひけん、痛はる事候とて久く出でざりしが、最後の御跡を慕ひ參らるゝこそ、姫も哀なり。法華經を讀誦して、斯くばかり、

末のつゆ本の雫や消え返り同じ流れの波のうたかた

廿二番には、於古保おこほの前なり。近江國の住人鯉江權之介が娘にて、是も十五の春の頃より寵恩深くして、閨の袖の香淺からず成染めて、花月の戯に、後世の事は思ひも寄らざるが、此期には、大雲院の十念を受け回向して、

悟れるも迷ある身も隔なき彌陀の教を深くたのまん

廿三番には、於假名おかなの前なり。越前國より、木村常陸守が呼びし女臈とかや。十七歳にぞなりにける。心勝れて賢かりければ、浮世をば泡の如くに觀念して、

夢とのみ思ふが内に幻の身は消えて行く哀れ世の中

廿四番には、於竹の前なり。一條邊にて、或方の拾はせし娘とかや。類なき美人にて、昔の如意の妃にぞ思合はせられたり。佛元古來今なく、心又去來の相なしと悟りて、

來りつる方もなければ行末も知らぬ心の佛とぞなる

廿五番には、於愛の前なり。古川主膳が娘にて、廿三とかや。法華轉讀の信者にて、

草木成佛の心をば、

草も木も皆佛ぞと聞く時は愚なる身も頼もしきかな

廿六番には、於藤の前なり。大原三河守が娘にて、洛陽の生れ、廿一にぞなられける。槿花一日の榮、夢幻泡影と觀じて、大雲院の十念受けて、

尋ね行く佛の御名をしるべなる道の迷の晴れ渡る空

廿七番には、於牧の前なり。齋藤平兵衛が娘にて、十六とかや。是も十念を受けて、西に向ひ手を合せ、

急げ唯御法の舟の出でぬ間に乗後れなば誰を頼まん

廿八番には、於國の前なり。尾張國大島新左衛門が娘にて、廿二なりしが、肌には、白帷子に山吹色の薄衣の重かさねに、練貫に阿字の大梵字書きたるを掛けて、裳を取り歩み寄りて、入道殿・若君達の御死骸を拜し奉り、君の御首に向ひ直居なほらるゝを、太刀取西に迎はせ給へといへば、本來無東西、急ぎ討てとありて、其儘に、

名計を暫し此の世に残しつゝ、身は歸り行く元の雲水

廿九番には、於杉の前なり。十九歳。去し年より勞氣を痛はり、鳳閣鸞臺の枕も遠ざかりければ、浮世を恨み、如何にもして姿をも替へばやと願はるれども、叶はずして、最哀を催されける。

捨てられし身にも縁や残るらん跡慕ひ行く死出の山越

卅番には、於紋とて、御末の人、心靜に回向して、

一聲にこゝろの月の雲晴る、佛の御名を唱へてぞ行く

卅一番は、東とて、六十一歳。中居御末の女房預かりし人にて、夫は七十五にて、三日已前に、相國寺にて自害しける。

卅二番に於三、末の女房とや。

卅三番は津保見。卅四番は於知母なり。

右卅餘人の女臈達を始めて、午の刻より申の終までに、薨の花に先立つ朝露となられしは、知るも知らぬも、見る人聞く人毎に、肝も烈け魂消えて、涙に暮れぬ者はなし。殊更に死骸をば、親類だにも給はらで、大きに穴を窺らせ、旃多羅が手に掛けて、

手足を取りて抛入れし分野は、昔波斯國の瑠璃太子、淨飯王宮を攻破りて、五百の釋女美人を穴殺にせられし哀れさも、是にはいかで勝るべき。斯く最後に臨んで、歌を詠せられし風情共、萬年の後までも、聞くに涙に噎びぬべし。色を誅するは、不義を後にして、己が嫉を先んずると、世史に誹り記せるも是ならん。聖智ある明將の所爲には非ず。太閤の強暴なる、支那を動かせども、慈愍は嫉妬に勝つ事を得ず。婦人孺子億萬を殺したりとも、何の益かあらんや。諸人誠に、御代の短かゝるべき事とぞ申しける。是皆原は、石田が惡逆より出でたるの謀害なり。

淺野吉長・六角義郷被讒言の事

淺野左京大夫吉長が郎等に、水野新八郎といふ者ありけるを、事ありて暇を出せし其意趣にや、吉長も關白殿と一味の由、證據分明に訴へければ、吉長も切腹にぞ究りたるが、吉長申しけるは、御前にて糺明の上、言上の輩と對決を願ひ奉り度旨歎きし故、太閤御前にて僉議に及び、則ち一味の誓牒に、吉長の判あるを取出し、如何にと

淺野吉長
讒せらる

仰せらるゝ時、吉長承り、此判は一年以前に仕替へ申すなりと答へける。さらば其證據を見んとありし故、諸大名へ遣せし書札共を取寄せられ、披見せらるゝに、吉長申す通り疑なかりけり。是に依つて謀判の新八郎を、吉長にぞ下されける。忝しと退出し、即時に首を刎ねて、本懷をぞ達しける。扱又六角右兵衛督義郷は、家臣に多羅尾道賀といふ者あり。其娘は義郷が妻なりしを、比なき美人の聞ありし故、聚樂へぞ取られける。卅餘人の一なり。是に依つて石田嫉み思ひて、秀次公と一味の由讒しけれど、死罪を救免ありて、本知を歿收せられたり。此兩人の危き事は、薄氷を踏むに異ならず。何れも石田三成が所意の取持とぞ聞えける。

六角義郷
讒せらる

石田軍記卷之一終

石田軍記卷之二

秀吉公薨去の事

蓋欲樂身者不久而亡、欲謀遠者勞而無功矣。石田治部少輔三成思ひけるは、太閤薨去の後にして、天下を謀らん時に、我爲に天魔疫神となるべきは、先づ關白秀次公、内府公なり。秀次は思の儘に喪はらしたれば、此上の大病は、唯内府公のみにあり。如何にもして是を滅し失はんと、晝夜腦を擢き胸を惱ましけるが、爰に計策を廻らし思ふは、内府公に敵對せん者は、上杉景勝なり。此を略はからんには、直江山城守兼續に如くはなしと深く案じて、略に金銀を布き、昵ぶに玉帛むすを縮んで、則ち水魚の間とぞなりにける。扱桃花の春の頃、霖雨の徒つれの折を見て、石田、直江を招き、叮嚀もてなに響應して、酒宴酣さかなりし時に、密語ひそごときて申しけるは、匹夫にして天下を呑み、微賤にして雲

客に交らん事、大丈夫の志に非ずや。太閤の御厚恩、身に餘りて深ければ、在世の内には、争か二心あるべき。他界の後にして、兵卒を發し、我天運を啓かんと思ふなり。其時に於て大病たる者は、唯内府なり。如何にもして是を喪し失はん事を、惱み煩ふとぞ語りける。直江も元來大膽者なれば、すはや善事こそ出來たりと悦んで、心の内に思ふ様は、内府君を滅して、石田天下を取るならば、我は上杉景勝を喪して、關八州の管領となるべしと察しけるが、卻て惟ふは、上杉は三百年來越後の國守たる故に、百姓已下までも上杉譜代なれば、貳なき地にして、我れ景勝を討つならば、歟に渠等又我を討つべければ、所詮上杉を他國へ國替させ、他國にて謀叛を企てしめば、計則ち就りぬとして、石田に低語きけるは、若し義兵を擧げんと欲る、共、本懷遂げ難からん。所以者何となれば、内府は大智大勇の武將にして、今八箇國の大守なり。其背強きが上に、蒲生氏郷と云大剛の者、内府の昵近にして、奥州に在りて前に横ふ。中々容易く喪されんや。内府を討たんと謀らば、先づ氏郷を亡し給ふべし。彼歿卻して後、鶴千代丸幼少なれば、罪科を牒し合せて會津を追放し、其跡へ上

蒲生氏郷
死去

杉を入置きて、彼れ逆心を企つると風聞せば、内府必ず討ちに來るべし。其時に至り、御邊は上方よりして、推掛け給へ。我は會津より上杉が先驅として、内府を立袂み討亡すべきに、那の仔細かあらんと、漢の張良を欺きて、手に取る様にぞ勧めける。石田聞きて、是ぞ日本一の軍法と、手を拍ち脛を撃いて悦びける。則ち文祿四年の春の頃、瀬多野掃部に内通して、氏郷を、掃部が茶の會盟に請じ、酒を勧め毒を飼ひけるに依つて、二月七日に四十歳にして、俄に死失せけるを哀なり。石田・直江は喜び合ひて、氏郷が宗臣蒲生四郎兵衛に内通し、餘の家臣共と不快ならしめて、則ち蒲生が家を四郎一人に任せ、心の儘にぞ配せける。其上に隱密の御朱印迄を下しけり。四郎之に依つて、萬事に付け無作法のみなれば、昔出頭せし老臣且入右衛門等、劇だ渠が不義を憤るに依つて、四郎も中惡しければ奇怪に思ひ、須加太左衛門・中島加内兩人に通じ合せて、會津の城にて、闇討にぞ仕たりける。此に依つて蒲生源左衛門・稻田數馬・町野左近等四郎と意恨になり、天下の騷とは聞えけり。彼等を伏見へ召上せられ、對決に及ぶ時、四郎懷より、蒲生家の支配一人に課付け給ふ御朱印を差上

げけるに因つて、命をば助けられ、知行四萬石を歿收し、加藤清正の預として、高麗へぞ渡されける。さて蒲生氏郷の息秀行をば、家中騒動の罪科に事寄せ、百廿萬石を取上げ、唯十八萬石になして、宇都の宮へぞ移しける。會津をば元より議したる事なれば、慶長三年の春、則ち上杉にぞ給はるとかや。斯る所に秀吉公、御心例ならず。瘦頼日に増して萬藥驗を失ひ、百醫手を拱たぐく。太閤も再び痊愈の功あらじと思召して、遺言して宣ふは、我卒せば東山に葬りて、神祠を祭り廟號を諡すべし。亦秀頼の後見には、江戸の徳川内府は、繼統といひ武將といひ、其上智仁勇の三徳を兼ね備へ、萬事に付け大寛の志ありて、能く諸人を懐け、黎民を恵むの思あれば、天下の爲に、補佐是に過ぎたる仁ひとなければ、頼むなりとぞ仰せける。扱加賀大納言前田利家は、執權たるべしとありて、則ち東國には會津の上杉景勝・水戸の佐竹義宣・仙臺の伊達越前守政宗・最上出羽守、西國には浮田直家・同備前中納言秀家・廣島の毛利元就・島津又七郎義久・鍋島加賀守直茂・長曾我部土佐守等、日本の大名残らず召寄せられ、天下堅固に守るべしと仰ありて、八月十八日に、六十三にして、伏見の城に於

て、遂に薨去ならせ給ふ、之に依つて天下列國の大名郡牧まで、一同に伏見の城に會盟して、聲を呑んで哀傷せられける。則御遺命に任せ、東山に廟祠し、勅許ありて、豊國大明神と賜はりける。斯くて内府君、秀頼公の後見として、古の周公の、成王を輔佐し、忠仁公の清和帝を扶翼し給ひしも、是には如何で勝らんとぞ感じ奉る。天下の諸侯は、朝覲番衛怠らず、殿中の近侍は、御宴踏歌間うたまもなく、浦邊の鹽屋、山野の竈戸まで賑へば、縑素萬民に至る迄、悦ばざるはなかりけり。然りと雖項羽咸陽を望み、沛公函關に入るの時にして、諒闇さへも行はれざるとかや。石田三成、内府君後見をば惡み思ふと雖、遺言の上、秀吉公の取立の衆も、過半石田と不和の者多かりければ、内府君に屬する人多くして、獅虎の間とぞなれり。佐竹義宣も、豫て石田と昵ひつきしければ、義士に二心なしと思ひ、内府君に參勤をもせざりけるが、其頃古田織部とて、理休茶の湯の門弟にして、義宣が朋友なり。吉田或時義宣の宅へ行き、頻に會盟の義を勧め諫むれども、佐竹承引せざれば、力なく歸りぬ。然るに内府君、石田と別心なく、委細調りて、石田が子隼人を名代として、向島内府君へ參勤しけるとな

ん。古田此を聞き、則ち佐竹へ通じて、斯様々々とぞ申しける。爾れども承引なし。吉田も斷金の交黙し難く、案じ煩ひ居けるが、細川越中守に、由を斯くとぞ語りける。細川聞きて、古田が心中感あり。佐竹の義志頼ありとて、自身も俱に加はりて、則ち古田同道にて佐竹が處へ往き、相議して三人打連れて、内府君へ會盟とぞ聞えける。斯る所に佐竹家中にも、一味せざる者共多かりける。然れども義宣思ひけるは、今相違に於ては、全く命を惜むに似て、愧^{はぢ}を街に謠はれん事、口惜しかるべしといひて、向島にぞ詣でける。内府君、本より寛仁の大徳備はり給ひければ、則ち禮を調べ、慇懃に饗應し給へば、義宣も涙を流して、我屋に歸りける。府公則ち本多佐渡守・酒井左衛門を以て使者となし、細川越中守同道にて、名代の儀をぞ述べさせ給ふ。素より天下後見のことなれば、日本の大名諸侯、残らず伏見向島にぞ祇候すとかや。石田隼人、内府君參會に、三成、佐竹へ其の理やせざりけん、是よりして不快なりとぞ聞えける。

秀頼公自伏見大坂在城の事

斯くて太閤の薨去の後、扶蘇を弑し、蒙恬を計らんと欲するの佞臣あれば、風雨長暖^{おぼやか}なりと雖、世上未だ靜謐ならず。此に依つて秀頼公も、大坂へ御在城あらんとの評議究まりて、翌年己亥正月十日、伏見をこそは立ち給ふ。内府君も、如何なる深き賢慮やまし〜けん、左鉄右鎗日に輝かし、前馬後騎列を作し、行送整々として隊伍を亂さず、警衛凜々として、人の目も驚かす程にぞ出立たせ給ふ。秀頼公、大坂へ入城あらせ給ひて、明るる十一日には、内府君登城見參あらせ給ひて、千秋萬歳の祝賀を調へさせ給ひ、十二日には、伏見へ歸城とぞ聞え給ひける。其夜より何とやらん、大坂中騒動しければ、行送の人々も、こは目覺しき事こそ出來たりと、馬に鞍置き甲引掛け、鎗鐵炮を厳しく備へて、用心をぞ堅くせられける。夜半計に何者とは知らず、旅館の四方を窺ひ、入らんとする者ありけるに依りて、彌早く大坂を立たせ給ひ、御乗物には村越總右衛門を入れ、府君は馬乗あり、或時は騎馬の内に混れ給ひ、守口よ

秀頼大坂
城へ移る

り御船に召し、急がせ給ふ處に、牧方邊あたりにて、大筋の羽織着たる者共、鐵炮に火を付けて、松陰に雲霞の如くに控へたり。すはやと思召して、御船は北の岸邊を上させけるに、敵にはあらで、府公の宗臣井伊兵部少輔直政なり。肌には具足を着、上には常の衣服して、猩々緋の羽織に、彌八鹿毛といふ駿馬を牽かせ、其勢三千餘騎、皆下には具足を着せ、上には常の衣装にて、伏見より御迎の爲に參り候と、直政馬より飛んで下り、川涯へ祇候せる分野は、是ぞ漢王彭城の戰に、獨り村老の家より、夜明けて還御し給ふに、藤公夏侯嬰が尋ね來りしも斯くあらんと、悦び給ふは限なし。則ち府公は、彼彌八鹿毛に召し、飛ぶが如くに伏見へ入らせ給ふ。直政は徐々しづかと、御蹤あとより打ちたるは、又類あらじの勇士やと、譽めぬ者こそなかりける。扱其後伏見も何とやらん静ならず、諸大名一手になりて攻懸らんと、京・伏見騒動止む隙もなかりければ、門前には大竹の菱垣ゆはを縛せ、虎の口を持ちて大門を押開き、長柄鐵炮夥しく玄關にぞ備へらる。新庄駿河守是を見て、斯る大軍の備に門をも打たせず、精兵を選ばるゝこと、用心なきに似たり。早く門を閉ぢよと申しける。上聞あつて、門を閉ぢ

京・伏見
騒動

て用心するは、大勇の儀に非ず。却て敵の侮を得る者なり。門を開いて軍兵の備をするに、何の恐かあらんと仰せけるに、駿河守も、偏に大勇の智謀をぞ感じ奉る。大津の宰相高次も、大津の城へ移らせ給へと、頻に願はれけれども、公は我勢三千あらば、上方の百萬にも當るべし。敵若し寄せ來るならば、上の臺に登り、金札の宮の邊にて圓備まろでなへに立て、手愾ていたく一戦し、打破りて通らんに、何の仔細あらんと、事可笑くぞ思召しける。斯る所に江戸よりは、本多中務の代番として、榊原式部大輔康政・本多佐渡守・長谷川七左衛門、代官共を召連れ、其勢一萬餘にて、二月廿五日に尾張の宮にぞ著きたりけり。此に於て伏見の騒動を聞き、則ち晝夜を分かす打ちけるに、路すがらも諸大名既に伏見へ取懸け、合戦最中と聞えければ、廿六日の晩方膳所くれがたへ馳著きて、康政は早醒醐筋を、伏見へ駈通らんとしける處に、井伊兵部直政の疾飛脚に行逢ひて、事の次第を尋ぬるに、伏見騒動には候へども、合戦には未だ及び申さず。斯様々と語るを聞き、康政も安堵して、則ち膳所に陣取り、秀頼公よりの下知なりと偽り、伏見騒動の定まるまで、東海・東山兩道、三日の人留とぞ觸れにける。折し

も此騒動、諸國に聞えければ、東國より上る人、常に餘りて夥し。勢多・野路・草津・大角・森山・野州・大山・石部・水口に宿りし人は、幾千萬といふ數知れず。康政、時分は好しと意得て、三日の未の刻に、關を開いて人通しと告げけるに、三日の間の鬱氣者共、一度に咄と責込めば、京は尺地もなく、人間にてぞ埋まりける。扱てこそ關東勢百萬餘騎亂れ入ると、上を下へと返しけるを幸に、康政も、花麗はなやかに威し立てたる小具足を着、亂髮みだれがみに帟はちまきして、信濃駿しなのの太く逞しきを打立ち、七千餘騎、伏見を指して下りけるは、草駄天の雲を駈る形勢ありさまにて、人間の様には見えざりけり。城にもなりしかば、急ぎ見参ありて、公御悦喜淺からず、御手づから酒肴をぞ下されける。國を治め家を安んずるは、人を得るなりといへる、誠に當家の四天王と申せしも、面目にぞ聞えける。康政は奉行に命じ、御倉より料足數千貫取出し、兵卒共に分配して、汝等内府の軍兵十萬餘騎、集まる故、兵糧の支度難儀に及ぶと言觸らし、諸方の店屋物を買取れと下知すれば、逸り切つたる奴子共、伏見・京・淀へ數千人入亂れ、赤飯・饅頭・餅・團子・酒肴に至る迄、一つも残らず買切れば、荒家に飢饉の往くが如くにて、町人百

姓共、一盞求めて氣を散すべき便もなく、呆れ果てたる所爲しわざなりければ、石田一味の人々も、此形勢に驚いて、過半は心變りとぞ聞えけるは、いみじかりける計略なり。

内府公會津御進發の事

去程に烏兎稚移りて、秀頼公も今年は七歳にぞならせ給ふ。諸國の大名參勤怠なく、近所の侍士出仕隙なし。然るに前田肥前守利長は、父利家逝去なれば、喪禮を執行はんと、去年の冬より加賀へ下り、喪の最中なる故、毛利元就、秀頼卿の執權にぞ代りける。此時にして直江山城守兼續は、豫て謀りし事なれば、上杉中納言景勝を勸めて、香橋原といふ處に新城を取立て、夥しく普請をぞ創めける。上杉、直江に向ひ、近世の城普請等は、古に違ひ、公方に伺ひ、御許の上にて務むべき由なれば、先づ普請を止め、一往伺ひ申さんとありければ、直江聞きて、いやとよ去年の秋、京より罷下り候節、内府・利長・秀家・元就・生駒・堀尾・中村、其他諸奉行に至る迄、相談事濟ましたりと、言を巧にして謀るにぞ、石田や直江が、久しき巧とは夢にも知らず、然

らば仔細あらじと、會津七口城々の要害を修理し、普請をぞ始めける。此事都鄙に隠れあらざれば、大坂の評議區やちやくとぞ聞えける。抑上杉家累代、武勇の家にして、會津・奥州・出羽・庄内・佐渡、合せて百五十萬斛を領し、直江山城守は、米澤の城主にて、卅二萬斛を治め、石田治部は佐和山の城主にて、十八萬斛の預地、合せて廿五萬石をぞ支配しけるとなん。斯く騒動の折節に、上杉の家來藤田能登といふ者、景勝が心に違つて會津を退き、京へ馳上り、上杉逆心の様をぞ訴へける。之に依つて内府公より、伊奈の圖書を使節として仰せけるは、何とて上意を伺はず城の普請をなし、參勤を止めて、秀頼公に、繼目の禮をも勉めざるやとありければ、其返事に、太閤御在世の時、上洛の儀五ヶ年免許あり。城普請は、直江山城守上意を得たれば、仔細あらずと、事もなげにぞ申しける。圖書歸りて、復答申上ぐるを聞召し、無禮無義の族、如何で緩慢の沙汰に及ぶべき。今涓々を塞がずんば、後に漫々をなさんと、直に御出馬ありて、其實否を糾さるべきとぞ聞えける。之に依つて大坂諸奉行の面々、何れも合會あつて評定せられけるは、此度景勝叛逆の聞えこれあるに依つて、内府公直に御

鎮罰あるべき由、我々斯くてあり乍ら、聽流しに致すべきやうあるべからず。叶はぬ迄も一應御止の申し、御承引あるに於ては、何とぞ相謀りて、無爲の沙汰になるまじきものにてなし。其上にも暴威を逞うせば、早速申給はりて、退治の功を致すべしと、各膚胸一致にして、頓て登城せられける。則ち井伊兵部少輔直政を以て申入れらるゝは、此度上杉、背違せしむるの所行、糺明遂げられん爲、御出馬之あるべき由、其聞え承り及び候。尤景勝武勇の家族たりと雖、直に御手を下されんこと、勿體なき御事に候。縦ひ何程の強勢を震うたかすとも、太閤の遺命に背き、天下に向つて弓挽き候はんこと、天罰遁るべからず。暫く隱使の御沙汰候とも、何條事をも仕出し候はん。其内に何とぞ密計を廻らし、和睦せしむる様に仕るべし。若又異儀に及ばば、其時即時に踏ふみつぶ殺さんに、何の仔細か候はんと、事もなげにぞ申されける。公聞召し、各の評議、尤其義なきに非ず。而し未だ遠慮の至らざる所あり。其所以は、今幼君不豫の砌を幸に、此の如くの雅意を働くこと、必定渠に合體の者ありと覺えたり。古にいはすや。群吏明黨各進所親、招舉姦枉抑挫仁賢、背公立私同位相誦。

家康、上杉景勝、征伐の爲め進發

謂是亂源。事延引に及び、城普請相調ひ、隣國攻め靡くに及んでは、勇々しき大事たるべし。且我直に向ふこと、敵に催促を受け、心體當惑の者共、我旌旗を見て、多分は走付くべし。先んずるは人を征するに理ありとかや。彼是以て緩怠すべきに非ずとて、同年六月十六日に、攝州大坂を打立たせ給ひける。其日の御裝束には、彌八鹿毛といふ名馬に、金輻輪の鞍を置かせ、虎の皮の泥障に、金地の鎧を掛け、紫の手繩に、猩々緋の尻鞆、飛羅兜の着籠に、紺縹子の御上着、蜀錦の羽織を召し、御鎧、冑、小刀、太刀、弓、鐵炮、鎗、長刀に至る迄、金銀を鏤め珠玉を磨き、天を輝し地を轟かしてぞ出立たせ給ひける。御供には、酒井宮内少輔・同右衛門大夫忠重・大久保加賀守忠常・同治右衛門忠佐・本多美濃守忠政・同息内記忠朝・奥平美作守信昌・同息大膳大夫家昌・平岩主計頭親吉・小笠原兵部大輔秀政・同信濃守長脩松平玄蕃頭家清・戸田左門一西・息采女正忠成・同伯耆守忠俊・松平和泉守忠次・阿部備中守正次・本多豊後守廣重・高力左近大夫・菅沼大膳亮定利・大須賀出羽守・内藤三左衛門尉信成・松平内膳正忠慶・天野三郎兵衛尉康景・石川長門守康通・本多縫殿助康俊等、都合其勢一萬餘騎、

美を盡して打立ち給ひける。其由々しさ、上下萬民打續き、牧方淀・伏見迄、見物の貴賤巷を争うて、耳目をこそは驚かしける。同十七日、公伏見に入御ましく、津發向の軍法を定め給ひける。白川口は兩御所、信夫口は陸奥守政宗、米澤口は山形出羽守義光、津川口は前田肥前守利長、魁首は堀久太郎、遊軍村上周防守義明、同溝口伯耆守宣勝、追手搦手一同に亂入るべき旨、豫て相觸れられ、道中路次の御掟、法令の箇條を出させ給ふ。其詞に曰、

- 一、喧嘩口論堅停止之上、若於違背之輩、不論理非、雙方共可誅罰。或作傍輩之思、或倚知者之好、荷擔之輩於有之、可爲本人於曲事旨、急度可申付。自然於令用捨者、縱後日相聞候共、可爲重科事。
- 一、於身方之地、放火并濫妨狼藉停止事。附作毛取散、田畠之中不可陣取事。
- 一、於敵地、猥不可取男女之事。
- 一、不先驅相斷而不可出細作事。
- 一、指越於先手、縱言使高名、背軍法上、可爲斬罪事。

一、無子細而有他備相交輩、武器馬具共可取之。若其主人及異義者、俱以可爲曲事之事。

一、人數押之時、不可爲岐道之由、堅可申付。若於漫通可爲重科事。

一、爲時使而雖差遣何様之者、不可爲違背事。

一、諸事不可漏奉行人之指圖事。

一、持鎗者爲軍役之外間、可指置長柄事。

一、武器・馬具・弓・鐵炮・玉藥、兼入念而求置、應身上可所持事。附不可爲押買狼藉事。

一、酒宴大酒令停止事。

一、博奕堅令停止之事。

一、小荷駄押事、兼日不軍勢相交様可申付。若有相交族者、其者可爲曲事。但路次中右方就可押通事。

一、出陣之中不取放於馬様可申付事。

一、敵勝負之間、放馬候事不苦。其放馬雖捕得、身方之馬其主人可返渡事。

一、舟渡之儀不雜他之備、一手可越涉。其馬以下同前之事。

一、無下知而不可陣拂之事。

右條々若於違背輩有之者、忽可處罪科者也。仍如件。

慶長五年七月日

是ぞ韓信が破楚の大將軍となりて、教軍場に、十七箇條の軍令を冊して、軍政司曹參に命じて、門々に張り東征に向きしにも勝りて、東關萬里の道中に、多勢と雖、一箇の過失なかりしかば、農工商に至る迄、賢智大徳の恵やと、悉皆安堵の思をぞなしにける。さて伏見の城番には、烏井彦右衛門尉元忠、西の丸には内藤彌次右衛門尉家長、大手の番には松平主殿助忠利・松平五左衛門尉近正、西の丸の加勢には、若狹少將勝利等を差置かせ給ひ、十八日の晝、伏見を御出馬あらせ給ひ、大津にぞ休ひ給ふ。路次の行裝整々として、玉屑を電門に飛ばすが如くにぞ見えたりける。大津の城主京極宰相高次迎ひ奉つて、山海の珍物を調へて、町寧にぞ饗應せられける。其

日は、石部の旅殿に入らせ給ふ。

長束大藏獻膳并島左近夜討巧の事

爰に石田三成は、今度内府君東征の事、思ひ儲けたる巧なれば、喜ぶことは限なし。豫て水口の城主長束大藏大輔家政に、調し合せ議しけるは、會津發向の折節には、泊り必ず石部・水口ならん。其時に御邊水口の城に請じ、御膳を獻り申すべしと約して、内證に大力士を集め、手配を定め、内府を城に待請けて、隙を竊ひ、胸して討つべしとぞ申しける。長束心得たりと領諛し、頓て長束父子、石部の御泊に參じつゝ、明日の獻膳をぞ願ひける。公對面あらせ給ひて、望に任せらるとあれば、父子俱に城へぞ歸りける。扱又石田が家臣に島左近とて、命知らずの大剛の者あり。五日以前より、伏見へ細作を凌ばせて、御出馬日限、旅泊の時分を告げさせければ、左近佐和山の城に居て思案を廻らし、石田に申しけるは、内府今宵石部に在陣の由承る。殊に手勢近習の侍五六十騎、家臣井伊兵部少輔が勢兵も、卅騎には過ぎず。是ぞ天の

島左近等
家康を夜
討せんと
謀る

與なり。只今人數五百給はる者ならば、夜討にし、本望を達しなんとぞ申しける。三成聞きて、卒爾の謀然るべからず。長束と調し合せたれ、水口の城にて仕果すべし。周章て、物を仕損ずる時は、由々しき大事となるべしとぞ制しける。左近聞きて、仰には候へ共、天狗も鳶鴉と化する則ば、蛛巢に繞はれ、小蛭も蛟龍と變する則ば、人を呑むの勢あり。内府は今小蛭なり。關東へ下る則ば、雲を得て大龍となり、却て其時は一呑に呑まれ給ふべし。所詮今夜彼地に打越し、風上より此彼に火を放つて、燒討にするならば、即時に攻滅し、勝利を得ん事掌の内に候と、章部を火攻にし夜討にせし、漢の術をぞ申しける。三成聞きて、實に尤と思ひ、さらば急ぎ夜討の用意せばやとて、島左近を大將とし、柏原彦右衛門・河瀬左馬助・新藤縫殿助・後藤又助・百々宮内・早崎平藏・磯野平三郎・香築間隼人・三田村織部・丁野助之丞・馬渡外記・口分田伊織・淺井新六・島新吉・渡邊新之助・川崎五郎左衛門・山本清三郎等を先として、宗徒の兵共八百餘騎、雜兵三千人、袖印に白き一文字を付け、誰といはゞ勇と答へよと、合語を定めつゝ、大船二十餘艘に取乗つて、蘆浦觀音寺の邊より、草津・石

部の上手へ廻りて、子丑の刻に石部へ押寄せんと、はが敵をなして進みしは、危かりける次第なり。斯る所に公思召しけるは、江州伊勢地は、敵地入り雜りたる事なれば、如何ならん敵の密計かあらめと、御思案を回らし給ふ所に、井伊直政祇候し、近寄りて低語き奉るは、近頃毎夜打續き不思議の夢を見候。殊更昨夜は現の様に、亡父より告げけるは、暫も近江路に宿すべからず。不意の大事必ずあらんと、荒々しく申しける。夢中のたはこ譚語は、勇士の取るべきに非ざれども、般の高宗の、傳説を夢に見て、賢弼を求め得、晋の王濬が三刀を夢に見て、益州の太守となりし事あれば、菲儒腐俗の小智に碍られて、夢は皆妄想と、撥無するに墮つべけんや。唯疾く此處を御立ちあれかしと申上げられければ、其夜の戌の刻計に、俄に石部を御立あつて、水口を夜通しに打過ぎさせ給ひ、途中より長束が方へ、御使者を遣され、明日立寄るべきの約諾に候へ共、急用に就き通らせ給ふとて、來國光の御脇指下されければ、長束も手に取る様に思ひしに、案に相違の事なれば、無念乍らも忝なしと領掌し、土山まで送り奉り、空しく水口へぞ歸りける。扱島左近が夜討の者共は、斥候五三人遣しけるに、内

府公は早立たせ給ひて、更に人音もなしとぞ申しける。此は如何なるしわざ仕事ぞと呆れ果て、取る物も取敢ず、遽ふためて踐きてぞ歸りける。公は夫より伊勢關に泊らせ給ひて、大難を遁れ給ふぞ不思議なる。翌日は四日市に着き給ふに、桑名の城主氏家内膳正、使者を以て申上ぐるは、例年の賀儀に任せ、數寄屋にて庵茶を獻じ度由謹んで言上すれば、則ち明朝の饗膳をば受け給はんとありて、其上熱田へ越ゆべきの船をも仰付けらるべしとの返答あれば、氏家由を聞いて、何の謀やありけん、悦んでぞ待ちたりけるに、又井伊直政近寄りて私語き申上げけるは、昨夜も關の宿どまりにて、悪夢心痛仕候ひて、日ひめ竟意靜ならず候。只今是より直に御船に召し、三河地へ渡海あらせ給へと諫めしは、張良が沛公を扶け、樊噲に命じて、軍馬を驅進ませて、行くこと九十九里にして、安平縣に到り、又四十里趨りて、扶風縣に到りし有様も是ならんと、聞く人皆感じける。則ち公うなづ頼かせ給ひ、頓て氏家方へは、小栗大六を使者にて、急用出來に因つて、昨夜渡海致すなり。來春上京の節、目出度芳茶を申受くべし。先づ謝禮の爲迄斯の如くとありて、程なく三州の佐久島にぞ着き給ふ。田中兵部少輔吉政、

船場に急ぎ走向ひて、其日の御膳をぞ奉りける。石田三成は、謀りし事一々に相違しければ、啓え焦れて悔えけるが、書翰を以て、直江山城守方にぞ先づ申遣しける。細書則及返報候。内府方一昨十八日伏見出馬候。兼日之調略任存分、天之與令祝着候。我等無油斷支度仕候間、來月始佐和山罷立、大坂可令越境候。輝光・秀家其外無二之味方彌可心安候。其表手段承度候。中納言殿以別書申進候。可然御心得奉頼候。恐惶謹言。

六月廿日

石田三成

直江山城守殿

斯くて公の御船を、廿一日には、笹島にぞ繋けられける。爰に池田三左衛門輝政、希有の魚鳥共買求め、不時の茶菓を調へて、最丁寧にぞ饗應し奉りける。廿二日は白須賀、廿三日は濱松、廿四日佐夜の中山にて、山内對馬守忠豊饗膳を具へ、廿五日には駿府二の丸、中村式部大輔一氏家臣横田内膳が宅に入らせ給ひ、朝獻畢りて、一氏折節大病を得て、肩輿に扶けられ、伏して御目見を遂げ申上ぐるは、今度供奉を缺き、

家康江戸に歸着

本懷を失ふ事、遺憾少なからず。愚子一學は幼少なれば、役に立ち難し。則ち弟の彦左衛門を以て、軍勢を催すべし。御心安かれと、誠を表に顯して、額に汗を流し述べければ、公、一氏が手を取らせ給ひて、其志を感じ給ふとありて、御涙を浮め給へば、式部も俱に肝に銘し、涙沈みてぞ退りける。廿六日沼津にて、中村彦左衛門尉一榮種々の饗應を設けて慰め奉る。三島に到りて大久保加賀守忠隣、四方の美物を盡して朝獻を進めらる。則本多佐渡守御迎に祇候すとかや。七八日は小田原・藤澤、九日には鎌倉へ御參向ありて、山谷海邊迄、名所舊跡残りなく御巡見まし〜て、七月朔日には、神奈河に泊らせ給ひ、同二日は、江府の城にぞ着き給ふに、後陣の勢は、猶伊豆・駿河に支へけるとぞ聞えける。誠に千里の行路無事なりし、御運の程を目出度けれ。

諸大名發向關東の事

内府源君、會津御發向の聞え、天下に隠れあらざれば、仁義の諸侯、武勇の士卒、此彼

より聞傳へ、是ぞ日本武國の思出と、馬物具を取出し、我減らじと磨立て、郎從兵卒に至る迄美麗を盡し、金甲天を輝し、霜刃星を並ぶるが如く、關東へと急ぎける。其行裝、三韓征誅以後の壯觀と、老若男女に至る迄、頸を延べてぞ見物す。先づ一番は福島左衛門大夫正則・同息刑部正元・同掃部正頼・池田三左衛門輝政・同備中守長吉・同吉左衛門・堀尾信濃守忠晴・長岡越中守忠興・同息與一郎忠利・中村彦左衛門尉一榮・京極修理亮高知・淺野左京大夫幸長・稻原藏人通茂・田中兵部大輔・同息民部長顯・山内對馬守忠豊・藤堂佐渡守高虎・同猶子宮内高定・加藤左馬助嘉明・中川修理大夫秀重有馬玄蕃頭豊氏・蜂須賀長門守・生駒讚岐守正俊・寺澤志摩守廣高・織田有樂齋・同息河内守長孝・富田信濃守信高・古田兵部少輔信勝・同織部正重勝・金森出雲守重頼・同法印・九鬼長門守隆尙・徳永左馬助・戸川肥後守正則・天野周防守景俊・分部左京亮政壽・小出遠江守吉晨・市橋下總守昌成・石川玄蕃頭貞政・桑山相模守一貞・宇喜多左京允成正・皆川山城守信政・成田左馬助氏憲・仙石越前守忠俊・水谷左京助勝俊・眞田安房守昌幸・同伊豆守信幸・同二男左衛門佐幸村・森右近大夫忠政・山川民部朝信・多

賀谷左近頼資・日根野徳太郎吉明・松平飛驒守忠昌・松倉豊後守・佐久間河内守政豊・龜井武藏守茲經・秋田城之助實秀・佐藤三河守筒元・鈴木越中守重愛・黒田甲斐守長政・山名禪高・信井伊賀守定次・一柳監物直盛・仙石少貳秀久・同息兵部少輔忠政・池田備後守知政・同息彌右衛門・丹羽勘助氏信・舟越五郎右衛門・本田若狹守重氏・村越兵庫頭長谷川甚兵衛岡田勘右衛門・三好新右衛門・同入道爲三・津田長門守・同小平次・神保長三郎・秋山右近・赤井五郎作中川半左衛門・岡田庄五郎・能勢宗右衛門・森宗兵衛・箸尾半左衛門・兼松又四郎・柘植平右衛門・別所孫四郎・野間久左衛門・堀田權八・同若狹溝口源太郎・伊丹兵庫・山岡道彌・同息修理・奥平藤兵衛・河村助左衛門・山城宮内・平野九左衛門・落合新八郎・佐久間久右衛門・同源六・大島雲八・祖父江法齋・佐々喜三郎・野村喜太郎・遠藤左馬助・中村又藏・清水小八郎・石川伊豆守・都合其勢五萬八千餘騎、天地を轟して打出でたるは、音に聞えて夥し。是ぞ御代長久の始とぞ申しける。早江戸になりぬれば、公一々次第を點檢あらせ給ひて、限なく悦喜まし、諸將の長途を慰し、兵卒の疲倦をぞ休め給ひける。諸軍、公の慈惠を感じ奉りて、誠に睿智

武勇の賢君なりと、靡かぬ草木はなかりけり。右^かくて會津進發の軍法を議し、江府御留守の仕置を定め給ひける。即ち松平因幡守康元、御留守人^{るす}となし、石川日向守を御城代とし、板倉四郎右衛門を町奉行とし、伊奈熊藏御代官とし、其外諸士の番頭、門樓の警固、隙なく役所をぞ守らせ給ひける。

石田軍記卷之二終

石田軍記卷之三

石田治部少輔謀叛の事

内貪外廉、詐譽取名、竊公爲恩、令上下昏、飾躬正顔、以獲高官、是謂盜端と^かや。太閤秀吉の寵臣石田治部少輔三成は、江州石田村の地士佐五右衛門が子なり。然るに佐五右衛門、久しく此處に住すれば、村邑の長とぞ聞えける。或時に、其妻懷妊したりけるが、月滿する頃ほひに、煩ひ惱んで既に死に向はんとす。同國の長光寺觀世音は、昔し聖德太子の夫人、産の蓐に臨み給ふ時に、甚だ苦み疾ませ給ひて、百肢千節も碎け零つるが如く泣き悲しみ給ひ、祈願あらせけるに、觀音即ち大光明を放つて、夫人の家を照し給へば、誕産安全なりしより、長光寺とは名づけたり。是を念ひて、佐五右衛門彼觀音に參詣し、種々の願を結びけるが、即時に安産しけるこ

石田三成
秀吉に寵
ひらる

そ不思議なれ。即ち名を佐吉と付けて、限なく寵愛しけるが、早弱冠に及びしかば、智計群に越え、器量類あらざれば、父母の悦も彌増りける。家貧うして育やひ難く、近里の眞言寺へ、扈從にぞ遣しける。或時秀吉公參詣の折節に御覽じて、舉動い艶に、立居他に勝れて見えければ、即ち召して夜闈を同うし、玉枕を比べさせ給ひ、周の慈童、韓の東野が振舞をぞ作なしにける。其より次第に昇進して、廿萬石の大名とはなるとかや。秀吉公在位の日には、上意に阿り尊寵を媚び、太宰諮が讒を逞うし、世繼・扶蘇を殺すの暴逆をなしにける。之に依つて權勢年々に盛にして、榮華歳々に大なり。鹿を指して馬といはんも、怪むに足らず。然りと雖内府公は、寛仁大度の徳あつて、智信勇武備はらせ給ひける故、太閤も其徳貞を感じ給ひて、秀頼公の後見、并國家の政務等に至る迄、御頼ありて薨じ給へば、内府公も身命を顧ず、諸事の成敗、正しく執行はせ給ひ、和漢の書に闇からず、軍略の法には妙を得させ給ふ。物を扶け人を哀み給へば、天下の諸侯は北星に向ふが如く、四海の民は風に草の偃のすに似て、恩惠を戀したひて靡かぬ者はなかりけり。故に石田妬み忌む事際いきりなく、何とぞして

此大病を退治せんと、晝夜胸を焦してぞ案じけるが、また直江山城守へぞ牒し合せ、書をぞ遣しける。

六月廿九日之御狀到來、其表諸口丈夫被申付之旨、大慶不過之候。先書申入之通、越後之儀上杉御本領候間、中納言被下置候旨、秀頼公御内意候。彼國成次第、手段御油斷不可有候。中納言殿勘當而越後殘居候浪人歷々有之由、柳崎三河守・丸田左京・宇佐見民部・萬貫寺・加治等御引付御尤候。此節候間、聊不可有油斷候。堀久太夫方大坂奉公之志候。能登上條民部可指遣候。尙追々可申入候。恐惶謹言。

七月十四日

石田治部少輔三成

直江山城守殿

斯くて石田は、佐和山大垣の城普請をし、思の儘に塹壘を掘立て、武具・馬具・兵糧・矢種・玉藥に至る迄、山の如くに調へて、諸方に觸をなし、浪人を餘多抱置き、謀叛の用意とぞ聞えける。偕又京都より、似爲金匠人上手を尋出し、佐和山へ呼寄せて、金

三成兵を
蓄ふ

石田治部少輔謀叛の事

銀を夥しく存置き、旗を擧げ馬を馳らし、時に望んで足輕已下町人百姓等に、褒美の爲の用脚に、豫ての計策とぞ聞えける。折しも奥州の動亂彌頻なるの由、日々に聞えければ、帷幄の籌策已に成りて、勝つ事を千里の外に得たりと、譙周が思をなし、獨笑をぞなしにける。偕大谷刑部吉隆が許へ、使を以て申しけるは、近頃苦勞を憚ると雖、相談事急なる儀候。愚城まで來駕に於ては、千萬身に餘りて盡し難く思ふべしと、懇に言遣しける。折節に刑部も、奥州進發の爲に、一萬餘人を引率し、越前の敦賀を立ち、佐和山へぞ着きたりける。石田大きに喜びて饗應し、終つて後奥の亭へ招き寄せ、傍の人を遠除けて、二人首を聚めて私語ささやきけるは、世上の體を窺ふに、秀頼公の御事は、ありてなきが如く渡らせ給へば、眼前に是を見て、其儘に捨置かん事、且は不忠といひ、又は無念の至なり。假令事成らず、骸は曠原に曝すとも、此義を天下に遺しなば、草葉の陰なる先君も、嘸嬉しく思すらめ。今内府の威微なるを討たずんば、後必ず大山の勢をなしてん。其時には、龍を海に追ひ、虎を山に獵るが如くにして、如何で理を得ん。其時に及び、臍を噬むとも益あらんやと、忠を君に標あらはし

し、姦を人に譲り、趙高が沙丘に李斯を欺誑あざむき、上郡に蒙恬を喪はんとするの謀に、辯を逞うし舌を振つてぞ申しける。大谷聞いて首を低れて、暫くありていひけるは、御邊の鬱憤、一往其理あるに似たれども、今の時節、左様の事を企てらるゝは、石を抱いて淵に入り、薪を負うて焼野を行くに異ならず。其上先年諸大名の心に背かれし砌、既に大事に及びしかども、内府の首尾を調べさせ、數ならぬ某等、種々さまざまに取持つて、事なく卿安穩に暮らせるに非ずや。却て斯の如くの企を發されば、遺恨ある輩は、必定敵となりぬべし。怒に身命を失ひ、後代迄の嘲を取り給はんより、奥津へ發向せられんには如かじとぞ諫めける。石田重ねていひけるは、我此大軍を企つる事、全く以て我身の爲ならず。聊か君の爲にして、義に依つて命を輕んじ、恩おんの爲に身を捨つるは、是忠臣勇士の志なり。丈夫の一言、再び萬金にも易へじと、不通切ふつうきに色を變じて申しける。大谷聞いて、某病身なれども、遙奥州へ下らんと思ふも、天下無爲の爲なれば、暴虎馮河の族に、言を盡さんにはと、佐和を出で、濃州垂井まで趣きしが、流石年月交りし情も今更捨て難く、垂井に三日逗留し、平塚因幡守と相議

して、種々に諫言し、關東へ下向ありて然るべしと、再三強ひて申せども、石田終に承引せず。吉隆、心底には染まざれども、日頃刎頸の契斷金の交、今更約を返して見放つも、義士にあらず。是非なく石田に與力して、佐和山へぞ歸りける。三成斜ならず悦んで、則ち荷擔の輩、増田右衛門尉長盛・長束大藏大輔家政、石田治部は其張本として、相共に密談をぞしたりける。増田・長束一同に、偕如何計りて宜しかるべし。先づ面々本國に引歸り、籠城をや致すべし。但我々樞機の諸大名を密ひそかに語るべしやと、談話分明ならず。時に治部少輔進み出でて申しけるは、何れもの思策、尤其理なきに非ず。併し退いて遠慮を廻らすに、一先づ諸國を劫し、大坂へ呼寄せずんば、事成り難かるべし。其故は、樞機に應じて來る輩は、本より我々が内證を以て言遣すことなれば、彼是の心底を疑惑して、有無を明かに説く者あるべからず。諸方一度に馳せ集るに於ては、人の心自ら一統して、秀頼公の忠戰を、致さざる者はなかるべし。其上秀頼公の御印は、我等儘なれば、表に公の印を押し、裏に我々承るの連判を以て遣さんに、争でか遅滞せしむべき。此儀如何といひければ、一座同音に、

増田長盛
長束家政
石田三成
等陰謀

大軍大坂
に聚る

是に過ぎたる事あらじと、各評議一決して、すぐに密書を調へて、國々へぞ廻らしける。誠に當時の權を高うして、斯る奇恠を企て、諸士を欺誑して、己が身方に引入れんとの謀、不敵とやせん、莫大とやいはん。治部が無道類なし。眞實がましく僞文を巧み、則ち表には秀頼卿の御判を押し、裏には治部・刑部が兩判を加へければ、是全く石田が叛逆とは知らずして、同心の面々、在合せたる諸侯大夫はいふに及ばず、關東下向の人々も、或は濃州・尾州より引返し、或は三河・遠江より、直に佐和山に駈行くもあり。上方の騒動は、夥しくぞ聞えける。是に依つて早速大坂へ馳せ集る人々は、安藝黃門元就・同甲斐守秀元・吉川駿河守元春・岐阜中納言秀信・安國寺慧瓊・島津兵庫頭義久・同弟中務少輔昌久・同又八郎忠恒・筑前中納言秀秋・備前中納言秀家・長曾我部土佐守成親・同式部卿・法印鎮定・高橋右近長行・同九郎・有馬修理亮政純・桓見和泉守純昌・秋月三郎種長・相良宮内少輔頼定・福原右馬助・伊藤民部大輔祐慶・筑紫上野介廣門・久留米藤四郎秀包・立花左近將監宗茂・鍋島信濃守勝茂・太田飛驒守政信・熊谷内藏助直陳・木村宗左衛門尉・堅田兵部少輔廣澄・宗對馬守義知・毛利壹岐守

勝信・同豊前守勝長・小川土佐守祐忠・同左馬助・澤田武藏守・山崎左馬助・小野木縫殿助・小西攝津守行長・増田右衛門尉長盛・長束大藏大輔家政・平塚因幡守・戸田武藏守・原隠岐守・宮部兵部少輔・別所豊後守・木下備中守・石川掃部頭・南條中書忠成・脇坂中書・九鬼大隅守吉隆・多賀出雲守・荒木平太夫・石川備中守・奥山雅樂助・大友宰相義統等を先として、五畿七道の大名郡牧まで、都合其勢十三萬三千八百餘騎、同年の七月十九日に着到し、大坂の城をぞ堅めける。さて石田は、思ふ儘の相圖就りぬれば、諸將と相議して、關東へ申遣し、其返状を待たず、内府を討伐すべきとの軍談究めて、急ぎ濃州關ヶ原に於て一戦を遂げ、勝負を決せんとぞ勵みける。

兩御所爲景勝退治江戸御進發の事

内府公は、江戸に於て諸大名と軍令を議し給ひて、慶長五年七月十九日に、先づ黃門君を一番の大將として、結城宰相秀康卿・薩摩守忠吉卿・蒲生藤三郎秀行・同下野守忠朝・本多中務大輔忠勝・井伊兵部少輔直政・柳原式部大輔康政、都合其勢六萬九千三

家康江戸
を發す

百餘騎、天地を轟かして打立たせ給ふ。先例に任せられ、柳原は魁首たり。先陣既に佐久山・大田原に至れば、後陣は古閑・栗橋にぞ控へたり。公は廿一日の曉天に、御出馬あらせ給ひて、鳩谷に御宿陣なされける處に、一兩日以前より、諸軍低語きけるは、上方の鼓動專なる由、浮説止む事なし。然りと雖其實否未だ慥ならざれば、彌兩君は御駕を進めさせ給ひ、廿二日には岩付、廿三日には小山に屯し給ふ。爰に越前の堀尾帶刀吉晴は、以前遠州濱松の城主なりしを、太閤薨去の後に、公より越前の府中五萬石を加増し給ひて、去年入城する所に、會津騒動に依りて、一子信濃守忠晴を、遠州濱松より供奉させて、吉晴は、孫の勘解由・甥の宮内を府中に置き、則ち濱松に駈けて公に謁し奉る。君其意を感悦ましめて、見參最丁寧なり。吉晴に上意あるは、北國は、汝楯なりと思ひて手當なし。早く歸城すべしとありし故、辭するに及ばず、急ぎ越前に歸りけるが、三州二河に到りて、木村彌一右衛門に行逢ひたり。彼は東國へ通ずといひて、駈別れぬ。夫より暫く打過ぎて、加々野江彌八が向より來るに遭ひ、吉晴馬より下りぬ。彌八も則ち馬より下りて、良久しく物語しけるが、其

より打連れて、岡崎の旅店に入りて、少時茶を呑み酒を勧めて休息しけるに、刈屋の城主水野和泉守忠重は、折節所勞ありて、起臥穩ならざれ共、吉晴と兼約せし故に、刈屋より池鯉鮒へ出向ふ所に、吉晴は加々野江を同道して、水野が館にぞ往きたりける。扱三人、旅の疲を散せんと酒宴して、遊興を設け、るが、水野思惟しけるは、豫て彌八は、石田と昵近の親友なれば、景勝退治の御供に事寄せて、透間を窺ひ、公を窺ひ奉らんと謀ならんと悟りて、放ち遣らじものをと拳を握りて、加々野江に申しけるは、御邊定めて聞及ばれん。某加州大聖寺の城番に退るなり。斯入魂の上なれば、是より北國へ同道申さん。若彼地に至り、御働の武功あらんに於ては、我々公へ訴へ證人となりて、恩賞は莫大に行はせ申すべし。去來北國へ同道仕らんといひければ、彌八聞きて何の會釋もなく、腰を擡げて申しけるは、世間無爲の時にも非ず。今眼前に差當りたる會津の戰場をば捨置いて、腰脱役こしなげやくの加賀へは思も寄らざる事、得こそ參らじと、傍若無人に返答せしかば、水野も大に立腹し、是非共に同道致し、御邊が命を申請けんあきむらとありければ、彌八聞きて喟笑あきむらひ、無用の事な申されそ。加州

水野忠重
加々野江
彌八に討
たる

へは不通に下らぬぞと、無禮交りにいひければ、水野腹に据る兼ね、居體高ゐたけだかになつて、斯く貴邊が一命を貰ひ蒐る上は、弓矢八幡、北國へ同道せんと匂れば、彌八、すは我隠謀顯はれけるよと心得て、愛宕白山、北國へは下らぬぞといひさまに、脇指拽抜いて、水野を只一討にぞ截つたりける。吉晴は沈酔して、壁に倚掛つて唾りしが、驚き覺めて立たんとする所を、彌八持ちたる脇指にて、吉晴の頬先をぞ切つたりける。吉晴は太刀抜く隙のあらざれば、引組んで押合ひしが、彌八は音に聞えし大力、吉晴は老年といひ、手は負ひたり。是非なく取つて、其儘組伏せられたり。されども心利きたる名譽の勇士にて、何の間いつにや抜きたりけん、彌八が脇腹を、下より腕も碎けよと二刀刺透し、引翻して首をば討ちたりける。此騒に、外なる水野が家臣共、吉晴こそ逆臣にて、我等が主人と彌八とを討ちたるぞ。洩すな者共と、四五十人の侍共、一度に咄と切つて入る。吉晴は些とも噪がずして申しけるは、各始終の有様を、一々能く聞きて得心せられよ。我誤はなきぞと、次第を語らんとすれども、彌外いよより人數推重なりて、何の差別も聞届けず、上を下へと騒動して、無方に切つて蒐りしかば、

彌八を討
つ加々野江
彌八を討

吉晴足にて燈臺を蹴倒し、座中たちまちに黒闇くらやみとなれば、騒ぎ入りたる者共十方を失ひ、脚躪する其間に、吉晴は我供とも従の者共が中へ、赤あかになりて立退いて、危き命をぞ助かりける。微妙てたての方便、時に取りての功名と、諸人後にぞ申しける。偕水野が家臣共は、吉晴を討取らんと憤り罵りて、此や彼をぞ尋ねけるに、其夜座席にありて、觴酒ちやうしを提げ蟹とを握りし竹本庄助・鈴木與八郎等の水野が扈從、委細の通を知るに依つて、大勢を押止め申しけるは、我等座席にありて、始終を能見届け、様子を存知たり。卒爾つひばしし給ふなど、制しけるにぞ静まりける。吉晴は深手餘多負ひながら、直に刈屋に行き、今夜の始末を述ぶべきとありしかども、郎從共此に隨はざれば力なく、岡崎にぞ入りにける。一日逗留して瘡を繕ひ養性して、濱松にぞ還りける。水野が刈屋の家中には、委細の首尾をも詮議せず、吉晴逆心を企て、水野と加々野江を討ちたりと、無體に早馬にて、其夜中に野州小山にぞ注進す。兩君聞召し、兎角の御言葉もなかりしに、其頃吉晴の子信濃守は、黃門君の軍兵に勤仕してありけるを、逸雄の若者共、搦の捕れと言上す。君聞召され、彼者人となり、少年より能く知れり。全く以て苦し

からず。假令其父吉晴に逆心ありといふとも、其子別心なきに於ては、豈同罪に處すべけんや。されば古より、朝敵の親あれども、其子別心なきは、必らず救賞あるとかや。今の世にも、何ぞ其類なからんやと、上意ありしこそ由々しけれ。誠に賢察の明君かなと、諸軍感涙肝に銘じける所に、刈屋より早馬にて、和泉守が扈從に、鈴木與八郎・竹本庄助と申す者、其座にありて、始終の爲體委細に見届くるの條、先づ加々野江當座の口論に依りて水野を討ちしに依り、堀尾則ち彌八と組み、下より突殺せしとの旨、一々次第を注進し奉る。兩君聞召し、堀尾何の別心あらんや。早速彌八を突殺すの條、老年といひ、手柄拔群の至なりと、御褒美限なくぞ悦ばせ給ひける。其翌朝上使を以て、吉晴が武勇を感せられ、手瘡心元なく思召すの由上意ありければ、吉晴は身に餘りて、辱く思ひ奉る。其外信濃守を始めて此を承り、便ち御前に祇候して、御仁心の芳惠、更に盡し難きの由、感涙を流して言上す。偕彌八は、何故に水野を討ちたるぞと、其意趣を穿鑿するに、元來彼者は尾張浪人にて、隠もなき勇悍の大膽よてまの者なり。慶長元年の頃にや、江州膽吹山の谷間に、盜賊數多集りて、形を

鬼神の姿に似せて、往來の旅人を追却し、近郷の男女を劫すに依つて、野人山樵畏れ慄き泣き悲しみ、既に難儀に及べども、誰ありて是を伐平げんといふ人もなく、適其行粧を聞く者、忽疫瘡の如く、身心震ひ憚おそいてぞ恐れける。折節加々野江是を風はのかに聞きて、傍の人にいふ様は、聞かであらんは是非もなし。由を知りて、其儘置くべき様やある。去來いざ彼者を伺ひ見んと、密語つひやきて居たりしが、則ち樵夫の體に様を替へ、鐵棒を初にして、山深く谷底へ分入り、彼方此方と薪を樵る風情して尋ね求むる所に、峨々たる巖を楯に極き、大木の茂りたる其内を棲すまとして、大の男五六人、鬼面赤態を蒙り、皮の衣を被ひて、種々の手鋒を提げ、駈廻る分野ありのまは、實に鬼神の如くに見えにける。加々野江得と見果せて、愚民等が恐るゝも道理かな。さりとは片腹痛き事ぞかし。いで物見せんと獨言して、彼鬼の傍近く立寄りて、からくと笑ひければ、盜賊原是を見て、愚人夏の虫、飛んで火に入るとかや。誠に罾の巢に、鼠の入りたるも斯くならん。されども山賊の事なれば、身に掛けたるは綴なり。鎌より外に所得もなし。好々よし構ふな骨折にと、罵り笑つて居たりける處を、仕すました

りと、彌八踏込んで鐵棒を押取り舒べ、大將と覺しき大の男の眞向を、瓜破うりわにぞしたりける。残る奴原是を見て、逃がさじといふ儘に、思々の得物を引提げ、我れ劣らじと討つて懸る。彌八是を物ともせず、弓手妻手に薙倒し、南無阿彌陀佛と高音たからかに唱へ、扱々腰骨弱き鬼共かな。嘸閻魔土も愁歎ごさめれと、騒がぬ體にて歸りしを見、見る人聞く人押並て、鬼に勝る勇力やと、感せぬ者ぞなかりける。而るに年頃石田三成、甚だ饗應し入魂して、無二の友とぞなりにけり。是に依つて加々野江を招き寄せ、三成申しけるには、御邊今度偽りて東國に與力し、何とぞ透間を伺ひ、内府を一刀打つて給はり候へかし。若又其謀叶ひ難くば、何にては東將の内を殺害あるに於ては、御恩賞に子孫を取立て、如何様にも榮華にして世に出さんと、最懇いそに語りひ、頼み入るとぞ申しけるに、加々野江少しも辭退せず、日頃の好は斯様の爲なり。丈夫の一言は、萬金にも易へ難しとや。安き事なり。追付東國へ打越し、望を達し候はんと肯ひしかば、石田大きに悦喜して、委細の證文を書渡し、首途を祝はんとて、太閤より拜領せし貞宗の太刀をぞ、加々野江に遣しける。其證文、彌八が膚の守袋

にありけるを取出し、小山へ注進せしに依つて、水野と吉晴が功名、彌宜しく世上に流布すとかや。斯くすさまじき加々野江が、老年の吉晴に、やみく〜と討たれし事、天罰とやいふべかりき。

兩公從_二小山_一江戸御歸府の事

斯くて内府公は、小山に着陣あらせ給ひて、先づ常陸の大守佐竹右京大夫義宣が方へ、島田治兵衛を以て、今度景勝別心に就きて、敵味方の實否を問はしめ給ふに、佐竹陳謝し申しけるは、全く内府公に對し奉りて、何の遺恨あらん。殊更妻子共を大坂に留め置き候事なれば、曾て別心を存すべからず。然し乍ら會津の先駆は、少し思ふ所あるに依つてなり難し。又景勝に與する儀には、毛頭あらずとぞ返答しける。是に依つて水戸表を厭へさせて、兩君は會津へ攻入るべしとの軍議最中に、上方悉く叛逆の由、七月廿四日に、委細の注進聞えければ、疑ふべき所なし。如何はあらんと、御評定區々なる所に、宇都宮にて此由を聞召し、則諸大名相共に、小山の御

陣所へぞ急ぎ給ふ。其行程十八里の所をば、片時の間に打たせ給ひけり。兩君は密談事畢らせ給ひて後、井伊・本多を以て諸將に命じて曰く、逆徒の黨類に與力の輩は、是より馳上つて、彼方に加はるべし。遺恨更に是なし。又此方の一味の旁は、先會津を攻滅して善からんか、但し上方の凶徒を討夷げんかと、兩條を課せ談せらるゝに、満座の諸候口を緘_{つづ}んで、是非の沙汰もなし。時に福島太夫正則申されけるは、某に於ては、全く貳_{ふたごころ}なし。君の御出馬あらせ給は、清洲の城を明渡し、貯ふ所の兵糧共を、悉く捧げ奉りて、先駆は某仕るべしと、さも潔く詞を放つて言_まさるゝ。其氣色、忠義面に顯れてぞ聞えける。是よりして諸將異口同音に、御方同意と進み立つてぞ申さるゝ。兩君一々聞召し届けられ、先づ上方發向の評議一決して、江戸の城にぞ御歸府ありしかば、諸大名残らず、人質をぞ出されける。兩公手當の御閑談ありし處に、秀康卿宣ひけるは、會津表の厭_{おこ}には、身不肖には候へ共、某と蒲生とを召置かれなば、聊御氣遣なく、上方御進發然るべく候はんかと、言上し給ひける御風情、忠義の程、骨髓に徹りてぞ聞えける。折節本多佐渡守、御前に詰められしが、手を拍ち涙

を流して、御先祖頼義公にも勝らせ給ひて、能き若君達を持たせ給ふ、御果報の程ぞ有難きと、稱歎し言上あれば、君も一入御悦喜まし〜て、則ち此儀にぞ定め給ひける。是に依つて會津表の手當には、宰相秀康卿・蒲生藤三郎秀行・里見安房守忠義・佐野修理大夫信吉、此外上野・下野の軍勢は、結城・宇都宮を堅めけり。堀久太郎は、越後國に留めらる、村山因幡守義明・溝口伯耆守宣勝等を、是にぞ附置かる。最上侍從山形出羽守義光は、出羽の國に留められて、小國日向守勝頼附隨ひぬ。此等の諸將に、委しく軍法を談せられ、軍功ある輩には、恩賞行はるべきの旨を傳へられ、就中義光・秀治・秀行へは、上使を以て、恩地を兼約なされけり。伊達陸奥守政宗方へは、島田治兵衛を遣はされ、今度其方家中一同に、御方に軍忠の志あらんに於ては、要害の地に引籠り、出張あるべからず。此旨納得の上は、猶上意の趣を述ぶべしと申しければ、政宗は元來大勇の將なれば、島田に對しいひけるは、我等領令に塾居して、何の働になるべきやとて、快からざる顔色なりければ、島田申しけるは、御邊の働、心許なきことには更に非ず。上方の働の障にならんかとの仰なり。其段心得らる

るに於ては、猶公の命ありと雖、述ぶるに及ばずとあるに依つて、政宗并に家中一同に、如何様とも上意に任せ、二心なく忠義を盡すべしとありしかば、島田申しけるは、豫て内府の御内意は、今度の合戦は、勝利疑あるべからず。凶徒追討の後、會津を政宗に給はるべし。然れども此の如きの事は、御邊の心底如何なりとの上意なりと語りければ、政宗領掌して、堅約ありしかども、後に所以ありて、會津は蒲生にぞ給はりける。さて上杉景勝は、城の普請は上意を遂げ、在國は太閤御存世の砌、五箇年の暇を得たれば、別に背ける事もなければ、推付けて征伐の聞えありければ、弓矢取る身の、一箭發たでは叶ふまじと、則ち百卅萬石の家中諸士残らず呼集め、菩提處の雲洞菴と、謙信の御影堂の毘沙門堂に於て、一紙の起請文を書かせて、妻子をば會津の城中へ籠置き、口々には燒草を積み重ねて、嚴しくこそは固めける。偕景勝は、家老物魁ものかしらを呼寄せ、軍議を相究めらる。先づ會津に七口ある中に、南山みなかみ背炙せあひの口は會津を見下し、中々籠城なり難き處なれば、内府父子白川に着陣あらば、逆寄に仕掛け、野間の合戦を遂げ、勝に乗らば蹤を追ひ、江戸は舍おき、京都迄も切て上るべし。打負

けば、士卒諸共に白川を枕にして、討死を遂ぐべしと相議して、下野と奥州の堺、白坂より白川の間、草籠原くさこめがはらといふ廣野こそ能き戰場なりとて、竹木を伐拂ひ、地形を刈夷かりたひらげて、白川の城を、大手の一の木戸として、一番の合戦には、安田上總介二萬餘騎、一番には、島津下之齋三萬餘騎にて白川の城に籠り、内府兩公着陣あらば、草籠原に推出し、一戦を勵まんと、趙の陳餘、李左車が、韓信を待ちし勢をなして、上下の諸軍、皆經帷子血脈を首に掛け、若し勝つ事を得ずんば、白川の城へ引籠り、六萬の勢、同じ枕に討死せんと、勇み進んでぞ待つたりける。景勝は唯一騎、南山・背炙の口の峯に登り、長沼の地形を見下し、其より樵夫に案内させ、山中の小路鹿通の筋を通り、白川口堺の明神へ抜け、具に人數押の様を見分し思ひけるは、昔趙王趙歇が、漢の兵の攻め來ると聞きて、陳餘と共に廿萬の勢を率ゐて井陘に出張し、兵糧運送の路を絶ち、張耳三萬の奇兵を領じ、小路より敵の後へ廻りて、戦ひ惱ますの議あり。是ぞ今當りたる處なりと、料りて歸りけるが、内府の先魁榊原式部大輔康政、既に大田原に攻め來るの由を聞き、則ち八千餘を召連れ、潛に會津を出で、南山・背炙の口

を踰え、此山を背に當て長沼に陣取り、一戦の時に、山中より不意に推掛けて敵の後へ廻り、内府の旗本へ緊しく切つて蒐り、即時に勝負を決せんと、幄策をぞ廻らしける。爰に一宗臣等申しけるは、八千は餘に少勢なり。責めて三萬の人馬を用ひ給へと諫むれども、謙信以來の吉例なりとて承引せず。直江・齋藤・千坂等申しけるは、謙信御代の古兵共は、過半死に失せられたれば、物に狎れざる者のみなり。然れば小勢にては、勝利覺束なしといひければ、景勝申さるゝは、勝利を得るは、八千に過ぎざれども、皆の諫言餘儀なしとて、許容せられけり。是に依つて千坂・齋藤・新津・三室寺、三萬餘騎にて長沼へ駐着きたれども、景勝の指圖にて、三里跡に陣取らせてぞ待ち居たりける。爾る所に石田治部が謀叛に付、五畿内西國一圓に動亂し、伏見・歿落の注進、櫛の齒を拵くが如し。故に小山より引返し、江戸へ御歸城ありければ、景勝略相違はかりごとして、齧落あきれ果て、ぞ居たりける。若上方の騒動なくて、白川へ赴き給はんに、景勝不意に後より攻め來らば、誠に以て御大事、羊の角を、籬籬に突貫きたるが如くならんに、さりとて御運強き明君やと、諸人感じ奉りけり。

長岡越中守忠興の妻自害の事

五畿内・四國・西國の諸大名、咸く石田が謀を夢にも知らず、秀頼卿の命として、大坂表に馳集り、陸には軍馬の勢、整々として九蒼を響かし、海には大船を雙べ、浩浩として碧天に接して、夥しくぞ聞えける。偕城中には軍議一決して、先づ西の丸内府公の留守居佐野肥後守を追出し、毛利元就を入替へ、關東方一味同心の諸侯郡牧の人質を取つて、皆本丸に入置かんとぞ弁利きける。長岡が宅は、城邊近き所なれば、最初に使を以て、奥方早々本丸へ來り給へとありければ、忠興の室、詞を盡し理を立て、重々斷り給ふと雖、曾て許容なく、剩へ雜兵を押入れて、内室を奪ひ取らんとす。此由を奥聞き給ひて、少も騒げる氣色なく、家の後見小笠原正齋を呼寄せて仰せけるは、今日襲ひ來る不義の奴原、一往追散らさんは易けれ共、彼黨類は多勢にして、此方は無勢の事なれば、一端の勝利あるとも、終には力盡くべければ、我れ數ならぬ身といひ乍ら、忠興が妻として、時に至つて、賤しき雜兵の手に掛りなば、今の

世の嘲といひ、末代までの恥ぞかし。所詮自害して、黄泉の下にて怨を報すべし。相殘る家中の諸侍は、必ず自害すべからず。何とぞして一方を打破り命を全うし、主の行末を見届けよと、最懇に言付けて、跡能く仕舞へ正齋とありしに、早事既に急なれば、花の様なる若君の八歳になり給ふと、十歳の娘君と、誠に荒き風にも當てじと生立養育みしを、膝の元へ抱き寄せて、心本を刺透し、其太刀を取直し、南無と唱ふる聲と共に、慶長五年七月十七日に、果敢なくなり給ふは、哀と云ふも餘あり。正齋は甲斐々々しくも、自害し給ふ太刀を納めつゝ、其儘奥の持たせ給ふ長刀にて、御首を刎落し、則ち屋形に火を掛けて、小笠原河北・石見三人、諸共に自害せし最後の體、爽にぞ聞えける。さて又若君娘君の二人の乳母、懇に給仕せし四人の女房共是を見て、去來待ち給へ。死出の山・三途の川とやらんに、早くも御供申さん吾君といふ儘に、焼立つ中に飛入りて、夕の煙と共に立去りしを、聞く人袂を繆り、見る者涙に沈まぬはなかりける。彼奥方の振舞、誠に勇士の女房は、誰も斯くこそありたけれど、其行税を感じつゝ、目を驚かし舌を卷きてぞ居たりける。總て武士たる奥方

の、能き手本と謂つべし。淮南子曰、嫫母は天下の悪女なれども、真正の名ありて美しき所あり。西施は天下の美人なれども、不潔の業ありて醜き所ありとかや。今の世の大身小身の婦人女子、多くは文君が夜奔りて相如と淫し、綠珠が身を投げて、君の前に死することを忘れたり。是に依つて辱を子孫に遺し、醜きを門葉に貽めらる。忠興の妻の如きは、鏡といふべかりき。是よりして諸大名の、人質をぞ止められけるとなん。忠興は東國にありて、此由を聞くよりも、恨み骨髓に徹り、府君の勝利を得給は、石田三成を微塵になさんものと、齒嚼はぎしりなしてぞ歎きける。背漢の王陵が、母を項羽に殺されて、王陵深く項羽を怨み、高祖に身を委ね、命を捨て、戦功ありしを、今忠興に思合はされて、理とぞ聞えける。是ぞ又内府公、御利運の祥瑞とかや申すべき。

伏見落城の事

去程に石田三成は、帷幄はかりごとの策、水に車を巡らすが如く、風に舟を發はなつが如き思して、

諸大名に會合し、伏見の城へ取掛けて、速に攻歿せめつよさんとぞ議りける。先陣の大將には、筑前中納言秀秋、備前中納言秀家、島津兵庫頭義久、毛利輝元、増田右衛門尉長盛、長束大藏大輔家政、其外弓鐵炮の頭を相副へて、都合十萬餘騎とぞ聞えける。伏見の方はいふに及ばず、近邊の在々處々に至るまで、周章翊あわてき色を失ひ、資財雜具を持運び、上を下へと翻かへしつゝ、泣叫ありさまぶ形勢は、如何なる大風洪水も、是には勝らじとぞ見えにける。斯くて七月十五日、伏見本丸の大將鳥井彦右衛門尉元忠、諸將を集め申しけるは、近日凶徒大勢押寄すると風聞あり。御方は無勢の事なれば、九牛が一毛とやいはん。然れども合戦の習、必ず勢の多少には依るべからず。運の通塞、士しの剛臆ごうおくに依つて、勝負を得ることなれば、今度各持口もくぐちに於て、命を塵芥よりも軽くし、名を萬代に思ひて一戦を勵み、忠を盡し給へと軍議決して、先づ内府公の御臺所女中、君達を退け奉らんとぞ評定しける。爰に府君會津發向の折節に、鍋島加賀守直茂に仰せけるは、若東國へ發赴せば、女中、君達を頼み置き給ふとの上意ありし時、直茂承つて、幸に三千の人馬、國元より引越し候へば、御心安かれ。警固し奉らんと、

領掌申上げらるれば、則御盃を賜はりて、内府の君も御快く立たせ給ひける。是に依つて加賀守警固を承つて、女中・君達をば、京都の方にぞ退け奉る。儲鳥井元忠は、今は心安しと、諸將に酒肴を勧めつゝ、早用意し給へ旁と、物の具を肩に引掛け、胃の緒をしめ、馬を陣場に牽出し、寄せ來る敵を、今や〜と待け居たり。斯る所に十萬餘の軍兵共、四方八面より、一度に咄と音を揚げ、金鼓の聲地を動かし、鐵炮の音天を響かして、百千の雷の落つるが如く、須彌も碎けよとぞ打掛けたり。鳥井櫓に上りて見ければ、敵の勢、稻麻竹葦の如くに圍みたれば、木幡が嶽も宇治川も、平地にやなりぬらんとぞ怪しまる。扱寄手は揉みに揉うで、七月晦日の子の刻より、緊しく夜を晝に續いて攻むれども、城中の軍兵、身を捨て、防ぎ戦へば輒く落つべきとは見えざりしに、江州永原の軍兵共、俄に心替して、松の丸より、夜の中に敵を引入れたれば、續いて秀秋の軍勢、雲霞の如くに亂れ入り、関を上げけるに、城中の諸士、思ひ寄らざる事なれば、前後を取巻かれて、大半討死したりける。鳥井が兵卒、其次第を見届けて、元忠に、斯様々々の仕業にて、内より破るゝ事なれば、落城は程あらじ。人手に掛り給はんより、早く御自害候べし。則御供申さんと勧めしかば、元忠聞きて、昔より大將たる者の、敵に圍まれて自害を急ぐは武勇に非ず。叶はぬ迄も戦うて、一人なりとも敵を討たんこそ本意なれ。然れども我れ味方が原にて、信玄の戦に創を蒙りしより、歩行合期し難しと雖、最後の軍に目覺まさんと、八月朔日の早天に、本丸の城門を押開き、兵卒に扶けられ名乗りけるは、是へ出でたるは、内府の御内に、昔味方が原にて、甲斐の信玄と一戦を遂げ、數箇處の瘡を被りて、合期なり難き鳥井彦右衛門といふ者なり。最後の思出に、一戦仕らんといふ儘に、四尺餘の大太刀を、眞向に差翳し、兵卒を鶴翼に備へ魚鱗になし、是を專と闘ひて、虎鸞・輪違・車切・毒龍・眞影・拂截・飛越え・跂超え、右往左往に薙廻つたる形勢は、桓温・張公・諸葛孔明が働も、是にはいかで勝るべきと、舌を震うてぞ懼れけるが、十餘合まで透間もなく戦へば、深手薄手数知らず、身は唯朱に染かへり、太刀を逆手に取直し、今は天運是迄と、さも花麗はなやかに、腹を切つて死したりしを、譽めぬ者こそなかりけれ。松下主殿助・同五左衛門尉も、俱に討死をぞしたりける。其中に、西の丸を預りし内

大坂勢伏
見城を攻
む

鳥井元忠
戦死

藤彌次右衛門が死生、明白さだかならざれば、兩君の御氣色宜しからずとかや。又若狹少將勝俊は、西の丸の加勢にて座せしが、諸將と不和なれば、敵の未だ襲ひ來らざる以前、伏見を立退きて、洛東の靈山に閑居して、其名を長嘯と改め、松風に吟じ溪泉に嘯いて、敷島の道に心を澄し、和漢の歌に、思を浮べてぞ住まれける。勝俊は、太閤政所の舍兄木下肥後守家定の子、金吾中納言秀秋の弟とかや聞えし。又家定の龜弟木下佐渡守は、兄と不和なるに依り、加藤清正を頼み、肥後の熊本にあつて、軍事を略はかりしが、太閤御逝去の後、肥前の國寺井の邑さとに住きて、鍋島の家中之なれりとかや。

石田軍記卷之三終

石田軍記卷之四

丹後國田邊城攻并立旨古今傳授の事

同五年の秋、石田三成、丹後國田邊の城主細川兵部大輔藤孝を攻亡さんと、帷策を廻らして、同國宮津の城主一色式部を招き寄せ、心を盡して饗應しければ、今は骨肉の思をぞなしにける。誠に緝微つりいぞにして餌えは明なれば、小魚之を食み、緝調ほりて餌香しければ、中魚之を食むとかや。式部は藤孝の妹婿なりしが、智慮短くして、三成が餌に掛つて、與せしこそ拙けれ。式部は、彼が秀頼公を守立てんといふに託たくせて、己れが天下を奪はんとするを夢にも知らずして、其謀はかりごとに欺かれ、藤孝と子の忠興とを、味方になせと勧めけるを宣むかつて、密に使者を以て、藤孝と忠興との方へ申遣しけるは、各吾等、太閤の厚恩莫大なれば、心を翻して、秀頼公の味方に屬し給へと、頻にこそ

は申しける。藤孝父子は、式部をこそは御方に附けん者と思はれける處に、却て案の外なる事なれば、惘然あきれてぞ居られけるが、其返答に、課越おほせるゝの通、如何にも秀頼公の味方に屬し申すべし。去年ら先づ此方へ來り給へ。對面の上、直に心底を語り合はせんとありければ、式部は委細を聞きて悦合へず、頓て忠興方へ行かんとぞ出立ちける。さて忠興は藤孝に申合せ、一色を田邊の城に呼寄せ、内府の御方に勸め、若承引なきに於ては歎に討果し、石田が一方の羽翼を鍛ぐべしと、密談してぞ待ち居たり。斯る處に一色來りければ、忠興對面して申されけるは、御邊能々思案を廻らして了簡せられよ。太閤の厚恩を報せんと思ひ、御子秀頼公を守立てんと思ひ給は、先づ石田を打亡し給ふべし。其所以は、彼石田が心底を推し察るに、秀頼公を守立つるといふに託せて、義兵を擧げ、却て秀頼公を囹にして、吾と中惡き諸大名を滅し、後日に天下を奪はんとするの謀計なり。仍つて内府公を敵とし、諸大名を輕無ないがしろにして、關白秀次公を失ひ奉り、筑前金吾を流言し、太閤に讒言して、浪人の身となせしめき。是れ其證據にあらずやと、拳を握つてぞ申されける。一色聞きて、さ

りとは大膽なる言分かな。東國方こそは、後日に必ず秀頼公をなき者にして、自ら天下を掌握せんとの兆、鑑に掛けて見え侍るに依つて、石田と申合せ、太閤の御厚恩を蒙むること莫大なれば、孤君秀頼公を守立て、先君の御厚恩を報じ奉らんと思ひ、一命を塵芥よりも輕んじ、忠義を盤石よりも重んぜし吾等を疑ひて、貴邊父子が高恩を忘れ、忠を失はんことこそ無慚なれと、あらけなく申しける。忠興聞きて、入らざる廣言立をいはんより、我等が言に従ひ、内府に興し、忠を盡されよと申せしかば、一色以外の氣色を損じ、厚恩を忘れ、敵になりたる東軍方には興せじとて、其目先、忠興を伐たんとするの様子にぞ見えにける。折節口論の最中に、忠興の刀の柄後へ廻りけるを、家臣に長岡佐渡といふ者を見て、用ある體にて忠興の背へ廻り、刀を蹴たる風情にて取つて戴き様に、刀の柄を、主の左の脇へ寄せければ、忠興心得て、拔討にぞしたりける。一色も最後ぞと、太刀拽抜きて打つて蒐る處を、忠興二の太刀にて眞向二つに討破りけるにぞ、終に空しくなつたりける。一色が家來共、此有様を聞付けて、主人を討たせて置くべきか。いで物見せんといふ儘に、百四五十人

の侍共、面も震らず切つて入り、東風おつまつ西風きまつ闊き叫んで、火花を散らして戦ひける。忠興方には、長岡佐渡・有吉武藏を先として、其外當番の士共、鎗長刀の鞘を脱し、鐵棒熊手を追取り舒べ打つて出で、此を詮と戦ひけり。其間に、田邊の諸家中の士共、我れ劣らじと駈合せ、内外より攻めければ、一色が侍共、一人も残なく、枕を並べて討死をぞしたりける。此事四方に隠あらざれば、石田聞きて肝を消し、大坂表の諸大名、色を失ひ見えにける。是に依つて石田申しけるは、細川父子、先君の厚恩を忘れ、秀頼公を背いて東軍に従ひ、一色を討ちけるこそ悪き所爲なれ。此上は逆臣といひ、一色が怨の程も悲しければ、急いで田邊の城主藤孝を攻亡さんと軍議して、小野木縫殿助・藤懸三河守・高田豊後守・別所豊前守・小出大和守・梶原伯耆守・生駒左近大夫等を先陣として、丹後・但馬の勢を相副へて、都合八萬三千餘騎をぞ遣しける。其頃忠興は、内府君に従ひて、關東に赴きければ、田邊の城には、藤孝が手勢計なるべし。勢の附かざる其内に、即時に踏歿ふみつぶさんと、八萬の兵十方より取圍み、一度に鬨を咄と擧げて、七月廿日より九月の十二日まで、晝夜を分たず攻め戦へども、本より期

三成、細川藤孝を攻む

したる城中の精兵共、緊しく四方を堅めつゝ、弓鐵炮石火箭を、時雨の如くに撃掛くれば、竹冊たけなばの仕寄も微塵になり、鐵の楯も次第に網の目の如くなれば、寄手せめあても攻詰んでぞ見えにける。軍半の事なるに、其頃公家にも殿上にも、古今集の傳授中絶えて、天子にも御傳あらせ給はざる所に、細川藤孝入道玄旨法印が身にありければ、若藤孝討死せば、日本の神道歌傳、永く絶えなんと、忝も後陽成院歎き思召して、時の傳奏三條大納言實條卿・烏丸大納言光廣卿に、賀茂の大宮司松下を相添へて、田邊の戰場へぞ遣はされける。兩軍相挑んで戦半なるに、勅使急ぎ輦より下りさせ給ひて、兩陣へ向つて仰せけるは、今度天子の敕使として、三條大納言・烏丸大納言、遙是迄來りたり。兩軍慥に承れ。今本朝の歌道の祕傳、鳳闕には絶えたる如くにて、武家に相續せり。抑古今傳授と謂つば、中古濃州なかのちゆうの士東下野守平常縁つねゆかりより、紀州の種玉庵宗祇に傳へ、宗祇より三條大納言逍遙院實隆卿に傳へ、實隆卿より稱名院公保卿に傳へ、公保より三光院實澄卿に傳へ、其より圓智院公國卿に傳ふ。公國早世の折節、其子香雲院實條、未だ七歳なりし故に、細川兵部大輔藤孝入道玄旨に傳ふ。藤孝

は文武二道に達し、義勇の名將にて、我師範たる圓智院の息實條卿に傳へん爲に、田邊の城へ迎取りて養育し、歌學神道盡く傳授しぬれども、未だ幼弱なれば、古今の傳ばかりを殘されける。實條既に成長に及ばれし故、帝都へ返し奉りけるに、天子の寵遇、他に超えて聞えさせ給へば、輔佐の大臣ともならせ給はんと思はれて、藤孝も悦び合へず、古今の傳授をも遂げて、師恩を報せばやと思はれし處に、高麗西征の觸あるに依つて、則ち異國合戦の用意に取紛れ、實條卿を呼迎へて、傳授せん隙のあらざれば、武士の習、何國にても討死せん事を計り難く思ひ、若し討死せん時に於ては、本朝の歌道の傳授永く絶えなん事を歎き、則ち古今の箱を、幽齋の孫鴛鳥丸大納言光廣に遣し、高麗陣の間、其方に預け奉る。若し討死致すならば、此箱を、實條卿へ渡し給はれとありて、一首の和歌をぞ送られける。幽齋、

人の國ひくや八島も治まりて再びかへせ和歌の浦波

藻鹽草かきあつめつ、跡留めて昔に返せ和歌の浦浪

古今の箱預り給ふとて返歌に、光廣卿、

萬代とちかひし龜の鏡しれいかでかあけん浦島が箱

斯の通りにて、高麗陣の時、藤孝入道玄旨は、筑紫の名護屋に詰められける。其子朝鮮にて軍功大なるを以て、秀吉公御遺言にて、豊前の臼杵の城をぞ加恩に預けられる。歸陣の後に、光廣より箱を返すとて、

明けて見ぬ甲斐もありけり玉手箱再び歸る浦島が波

御返しをとて、幽齋、

浦島や光を添へて玉手箱明けてだに見す返す波かな

と互に諷吟なして、傳授の箱を贈り返し、公家武家共に悦び合へる折節に、圖らず石田三成軍兵を催し、諸卒を遣して、玄旨が在城を取圍み、大軍緊しく攻戦ひ、落城近きにありと奏聞に達する故、驚かせ給ひ、玄旨若し討死するに於ては、本朝の神道歌道永く絶え、神國の掟も空しくなるべし。古今の傳授を再び禁中に殘されん爲に、敕使相向ふなり。此陣暫く引退いて、古今の傳授あらしめよと、宣旨委細に演べ給へば、兩陣畏つて、則ち戈を伏せ冑を脱ぎ、鳴を静めてぞ承りける。是に依つて兩陣

闘ひ止みぬれば、敕使玄旨の通を玄旨に仰せけるにぞ、入道法印有難き敕詔なりと、頓て本丸の城に請じ奉り、焼香灑水して、古今の箱を取出し、三神五社を掛け奉りて、祕密の傳授一言半句も残さずして、三條大納言實條卿に傳授せられける。其上に源氏物語の奥儀、廿一代集の口訣切紙、和歌の三神人丸の正體、八雲の大事、二時計が其間、丁寧に認めて、神國祕密傳授の印信とて、一首の和歌をぞ奉^{たてまつ}上られける。

古も今も替らぬ世の中に心の種を遺す言の葉

と讀みて、實條卿に對つて、古今の箱并に源氏物語・廿一代集の箱共にぞ渡し奉る。斯くて烏丸光廣卿も、次^{ついで}を以て傳授し給ふとかや。最^{いと}目出度を聞えける。玄旨法印は、古今の傳授、此時に永く絶えもやせんと、是のみ苦しみ思はれける所に、再び禁闕に遣し奉り、神國の光を彌雲の上に輝かすと、千喜萬悅、更に喩へん方もなく思ひ奉れり。偕傳授畢つて後、兩人の敕使は、大宮司松下を以て、寄手の大將共に、救命の趣を宣^{のたま}へさせ給ひけるは、今度敕使として、三條大納言烏丸大納言爰に向ひ下つて、藤孝入道玄旨法印に、天子古今の傳授ましませば、玄旨は則ち天子の神道歌傳の

國師なれば、此陣^{はら}邁^まく引取るべしと仰せければ、牙を噛みし小野木縫殿助・谷出羽守藤懸三河守、別所豊後守・小出大和守・杉原伯耆守・生駒左近大夫等を先として、寄手の軍兵共、何れも謹んで領承し、異儀に及ばず、圍を解きて兵卒をぞ引きにける。抑此藤孝は、尊氏將軍十二代の後胤、義晴公の四男なり。母は還翠軒義賢の息女にて、飯川妙佐^{いせうぞ}の娣^{むすめ}なり。萬松院義晴公、東山鹿谷に移住し給ひし時に、寵せられて懷妊し、男子を設けさせ給ひ、是を後に兵部大輔藤孝とは名けたり。義晴公の嫡男は義輝公、二男は北山鹿園院の周嵩、三男は南都一乘院門跡覺慶、四男は則ち藤孝なり。後には此妾を、三淵伊賀守に嫁せられて、大和守とは、別種の兄弟なりとかや。慈母の嫁する時に、藤孝も俱に行いて、三淵が繼子となりて育^{やしな}はれける處に、其頃泉州岸和田の城主細川右馬頭元常に子なし。幸に三淵と縁ありし故に、兵部大輔藤孝を養ひて子として、細川をぞ續がせける。細川は代々天下の大亂を鎮め、帝都を守護するの籓籬にして、將軍方執權の家なり。末の世に至りても、又玄旨法印文武兼備へ、殊更神道歌傳^{うけつた}祕極を受流^{うけつた}へられしこそ、彌彼家中興なれ。子越中守忠興、永岡と

名乗ることは、昔藤孝、京南勝龍寺の軍功ありし故、則ち彼在處永岡の庄を、信長公より、采邑の地に拜領せしに依つて、永岡とは名乗りけるとかや。

岐阜中納言秀信與石田一味の事

石公の曰く、姦雄相稱して主の明を障蔽し、毀譽並び興つて主の聰を壅塞し、各私する所に阿ねて、主をして忠を失はしむとなん。中納言秀信は、信長公の御孫信忠公の御子にて、岐阜卅萬石の城主なり。今度會津へ出張あらんと議し給ひて、家中の諸士を集めつゝ、面々其軍令を相定め、七月朔日に打立たるべき所に、石田が許より、河瀬左馬助を使者にして申しけるは、此度大坂表よりして、秀頼公御旗を擧げさせ給ふ間、貴邊御手引を頼み入らせ給ふとの上意にて、斯様々々と辯舌を巧み、信がましく述べ遣しけるを、秀信聞きて、一種の心智兩地の秋になつて、兎角分ち難く、夜に入りて、宗臣木造左衛門佐百々越前守其外家老中を呼集めて、石田が使の趣をぞ閑談せられける。大事の評定なれば、何れも耳を傾け口を噤んで、座中は唯鎮魂の

體にぞ見えにける。斯る所に木造申す様は、忠諫せざれば、良臣に非ずとなれば、其所存の通を、何れも了簡し給へ。先づ此度大坂方の儀は、偏に辭退し給ひて然るべきや。其故は、設令石田に御心寄せらるゝ共、既に會津出張の大軍を促し乍ら、石田が一往の勸に、早御同心とあれば、世間の聞え輕々しく、其上是は彼黨が逆叛も推察せしめ候。軍識にも、主察異言乃觀其萌とあれば、宜くも存せず。御家の大事、必定なからんかと覺え候。能々智謀を廻らされ、使者を好きに饜應し、追付此方より返答あらんと、御歸し候はん事然るべしと言上すれば、何れも此儀に一同して、各御前をぞ立ちにける。秀信獨り居て思案せられしが、心にや叶はざりけん、近習の出頭人入江左近・伊藤平右衛門・高橋一徳、彼三人を招き寄せて、委細を密談ありけるに、左近が曰く、大坂の奉行は言ふに及ばず、西國・四國の諸大名悉く一味の上なれば、天下一統に、大坂方の下知に隨ふべき事、疑あらざれば、彌會津出勢の儀を止められ、石田に御同心に於ては、以後の御爲繁昌ならん。早速御許容の返事仰せられれば、石田感悅斜ならず思はれんと、三人の者共、異口同音に申しける。秀信實にもと得心

あるこそ滅亡の基なれ。翌日自筆の返簡を以て、石田が方へぞ送られける。さて其後家老共登城の折に、秀信申されけるは、彌大坂方に一味をなし、其旨書札を調べて、今朝石田が許へ贈らるゝの由物語ありしかば、何れも驚きて、兎角料簡にも及ばず、急ぎ退出して相談しけるは、亡父信忠公の遺言に任せ、家中大小となく徳善院の下知を受けて、執行ふ事なれば、彼方に訴へんと、則ち木造百々兩人、密に岐阜の屋形を忍び出で、早打にて上京し、徳善院の數寄屋に於て對面を遂げ、右の次第を具に演べけるを、玄以聞き給ひて仰天し、是ぞ御家の破滅、天魔惡神の所爲なり。各一命を捨て、諫言し、過くも會津へ出陣なし給へとあるに依つて、兩人委細を承つて還る所に、秀信は佐和山へ越し給ふとて、鳥本の宿物騒しき様子を聞きて、すは是非に及ばざる事共かなと思ひ、凌び通らんとするを、石田豫て斥候を遣し、兩人出京を待ちて、路次に人を附置き申しけるは、秀信も近日打越され候。是非に佐和山へ立寄りれよと留むれば、強ひて辭退もなり難く、彼地に行きしかば、種々の饗應にて、三成兩人に對面し、今度秀頼公、大軍を思召立ち候に付、中納言殿を御頼あるの條、各も得心候て、主君と俱に軍功を盡さるべし。恩賞は望に任せ沙汰し申さんと、太刀黄金を當座の引出物と出しけるを、兩人の者、忝しと領掌して、最早堪忍もなり難く、一太刀と思ふ所存は頻なれども、若仕損する者ならば、秀信の御爲如何と思ひ、進む心を引留め、佐和山を出立ちて、岐阜にこそは歸りける。彼者共は、餘りに胸を据ゑ兼ね、私宅にも立寄らずして、其儘直に登城し、物魁家老分の者共を呼集めて、徳善院玄以法印の心底口上の趣を委細に披露し、當家の興廢、唯此一舉に極まりぬ。然る上は、各存念遠慮なく申さるべし。多分の方に付きて、料簡致すべしと申しければ、飯沼十郎兵衛進み出で、熟思案仕るに、今度佐和山へ打越し候事、以の外卒爾なる上なれば、關東御出陣も、早なり難き所なり。近日石田是へ來るべきなれば、願ふ所の幸なり。當城に於て三成が首を刎ね、關東へ御注進あらば、莫大の御忠懃たるべし。討手は則ち某に仰付けられ候へと、勇義鐵壁を徹つてぞ聞えける。滿座の諸士一同に、此儀最も然るべしと、齒咬をなして諫むれども、秀信、曾て承引なきこそ無念なれ。昔西魏の魏豹、許負といふ者が妄誕に欺かれ、沛公を背いて項羽に與し、天下を

三分にせんと謀りしに、大臣周叔諫めけるは、心を專にして漢に事へ給はゞ、天の祐あつて、坐おこなら魏國を保つて、王爵の貴きに居給ふなれば、人臣の望、恐らくは其上あるべからず。妄ことばに言を信じて、輕々しく兵を起し給はゞ、身を亡し家を失ひ給はんこと、此一舉にあり。願くは能く是を察し給へといへば、魏豹大きに怒り、我れ今大儀を思立つに、斯く不吉の言を出して我心を亂すは、汝必ず漢に内通して、我を滅さんと巧む者ならんと罵るを、周叔聞きて、臣久しく大王の厚恩を蒙る。安ぞ異心あらんや、今忠言を以てすれども、敢て用ひ給はず。後日に必ず悔え給ふなといへば、魏豹益怒つて、左右に命じて追出させける。其後沛公の臣酈食其は、故舊の情を思ひて、魏豹に往きて説きけるは、大丈夫は、心兩つ持つべからず。事反復すべからず。貳ふたところある時は、疑多くして敗を取る。反復多き時は、事輕々しくして辱を取る。先生初め楚に従ひ、久しからずして漢に降り。今心に不平を懷いて、又謀叛せんとす。何故に反復多きや。恐らくは敗闕あらん。況や時の勢を論ずれば、楚は勢大なれども、暴にして愚なり。漢は勢微なれども、寛にして大智あり。好し愚人は楚を強し

とすれども、智ある人は、楚の了つひに滅びて、漢の方に興らん事を知つて、其萌きざしを見て、興亡安危論ずることを待たず、青天白日の明かなる如くなれば、先に漢に事へ給ふは、誠に計はかりごとを得たり。今又萬全の漢を棄て、危亡の楚に興せんとよたところの貳ふたところを懷き給ふは、是豈大丈夫の所爲ならんや。早く兵を調へ心を專らにして、漢に事へられれば、自然に安く富貴を保つて、永く魏王の位を失ふことなけんといへども、魏豹敢て従はず。我既に此の如く思立ちたれば、争でか心を動さんや。縦ひ蘇秦張儀再び生れ來て、晝夜説くとも、此心移すべからず。先生も言を費さるゝ事なかれとあれば、酈生も叶はざるを見て、滎陽へぞ歸りけり。果して灌嬰曹參に、馬の上にて生捕られたり。秀信も、木造や玄以法印の諫言を受けずして、東漢の内府君に背き奉つて、西楚の三成に與力し、岐阜の城の麓なる瑞龍寺山に、三箇所の砦を構へ、石田が援兵と言觸らし、檜原彦右衛門・同息左京河瀬左馬介・松田十太夫に、三千餘騎を相副へて、堅めけるぞ不覺なれ。木造・百々が、周叔・酈生に習つて諫めし言の葉を、後に八月廿三日の落城に思ひ出されて、涙に暗くられ給ひけるこそ愚なれ。

江州六角右兵衛の許へ從大坂遣使者事

去し七月廿一日に、秀頼公の御下知として、江州先方前右衛督義郷が許へ、使者を以て申されけるは、今度北國表の大將として、發向あるならば、本領は相違なく安堵たるべきの旨、三成已下の諸奉行連判の狀をぞ渡しける。義郷は、連牒を披き閱て、委細を聞届け、使者に對面し申されしは、今此砌に臨んで家人共を召集め、軍兵を催し、北國表の大將をせよとや。誠に以て三成には、能くも似合ひたる料簡の催促なり。是ぞ一揆とやいはん。何か是に過ぎたる恥あらんと、殊の外に氣色を損じ、則ち使者をば斬つてぞ捨てたりける。楮此義郷は、關白秀次公伏誅せられ給ひし時に、石田が讒言に因つて、浪人せられしとかや。今度の振舞、實に道理なりと、諸人も密語しけるとなん聞えし。大坂方の僉儀には、此度義郷、北國へ發向あるならば、國中の諸卒駈集まつて、手痛き一戦を勵まんと思ひて、彼地に打越さんは必定なり。さあらん時には、其跡は人少にて、要害もあるまじ。其上味方に固むるなれば、心安く國

六角義郷
石田の使
者を斬る

國への便をも通すべしと、范亞父が計も戻かしく憶ひて申遣す所に、案に相違しぬれば、則八月二日の夜諸將寄集りて、先づ前田肥前守利長が、關が原へ上らば、防がん手當、延引に及んでは凶かりなんと、義郷が替に、山口玄蕃・同息左馬助・成田庄左衛門父子四人を大將として、都合其勢一萬餘騎、加賀・越前の境なる、大聖寺の城に差向けんとの評議區々なる處に、小西攝津守行長申さるゝは、會津表、形の如く難儀に及ぶと聞ゆれば、東國・北國の手當は遅からぬ事なり。先づ急いで近江の逆徒等を退治あらんこそ、然るべく存候。義郷假ひ御方の催促に應せずとも、使者を斬るといふ事やある。前代未聞の所業なれば、片時も遁すべきに非ず。若是を其儘聞さなば、以後の狼藉、算を亂すが如くならん。早速軍兵を馳せて、渠等を誅伐せらるべしと、壘を敲き理窟を開いてぞ述べにける。石田聞きて、少時工夫しけるが、仰の通り最も義郷が仕方、奇怪千萬言語道斷なれども、彼は元江州の太守なり。今其人を討果さんと披露しなば、國中の者共昔の好を思ひ、必ず擧つて一揆を發すべし。天下の安危は、唯美濃と近江に縮る事なれば、風なきに波を起す様にて、却て味方の騷

となり、僅の敵に、天下を失はん事本意ならず。大志小節に拘はらずとあるなれば、今度西國方勝利を得るに於ては、義郷を踏^{ふみ}殺^{ころ}さんは、掌の中なるべしと、呵^{から}囉々々と打笑ひければ、何れも此儀に同じつゝ、北國手當の勢をぞ差遣しける。

眞田父子義絶して牛角となる事

去程に眞田安房守昌幸は、宇多下野守が婿にして、石田が相婿なれば、三成とは骨肉の交りとぞ聞えける。さて又次男左衛門佐幸村は、大谷刑部少輔が婿なれば、何れも石田が爲には、後門の狼前庭の虎の如くにぞ見侍る。是に因つて今度も西軍の方に與して、石田とは鐵壁の志となれりとかや。長男伊豆守は、本多中務が婿なれば、關東に勤仕して、勳功を拔んずれば、内府君の懇情も他に超えさせて思ひ給ひける。斯くて父子兄弟、關東・西軍に義心を勵せば、忽吳越の隔をなして、終に龍虎の間となるぞ哀なる。伊豆守、靜に思案しけるは、父子兄弟讎敵となるは、我朝に於て其例少からず。義朝・信玄等の大將、皆以て此の如くなれば、今更驚くべきに非ず。然れ

ども身體髮膚は父母に稟けて、此軀を相續し、父は天なれば、敵對すること豈其理あらんや。道に背いて立つべきの義なしと、種々に工夫して、何とぞ父を諫めて、一所に働き、共に軍功を盡し、君の爲に死なんこそ本意なれと思ひて、則ち安房守が許に行きて、詞を正し術を替へて、色々に理を立て、諫言を盡すと雖、昌幸曾て承引なかりしかば、力なく所詮仕官を棄て、如何なる深山幽谷にも隠れ忍び居ばやと念ひしが、此難儀に望んで退くといはゞ、内證の心底は知らずして、我身を遁れしと、諸人に嘲哂せられなば、却て大家に疵を付くるに似たり。其上不孝を先んずれば、又君を末になし奉るの不忠を懷く。進退兩楹にあつて、此に究れりとあぐみしが、父も天なり君も天なれば、忠孝に何の厚薄を存せんやと料簡して、退く意を取直し、我身を放^{ゆる}して、内府君に奉らんとぞ決しける。誠に兵者不祥之器、天道惡之。不得已而用之。是天道人之在道、若魚之在水。得水而生、失水而死と、伊豆守が天道に於けるは、魚の水を得たると謂つべし。今度父子兄弟三人、龍虎獅子の勢をなして、下野の小山までは、内府君の御供し下りける處に、石田三成が羽書を飛して、眞田三人に

眞田昌幸
信之義絶

申しけるは、其許の亂軍は、豫て思ひ儲けたる處の幸なり。何とぞ透間を窺ひて、内府を討ち奉らるゝに於ては、秀頼公への忠節第一なるべし。其軍功には、伊豆守には上野國を給はり、安房守には信濃國、左衛門佐には甲斐國、三箇國宛行はるゝの由、誓紙を遣すと雖、伊豆守是を見ること、腐鼠の如くに思つて、則ち扒つんざき棄てたりけり。偕其後、前には會津騒動急にして心を碎き、後には上方の蜂起跨つて思を惱す所に、又石田箇條を認めて、安房守が許へ遣しけるにぞ、彌父子の義絶とはなりにける。三成が狀に曰く、

去三日之御狀、今六日子上刻至佐和山參着、令拜見候。

一、先書度々申入候、披見候哉。其國一箇國之仕置、貴所江被仰付之旨、輝元・秀家・増田右衛門・長東大藏・德善院等、自拙者可申達旨被申候間、其心得而、深志河中島・諏訪・小諸・申州迄儀、成程弓矢御才覺可被仰付候。何上方妻子有之衆候間、不可有異儀候。若於愚意之輩、押付成敗有之而可有拜領旨、各相談之上被定申候間、其旨可被仰付候。被移時日、則其詮不可有之候。但御手餘

衆、此方可承候。美濃衆可被差向之旨評定也。羽右近儀各別之遺恨候。其故御若輩之秀頼公掠、新地拜領、曲事被仰候。

一、會津江被飛脚差越、可被仰入儀肝要候。

一、越後之儀久太差而承引無之條、上方關國多候間、越後景勝被遣、久太上方拜領様有増候。

一、川中島之儀、御手餘候付、可承候。此方被仰付事可有之候。

一、羽肥前江戸置老母并家老之人質候故、其補之事候哉。于今御請慥不申、剩丹五郎左衛門手前人數出之由申付而、北國如形人數被遣候。羽久太上方無二之覺悟候。越後筋間越中亂入候申遣事。

一、丹後國之儀、一國平均所務半申付候。幽齋事色々附懇望、赦一命流罪候。長島越中事、破御法度、誑内府、申掠御若輩之秀頼公、新知取之條遺恨深故、彼妻子大坂居候、燒討被仰付事。

一、先書申候大坂西丸内府留守居之者五百餘人追出遣、伏見城、西丸移居輝元候。

其以後伏見城鳥井彦右衛門爲大將而千八百餘人置候各申談去朔日四方乘破、不殘一人討取、城中御殿此間雜人原踏荒候故、悉懸火不殘一字燒拂事。

一、内府會津佐竹敵被仕、僅三萬四萬之人數而抱分國十五城、廿日路上事成者候哉。路次筋之面々今度出陣之上方衆、如何内府次第申候、廿年以來太閤之御恩思替内府去年一年之懇切、秀頼公不忠仕、剩捨大坂之妻子等可申哉。其上内府此頃各差而懇意無之由承候。右分別無之、手前人數上方勢一萬計語而上候共、尾參之間可討取儀、誠天之與候。然則會津佐竹貴殿、關東袴着而亂入可有之被存候。唯被捨天道仕置見之間、上申事可有之。唯今遣候備如右可被相極事。

一、此書立載候衆、何無二之覺悟而可心安候。日本之諸侍妻子入置大坂之間、於仕置者可心安候。兎角手立不及愚意之輩、可討取覺悟專要候。此方仕置而明後尾州表、被遣之様、岐阜中納言與申談候。不可有御氣遣候。一手之筑紫衆、佐和山殘置、用次第可打出候。尾州表輝元人數一萬計、吉川安國寺召連、長東

大藏同道而昨日被打立候。其外勢州表書立之次第候。鈴鹿越被打出、輝元儀自然内府被上候者、濱松迄着之時分、人數二萬召連至勢州出馬可仕相定候。此書立之人數五三日以前、悉從國々馳上相交候。於仕置可御心安候。其上金銀玉藥料入用之事可承候。自秀頼公可被遣也。太閤御貯之金銀并闕地、何御忠節次第其々可被下之事。

一、今度伏見表手柄仕候九州衆、内府江州十萬石令割符、當座引出物金銀相添感狀被下候。

一、定而可聞及、水野和泉守三州池鯉鮒居候處、加々野江彌八出陣仕立寄致口論、彌八和泉差殺候其座、堀尾帶刀居合碍、具足被斬候、痛手而早相果體聞、帶刀新知取候事仕合相違存。中村式部病死之由吉事切々承候。御用無之共可預御飛脚也。御内儀方大坂御入、一段無事候。宇多河内父子當地爲留守居、今日當地被參候。下野事先日伏見之節、所取合而家中之者少々手負候得共、父子共無事、可御心安候。今度九州衆不、大形秀頼公御奉公振而抛命、無二之體見申事

候。輝元同前候。恐惶謹言。

八月六日

石田治部少輔

眞田安房守殿

斯くて安房守は、委細を見届けて、上方動亂の由を聞き、俄に上州犬伏の宿より引返し、伊勢崎に要害を構へて楯籠り、城をば緊しく堅めつゝ、寄せ來る敵を、今やくと待ち居たりけり。

前田肥前守利長攻大聖寺事附大谷刑部の事

前田肥前守利長は、東軍一味にて、加州金澤を堅めて、小松の城主丹羽長重を押へんが爲に、岡島備中守を三道山に遣しまも成らせけるが、同年八月三日に、利長は、大聖寺の城山口立蕃頭を攻めんと議して、兵卒四萬五千餘騎を引供して、小松の南三谷海道へ推出して、惣構を責破らんとぞ謀りける。舍弟の前田孫四郎利政は、二萬餘騎を率して、能州より取掛けて、諸手一同に攻入らんとぞ通じ合せける。其間に利長

前田利長
丹羽長重
合戦

申しけるは、先づ小松の城を攻落し、軍神の血祭して、御方を軍勢に競はせんは如何にとありければ、高山聞き、小松の城には、物に馴れたる長重睨み居候得ば、心安くはなり難き様に相見候由申しければ、利長も重ねての返答なかりけるが、爰に長重は惣構へ出で、町屋の上に登り見るに、肥前守が大軍、東は手取川・三道山より三谷に到りて、野も山も整々として、皆旗・長柄・長刀凜々たり。星を散らす如くに辟易す。味方の色も臆してぞ見えにける。時に坂井與右衛門、音を怒つていふ様は、勝負は大將にあつて人數に非ず、昔韓信、張良に怒つて、楚の勢雲霞の如くなるも、我は腐木くちぎの様に思ふといはずや。伊花糸目いざや醒まさせんとて、古田五兵衛に、千四百餘兵を淺井口に遣し、櫻木源太には、八百挺の鐵炮を相添へ、瀉の海へ船に乗せ、二方より、不意に利長が後へ回りて撃惱ませば、忽に後陣の前田孫四郎・高山南之坊右近をば、馬場村へ押取り込む。古田・櫻木勝に乗つて、頻に打立ちける程に、小松勢彌後陣に喰付けば、利長も難儀に及ばんと思ひ、則ち馬を駐めて牀几に腰を掛け、備を立直しける所に、丹羽長重は、南部無右衛門と寺澤勘右衛門を斥候もつみに出して、利長

が旗本を見せけるに、高山右近是を見、小松の斥候は軍略を知らず、物に狎れざる者なり。彼れ討取れと下知すれば、兵卒七八騎驅出でけるが、追失つてぞ歸りける。初め小松方より古田・櫻木打出でし折に、若し肥前守が軍兵、今井橋の方に回り來らば、則ち跡を切取れとて、伏兵五六十騎に鐵炮を持たせ、御幸塚みゆきづかの方に差置きけるを、斥候の南部・寺澤、物にや馴れざりけん、利長の人數今井橋に來ると思ひて、小松の城に取掛ると注進すれば、小松の城には大きに騒動し、長重は未だ町屋の上にありしが、注進を聞きて、則ち瀉へ出張せし古田・櫻木に、早々引取れと使を立つれば、兩人急ぎ小松に退きけるを見て、孫四郎・高山右近も、馬場村を駈出し、却て古田・櫻木が蹤に付きて、追へども顧みず、城に入りしかば、前田・高山も念なく引返しけり。小松には、寄せ來る敵を今や〜と待ちし處に、利長は城を後になし、大聖寺の方へぞ推回りける。長重不審に思ひ、斥候を呼びて問ひけるは、利長此城へは蒐らすして、西を指して打通るは、如何なる故ぞといへば、南部寺澤申しけるは、大呂村一屋にて見候へば、今井橋・御幸塚に人數伏兵是ある故注進すと。古田・櫻木大きに怒つて

曰く、其伏兵は、此方より遣し置きたる鐵炮人數なり。先刻淺井口・瀉の合戦に勝利を得て、利長軍兵を馬場村へ押籠めしに、さて〜是非なき仕合かなと、齒齧をなして啓えければ、長重も、以の外に斥候の者を白眼ねめ付けて、天晴希有のうらたへものと、まつくろになつてぞ怒りける。斯くて肥前守は、思の外手痛き一戦して鬪ひければ、高山がいひし事も符合せりと思ひ、小松を差置きて、志す所の大聖寺を責破らんと、兄弟一手になりて、六萬餘騎の勢四方より取掛け、一度に咄と音を揚げ、弓鐵炮やなりの響は、白山も碎け、立山も地に破れ入るかとぞ聞えける。斯くて城主山口玄蕃頭父子、并に成田庄左衛門・同喜太郎・飯田又六・松井宗助等一萬二千餘騎、城門を押開き、喚き叫んで切て出で、代州の夏悦・張同が勢をなしてぞ防ぎける。されども敵は六萬の兵、味方は一萬の勢なれば、叶ふべきとも見えざれば、遂に本丸にぞ取籠りける。前田利政之を見て、急に攻掛け、息をも繼がせず、揉みに按んで伐ちしかば、鐘の丸をも打破られ、防ぐに方便なく、織田孫左衛門以下五百餘人、枕を並べて討死す。寄手も、手負死人は數知らず。大將山口父子は、翌四日に自害をぞ仕たりける。

前田利長
大聖城を
陥る

此時に大谷刑部少輔吉隆は、鯖並に陣取りて、山口玄蕃が加勢の援兵奥山雅樂亮・木下宮内を伴つて、東國方の堀尾帶刀・吉晴が府中の城代堀尾宮内・同勘解由を攻めんと思ひ、越前の府中に押寄せけるに、兩方既に合戦に及ぶべかりしに、城兵異儀あつて、諸卒和せざれば、堅むるに堪へずして、大谷に和睦を請ひし處に、大聖寺落城の由、北庄青木紀伊守より告げ來れば、刑部大に驚いて、府中を捨置き、北庄の後詰をせんと旗を卷きけるを、奥山・木下等申しけるは、府中の敵を蹤に居おきなば、大なる害あらん。先づ府中の城を攻破りて、其後北の庄へ向はれなば、然るべからんといふを、大谷聞きて、北の庄落城の時は、小松の丹羽長重も、丸岡の青山伊賀守も、忽に力盡きて、味方の弱り千萬ならん。唯府中を此儘置く時は、其苦勞なく、能き留守居を置く如くなれば氣遣なし。北國手に入らば、府中は攻めずして取るべしと議して、誘いざな北の庄へ推詰めんと、堀尾が和睦を幸にして、府中の圍を解き、二萬七千餘兵を一手になして、月の夜を便とし、四日の丑の刻に、北の庄へぞ着きにける。斯る所に利長の縁者に、中川宗半ひねとといふ者、秀頼公の近侍なりしが、大坂より加州に下りけ

るを、大谷北の庄にて聞付け、則宗半を迎へ押止めて、是非をいはず、一通の謀書を調へ、利長の許へぞ遣しける。其文に曰く、

此度北國筋大谷刑部請取、四萬餘騎ニテ而取向候。一萬七千北庄口推詰、三萬餘船手而加州着岸、可ナ金澤攻取ヲ催之間、不可有御油斷候。恐惶謹言。

八月三日

中川宗半

肥前守殿

利長は是を披き閱るに、宗半は音に聞えし能書なれば、紛もなき自筆自判の狀にして、疑ふべきに非ざれば、誠ぞと心得て、八月七日に、細呂木ほろぎ・大聖寺より、金澤にぞ引きにける。是は刑部が利長を欺き、軍議を妨げんとの智謀なり。是に因つて大谷は、青木紀伊守と相談し、奥山雅樂亮と木下宮内とに、蜂須賀阿波守人數を率ゐて小松に到り、丹羽長重に對面し、軍議一決して、上田主水・寺西備中を加へ置きて、刑部は夫より關が原へぞ趣きける。奥山は北國別儀なければ、迎もの事に、上方へ馳上つて、石田と俱に働き、天晴武勇を顯し、名を萬代に揚げんものと思ひ澄して、疾

や遅しと、江州海津邊迄駈往きしが、早關が原敗北すと聞きて、則ち腰脱ければ、漸く直に京へ上つて髪を剃り、名をば宗巴と改めて、今出川に隠れ居て、空しく果てにけるとなん。

石田軍記卷之四終

石田軍記卷之五

前田利長與丹羽長重淺井暇合戦の事

斯くて利長卿、大聖寺に在陣ありしが、宗半むねはんが謀書に依つて、爰を立退かんと相議して、先手は加越の境、細呂木・金澤・上野・五本村・長崎邊まで到りて屯しぬ。其の時に肥前守の魁首山崎長門・高山右近・太田但馬長九郎左衛門四組引分つて、御幸塚に上つて陣を張り、九郎左衛門は殿後しんがりにて、跡より打たせて、丹羽長重が籠る小松の城を壓へ、本の道を攻入らんとするを、小松より見て、すはや利長寄せ來るぞと、城中も町中も、上を下へ翻しければ、則ち長重軍令を定めて、諸方をぞ堅めける。先づ丹羽五郎助は櫓に上り、敵の寄するを見れば、太鼓を撃つて諸軍に告げよ。坂井若狹は大手を守るべし。同與右衛門は、先陣たるべしとぞ約しける。斯る處に若狹申しける

は、若輩には候へ共、先駆を某に仰付けられれば、本望たるべしといひけるを、長重聞きて、汝は與右衛門子なれば、大手を申付くるなり。家老の子に似合はざるの願なりといつて、則ち長重は城を出で、町の家に上り、敵の安否を見るに、利長は三谷・本江へ掛り、三道山に引取り、小松鎮の四備は、御幸塚に陣をぞ張つたりける。肥前守が斥候歩卒の上坂主馬介は、今井橋まで出でけるが、小松方より伏兵を、大呂村に置く所に、伏兵と斥候と、早熊と猪との如くに睨み寄つて、鐵炮箭軍、岩石も碎け海岸も崩るゝ計に闘ひけるが、互に加はる人馬にて、大勢とぞなりにける。小松方は、宵より船を潟の湖に回し、合圖を定め、横合に船より上り、手痛く無二無三に戦へば、肥前守も打立たれ、上坂忽に敗軍して、御幸塚に引いたりけり。小松方も、是をば勝にして、相引にぞ仕たりける。倍利長の御幸塚の四段の衆、翌八日の早天に、三道山へ引取り、三谷へ廻れば、路遠して間違あり。天井橋・潟の湖を渡つて、淺井繩手へ蒐らんと、軍議一決しける所に、松平久兵衛進出でて申しけるは、淺井暇を引取らん事、偏に然るべからず。其故は、小松の城下に近うして、而も足場凶く、兩方深田にして、

路の廣さ僅に二間餘なり。斯る處を俄に取夾まれなば、味方の大難是に過ぐべからず。其上小松の城中に、言甲斐なき者共が籠つたりとも、一中も中ずして、おめくとは通さじ。御料簡あるべしと諫めけるを、山崎長門・長九郎左衛門・高山右近、此を聞きて、若輩といひ無功といひ、差出でたる儀なりとて、片腹痛き風情して、嘲り笑つてぞ居たりける。久兵衛重ねて申す様、何れも能々見給ふべし。此度小松の城より、敵の勢出でん事必定なり。其時は某唯一人、一番に鎗を入れて、唯今の面目を雪ぎ申さんと、廣言吐いてぞ立ちにける。司馬が曰、戦は、陣することの難きに非ず。人をして、陣すべからしむること難し。陣すべからしむることの難きに非ず。人をして用ふべからしむること難し。之を知ること難きに非ず。之を行ふこと難しと、利長の、理を枉げて通らんと宣ふは、行ふ事の難きとやいふべけん。爰に丹羽長重は、佐々七兵衛を、今井橋へ細作しよびに遣しけるが、早御幸塚の高山・山崎・長・太田、段々に打立ちて、今井橋へ出で、一屋より大呂村・北淺井・南淺井・本江へ掛りて、東の山崖迄引取るの由告げ來れば、長重が家臣江口三郎左衛門聞きも敢ず、物に馴れたる兵

卒七八百を引具して、大物見に出でんと、町口へ駈けゝるに、斥候は騎切りて來り、肥前守勢今井橋を越え、大呂へ出で、淺井繩手に掛るといふを聞きて、是ぞ天の與なり。追蒐け討取れ、其門開けと下知すれば、門番の古田五兵衛・櫻木助右衛門・長重の證文なきに於ては、門を開かずといふにぞ、江口は樊噲が勢をなし、眼を怒らかし、推參なり、我が出づるに何の科かある。其門開けといふ儘に、馬牽き寄せ打騎つて、八百の甲兵鶴翼になつて、大呂・一屋の北へ駈出づれば、肥前守の四段の備、魚鱗になつて、東を指して推通るを見て、右の方に備へて、小松へ由を斯くとぞ注進す。長重も則ち騎出でんとするを、水岡越後守・永原實報院、馬の口に取付きて諫言し、惣門の内にぞ控へたり。是に依つて城内より、究竟の兵古田五兵衛・坂井彌五左衛門・澤野次郎左衛門・佐々多右衛門・森野次左衛門・團七兵衛・松村孫三郎等、江口が手に加はつて、其勢千餘人、利長の陣と三町程隔て、長九郎が殿末に喰付きて、江口は旗を押立て、麾を振擧げて、撃てや者共と、鐵炮石火箭、雷の落つるが如くに打掛れば、さしもの金澤勢辟易して、危くぞ見えにける。長重も此音を聞きて駈出づれば、利長

淺井噯合戦

方、除口にてはあり、長重が加はると見て、崩れ立ちてぞ引きにける。江口は勝に乗つて龍が馬場まで追蒐けたり。古田・坂井・佐々・森野・團、適れ功名をぞ仕たりける。儲利長方の長九郎左衛門は、備を立直し、江口と暫く揉合ひける。其内に小松の城より、思々に驅出で、或は大呂・一屋へ馳集まる。坂井與右衛門・大屋與兵衛は五百餘騎にて、北淺井へ打出で、沼を前に當て、待掛けし所に、長九郎唯一騎、歩卒廿餘人にて、沼の東へ打ちけるを見て、則ち鍵押取り、沼を涉つて突掛りけるに、九郎は徐々と本郷の方へ引きにけり。江口は沼を阻て、南淺井と大呂との間に出張して、長が本郷へ引かば、早く告げよと斥候を遣しけるが、唯今なりと申來るに依つて、江口が内より、松村孫三郎、葦毛の馬に騎り、眞先に沼を打越えて、九郎が先備の中に騎込む所を、鎗玉に揚げて、馬より下に衝落し、深手五ヶ處負はせたり。既に首を取られんとしける處に、小松方より小池新兵衛駈付け、鍵にて突拂ひ、松村を肩に引掛けてぞ退いたりける。續いて森次左衛門、此を詮と切廻り、首二つ三つ打取つて、猶駈入らんとしけれども、膝口に深く鎗手を負ひたれば、小松方へぞ引きにける。江口

は旗を振つて進み入り、九郎が先備を追崩し、首數廿五まで伐取れば、長が勢も崩立ちて、本郷の方へと引きけるが、太田但馬守取つて返し、二千餘騎、山代橋の南三町程に、踏止まりて控へたり。其内より水越縫殿助唯一人、馬より下りて鎗提げ、戻橋の際に伏して、時々立上り、鎗を振つて、小松勢を招きける。城の兵是を見て、悪き敵の仕方かな。微塵になさんと進み出づるを、坂井與右衛門旗押立て、騒ぐな者共、能き合圖に鎗をばせんと制して駆せける所に、金澤方の松平久兵衛駆來り、山代橋の東にて馬より下り、水越が伏して居たる處へ往き、兩人一度に橋を渡り進んで懸れば、小松方より成田助九郎・吾孫子佐太夫、鎗提げて橋の上へ出向ひ、水越と松平と一つになりて、受けつ發いつ、附入つて突きけるを見て、小松勢の魁首に、拜衛次太夫・不破空兵衛・宮田小兵衛駆着けて、成田と吾孫子と鎗先を並ぶれば、但馬守が内よりも、井上勘左衛門・岩田傳左衛門・大野甚之丞、眞暗になつて、松平と水越に加はつて鎗を構へ、折敷きて睨み逢ひしを、敵味方諸共に、是ぞ北國一の見物と、手を握り汗を流し、齒咬して控へけり。さて松平立上れば、拜衛も進みける。續いて

兩方八人一度に立上り、松平は成田と合せ、拜衛は井上と組み、早拜衛を突伏せられたるども、嶮き場なれば、首を搔くこと能はず、兎角する處、八幡別當堯仙法印駆來りて太刀を抜き、拜衛が首を取らんと、一太刀切つたれども、烈しき鎗下にて、遂に叶はずして捨てたりける。水越は不破と出合ひて、無二無三に戦ひしが、不破は鐵炮に當つて倒れたり。是も嚴しき鎗先にて、首をば取らでぞ置きたりける。小松方は二人討たれて、足弱になりけるを、金澤勢、橋の上より七八間突立つれば、成田・吾孫子・宮田、引色に見えける時、跡に控へたる小松方の胴勢二百騎計、崩立ち騒ぎけるを、不破與左衛門踏堪へ、鎗を振りし防ぎければ、岡田縫殿助後より進み出で、吾孫子成田を押退け打掛りけるに、金澤方松平・水越・大野・井上・岩田引取りて、間斷になれば、岡田追駈けて、鎗を抛付けたり。されども胴勢、猶も崩れ騒いで靜まらざれば、櫻木源太母衣を掛け、馬より下立ち、太刀引抜いて、いざ成田・吾孫子に續けや者共と、勢懸つて進みけるに、肥前守が上坂主馬・鷹巢刑部も驅せ來れども、松平・水越も、物別れになつて引取れば力なく、共にぞ引いたりける。長重は先魁の鎗始を聞き、紫

絲にて威立てたる鎧を着、腹帶調度しめ、鍬形打つたる冑の緒をしめ、栗毛馬の太く逞きに騎り、金枝蔓の馬印に、紅の纒を懸け、淺井暇へ駈出でしは、韋駄天の如くにぞ見えにける。味方の軍兵、是に勇み進んで蒐りしかば、何かは以て耐るべき。太田も叶はじと思ひけん、本郷の方へぞ引退きける。江口三郎は、南部無右衛門、永原實報院二千餘騎、暇の路傳に、三谷本道へ出で、蓮大寺村の高き處に屯して、但馬が引取るを伐てや者共と、塵振擧ぐれば、二千餘騎一手になりて、時雨の如くに射立つるにぞ、金澤勢富田源太郎を始とし、手負死人は山の如くに見えたりける。高山右近は、後陣の戦を聞き、唯一騎引返しけるが、江口が深追して、蓮大寺にたぐと聞きて、是ぞ天の與、昔韓信、趙歇を攻めしに、趙王、陣餘李左車と、廿萬の兵を井陘に引きて出張しけるに、其跡に韓信騎卒二千人を勝つて、密に小路より廻し、山中に埋伏せて、城兵の出づるを見るならば、味方の軍兵を能々勇め揃へ、急いで跡より城の虚を伺ひ、攻入つて乗取れと下知しければ、早兵卒共後に廻つて、敵の出でたる跡に乗籠んで、趙のはたけ旗幟を拔捨て、赤旗を立て、緊しく門を堅むとかや。天晴彼圖はかりごとに乗り

たりと思合せて、使を太田・山崎・長が方へ遣し、早々引返し候へ。直に虚に乗じて、小松の城を伐取らんといはせければ、三人其儘備を亂し、驅還つて、高山と軍議しけるに、江口は是をば知らずして、猶蓮大寺に屯して待掛けたり。斯る處に坂井與右衛門・南淺井、長重が陣に駈けて、大敵前にあり、深追して、必ず敵の計に中り給ふ事なかれ。三道山の敵、虚に乗つて掛橋口へ乗入らば、味方の勢は敵の跡になり、城に入るべき様あるべからずと諫むれば、長重尤なりとして、小松の城にぞ引きにける。江口をも急ぎ引かせければ、坂井與右衛門は、五百餘騎にて萩谷に控へて、長重が歸城の左右をぞ待ち居たり。さて金澤の太田・高山・山崎・長が四段の備は、淺井暇へ打つて出で、小松を乗取らんと思ひしに、長重は勝を持つて、早城に引取れば、近邊には人音もせざれば、空しく三道山にぞ退きたりけり。肥前守は、淺井口の合戦最中なりと聞きて、三道山より馳せ來るに、長重が馬印を見て、すは幸なり。掛橋口より小松の城へ騎のり込んで、留主を攻取らんと、人數を呼びに、三道山へ使を立て、旗本一萬餘騎、金の熨斗の指物に、或は金混布の短冊を付け、光り渡つて馳せ來る。然れども長

重は城に入り、坂井は掛橋口を堅むれば、是非なく兵をば引きたりけり。今度坂井與右衛門が諫言は、范增酈食其にも増れりと、感せぬ者ぞなかりける。抑此小松の城は、惣構大竹の藪にして、三道山へ近く、天守もなく、搔上の櫓計りなりしを、此度金澤勢寄せ來ると聞きて、長重俄に天守を上げ、外廓門々に至るまで建並べ、鐵炮箭窓、思の儘にしつらはせ、構の大藪を伐捨て、其蕪を鍛ぎて、劔を立てたる如くにし、堅固に城をぞ守りける。淺井巖は、城より南十五町にして、又掛橋口は、良にぞ當りける。肥前守も豫て用意を聞き、流石長秀が子なりと感じつゝ、爰をば闊きて、大聖寺へ向ひけるを、最初高山が申せし言も、圖に合ひたりとて、私語してぞ申しける。丹羽長重は、太閤の御世には、拔群の武名あるに依つて、八十萬石の大守たりしを、佐々内藏助と一黨し、逆心の企ありと、家臣長束大藏大輔・戸田武藏守、秀吉公へ訴へけるに依つて、本領を歿收せられ、若州にて僅の所領を給はり、其後加州松任へ移されし。次で小松にて十萬石の領知をぞ給はりける。此時に大坂に居て、先手を國へ遣すとて、鑿・作槌・鋸等の道具を、千人前買ひ調へて下しけるを、家中の諸士共嘲

笑ひけるは、早速に入部の用意はなくて、謂れざる番匠大工の道具、何の役にか立たん。誠に八十萬石の所領をば失つて斯くなられしも、尤至極かなと、腹を押してぞ申しけるが、此般の軍の用意に、悉く入りければ、謗りし詞を引替へて、張良韓信にも劣らぬ大將かなと、譽めけるこそ笑しけれ。其後肥前守了簡に、長重は無雙の勇將なり。小松は要害の地なれば、假令合戦に利を得るとも、多く士卒を失ふべし。扱を入れて和せんには如かじと、使者を以て申さるゝは、内府君の御前は、能きに計らひ申すべし。唯偏に無爲の儀然るべき旨、慇懃にいひ送られしかば、長重も、當る所の理を察して、則ち和睦の儀を調へて、人質を取替せば、其より利長は長重を招請し、千肴萬酒の饗應にて、頃日の苦身勞情をぞ慰めらる。さて互に小松合戦の次第を語りて、遊興をば添へられけるとかや。以後にも軍咄の度毎に、淺井巖の事を思ひ出せば、今も汗をば流すとて、利長も長重も、戲言をせられしは、猛くも尤にぞ聞えけり。

前田利長
丹羽長重
和睦

勢州阿濃津落城の事

大坂には、七月十九日に、諸大將寄集つて、勢州表東軍方一味の城を攻歿せめつぶさんと相議して、阿濃の津富田信濃守信高を先づ伐たんとぞ定めける。則ち安藝宰相秀元・宍戸備前守吉川廣家・久留米秀包・長東大藏大輔・中江民部少輔・長曾我部宮内少輔・山崎右近進・蒔田權之助・松浦安太夫、都合其勢六百餘騎、八月廿三日、須臾に馳着けて、七重八重に押圍おつこりめ、関を咄とぞ揚げにける。城よりは音こゑをも合せず、遠箭を射かけて惱せば、寄手も心は勇み進めども、此城二方は打續きたる深田なれば、中々輒く攻落すべき様もなく、案じ煩ひてぞ圍みける。儲信濃守信高は、野州小山の御陣に在りけるを、内府仰せけるは、大坂より多勢を以て、勢州表を攻むべきとの用意注進あり。昔より東西の戦場は、必ず美濃・尾張なれば、若し勢州の通路易からざれば、東軍も難義なり。急ぎ本國に馳上りて、武勇を勵むべしとあつて、江州大溝の城主わけ分部左京亮政壽を相添へてぞ上せ給ひける。兩將は、三州吉田より、船百餘艘を揃へ

大坂勢阿
濃津城を
圍む

て、渡海する所に、沖中にて、大坂方の船大將九鬼大隅守が賊船に逢うたりけるが、彼賊黨共、早富田が船に、鎰引懸けて押寄せたり。富田騒がぬ男にて、船耳ふねみみに衝立上りいひけるは、先年秀吉公、朝鮮國征伐の時、九鬼殿も某も、俱に異國に趣きて、晝夜合戦に取結び、身命危かりし事數知らず。其折も、互に扶けつ助けられつして、目出度本國へ歸りたり。諸大名多けれども、其より刎頸の契約をなし。以後までも事あらば、聊餘所には見なさじとの誓なるを、旁も定めて見もし聞きも及ばれん。今日斯る振舞、後日に聞き給はゞ、主人も快くは思はれじと、富樓那の辯を以て説きけるにぞ、賊船共、誠ぞと心得て、御免々々といひ様に、綱を解き鎰をば放つて、稻葉が船かと見損せしと私語さぐりきて、遙にこそは漕行さうぎやうきけれ。富田・分部の兵卒共は、蘇生したる心地して、順風に帆を揚げて、萬里を一時と急ぎしかば、程なく津の城にぞ着きたりける。分部は、自分の館は要害悪しくて、抱へ難しとて、俱に津の城へ加はつて、東の口を堅めけり。吉田兵部信勝も、東國より八千餘騎にて、松坂の城に籠りけるが、敵未だ寄せ來らざれば、手勢を分けて、千餘騎を津の城に遣し、南の口をぞ持たせけ

る。同廿四日には、城中より兵卒を出して、西來寺の伽藍を焼き拂ひける處に、俄に風替つて、町屋に火移りしかば、炎一時に燹上り、無間地獄も斯くやあらんとぞ見えにける。折節に宍戸備前は、得たりや噫と東門に攻蒐れば、分部左京、鎗押取つて衝いて出で、只今寄せ給ふは、宍戸殿と覺えたり。分部左京参りさうと高らかに名乗つて、青龍半月に突結び、暫し戦ひけるが、宍戸を頓て突伏せたり。分部も、深手を負うてぞ引きたりける。輝元は塵振舉げて、西南の口を伐破り、三の丸へ亂れ入らんとしけるを、吉田が勢に分部も加はつて、防ぎ戦へ共、敵雲霞の如くに群がつて、太刀先を揃へて攻めければ、味方も足亂れて、我先にとぞ引く所に、毛利が奇兵、附入りせんと騎込みしを、富田が軍兵に、上田吉之丞といふ荒者、五寸餘の馬に騎り、三尺八寸の大太刀を、電光稲妻の如くに閃かし、刀八毘沙門の龍馬に騎つて駈ける風情して、敵の三の丸へ入らんと、門際迄、群り込んだる中に破つて入り、是ぞ豫ての思出と、四方八面に薙廻れば、さしもの大勢一人に切立てられ、嵐に木の葉の散る如く、一度に潑と引除けば、其儘城戸をぞ堅めける。敵も味方も、上田が分野を見て、

あつばれ一騎當千、偏に鬼神の身分かと、怖れて近付く者ぞなかりける。斯る處に常瀬山より、鳥銃石火矢を射懸くれば、兵樓殿守も打崩され、西來寺の餘煙吹掛かるにぞ、城も危く見えければ、城主信濃守、本丸の追手に駈出で十餘合まで戦ひしかば、佐々孫市、安塚平八郎等九人、枕を並べて討死を仕たりける處に、本多志摩守馳せ來り、四方の敵勢追散らして、富田に申しけるは、雜兵の手に掛り給はんより、本丸に入りて御自害あれと諫めて、防ぎ鬪ふ間に、富田は本丸へ入らんとする所に、毛利が兵に中川清左衛門、紫の纒を懸け葦毛馬に騎つて、信濃が跡より打つて、城に附入りせんと、大勢押し來るを、富田取て返し、鎗振廻し突拂ふ所へ、分部右馬助も駈合せ、爰を詮と鬪ひけるに、城中より容顏美麗なる若武者、緋威の鎧に、中二段黒皮にて威したるに、半月打つたる冑の緒をしめ、片鎌の手鎗押取り、富田が前に進み出で、踊り舉りて振廻し、受けつ搦んづ、西江水に構へて衝掛り、早中川をば突殺して、五六人に手を負はせ、残る奴原四方に押散らし、鎗提げて立ちし風情は、さながら牛若殿の古も斯くならんと、何れも目を醒して感じける。富田は定めて、分部が扈從

富田信高
の妻驍勇

ならんと思ひて、彼若武者は、左京之助の少年かと問ひければ、右馬之助申されけるは、曾て見知らず、左京が家の子に非ず。其上内冑を見れば、年頃廿四五にて、眉を抜き假粧し、鐵醬つけ臙脂さしたれば、必定女に極まりたりと言合ひて、富田引品に立寄りて、内冑を見入れたれば、彼若武者馳せ寄つて、未だ討たれさせ給はで、浮世に存命へ給ふかやといふを見れば、富田が女房なり。僮是まで參る事、討死し給ふと聞きしに依つて、同場に枕を並べ討死せんと思ひ、斯く支度して參りしに、御目に懸る嬉しさは、申すも愚なりと、喜び泣に涙を流さるれば、信濃守は肝を消し、御身如何なる事にて、斯る働や仕給ふ。先づ此方へ入り給へとて、本丸にぞ伴はれける。此奥方は、宇喜多安心が娘、隠もなき美人、心賢くありける故、此度の働も、義經の靜木曾殿の巴、山吹も、是には争で勝らじと、見る人聞く人驚かぬはなかりけり。儲寄手の軍勢は、術を盡し種々に攻むれども、城兵更に屈せずして、堅固に成つて緊しく防ぎ戦へば、虎口を少し退けて、廿五日の早天より、竹箒を以て仕寄り、翌日に至つて矢文を射、高野の興山上人の扱になつて和睦を調へ、城を明渡しぬれば、蒔田權之

富田信高
阿津津城
か開退く

助中江民部・山崎右京請取つて、番をぞ勤めける。富田夫婦は、同州の一身田專守寺に引入り、後に入道して高野山に在りけるを、關が原平均の後、内府君富田を召出され、戦功を感じ給ひて、伊豫國宇和島十萬石をぞ賜はりける。折節信濃が門に、何者がしたりけん、

城を退く信濃よしとは見えねども伊豫長閑に命信高

自關東使者行加藤清正事

其頃加藤肥後守清正は、肥後に在國して、天下の安否を思案しける所に、内府公より、飛脚を以て羽檄を遣し給ふ。則ち清正拜見を遂げ奉りて、委細の返翰を認め、家の郎に明石加兵衛とて、異國にても覺ありし者を相副へて上せけるが、四國の内にて惡風に逢ひ、鹽待して明し暮し居たりしに、大坂最員の淵なるに依つて、海上浦邊の番士共怪み思ひ、蟻の如くに集り、蜂の如くに群つて、仔細を語れと尤めける。加兵衛、才智の譽ある者にて、透間を伺ひ、其處を走り除き、或寺に馳入りて、所持の書箱

を取出し、火中せしこそ才角なれ。斯る所に大勢追來りしかば、急ぎ自害を仕たりけり。諸人あぐんで、何の仔細も知らざれば、言語を絶して歸りけり。明石が忠心比類なき武勇の所爲といふべきにや。昔時源九郎義經、奥州の衣川より、駿河次郎清重を以て、諸國の大名に廻文を遣しけるに、駿河、鎌倉の繁榮を一見せばやと思ひ、彼方此方を翔廻るに、梶原平三に見尤められ、遁れ難くや思ひけん、其儘火を鑽出して、義經の廻文を焼き、其身も即時に墓なくなりたりしを、上下押並べて、惜まぬ者ぞなかりしとかや。今明石が身の上に思ひ合せて、彼駿河にも劣らぬ勇士やとぞ申合へりける。

東西兩軍諸城一味の事

大坂一味の諸城、先づ桑名の城には、氏家内膳正、七千八百餘騎にて控へたり。濃州高須の城には、高木八郎兵衛。同福東の城には、丸毛三郎兵衛。同太田の城をば、原隱岐守八百餘騎にて要害し、又尾州犬山の城には、石川備前守。加勢の大將には、濃

大坂方に
一味の諸
城

州郡上の城主稻葉右京之進貞通、同息彦六一通、濃州黒野城主加藤左衛門、伊勢の關長門守、濃州岩手の城主竹中丹後守重門、都合其勢七萬七千餘騎、大坂の弓鐵炮を加へて楯籠るとかや。是皆秀信の軍令とぞ聞えける。爰に濃州長松の城主武市式部は、會津出勢の人数なりしが、引替へて石田に與力して、福東の城に加勢に往きしぞ不運なれ。福東落城以後、長松へ歸城せしかども、東國の大軍、赤坂に着到する其勢を見るに、紅白の旌旗天を輝し、金銀刀槍星を並ぶるが如くにて、野も山も紅錦を敷き、雲も天も玉屑を飛ばすに異ならざれば、武市も是に顛倒して、鎧を着るに力なく、太刀を帯ばんとすれば腰脱けて、八月廿三日の夜に入つて、漸々長松を引拂ひ、伊勢の氏家内膳、同志摩寺西備中と一所になつて、桑名の城にぞ籠りける。海上表には、九鬼大隅守、來島助兵衛、菅野平右衛門、賊船に取乗つて、伊勢・尾張の津々浦々を放火して焼亡しけり。

大津落城の事

斯くて京極宰相高次は、内府君に一味せしに依つて、關東御下向の時、高次名代として、家老の山田大炊助を、潜に關左へ下しける。伏見騒動の折は、大津の地要害凶しく、其上兵卒少くして、籠城なり難き事を慮りて、暫く謀を回らし、石田と一味の由を標し、北近江より北國へ發向せしが、東軍上方へ進發の由を聞付けて、九月一日より取て返し、江州前原より、終夜船にて上り、五十餘騎は、比良の麓より陸を打たせて合圖を究め、高次城へ入ると均しく、大津町を燬拂ひ、粟津の此方に逆茂木を引き、相坂の時に柵を振つて往還を遮り、緊くこそは堅めけれ。西軍方の立花左近は、其頃勢田に在城せしが是を聞きて、醍醐越に、大坂へ飛札を以て注進しけるは、京極宰相逆心して、頃日大津へ歸りて柵を振り、町を燬拂ひ通路を止めて、要害堅く守り候。早速踏歿ふみつぶさずんば、後の害ならん。某關が原に赴くも忠、大津を攻めんも亦忠なれば、如何軍議を伺ひ奉ると申しけるに、大坂よりも、立花が志尤なり。頓て多勢を差向けんとありて、久留米侍從・筑紫上野介義冬・南條中書忠成・毛利七郎兵衛元安・同輝元・石川掃部頭頼明・杉谷越中守・松浦伊豫守・多賀出雲守・宮部兵部・荒木平太夫・増

大坂勢大
津城を圍む

田作左衛門・高田小左衛門等を先として、都合其勢六百餘騎、九月七日より、大津の攻口へ、稻麻竹葦の如くに打圍み、琵琶湖も踏翻くつがへる程に、鬨を咄とぞ揚げにける。其よりして夜を晝に續いで、揉みに揉んで戦ひける。鐵炮の音は天に鳴渡つて、心も比叡ひえい入る様に思ひ、箭筈の響は地に轟きて、肝も三井に沿はず、夥おびやかしくぞ聞えける。遂に九月十二日に、三の丸をぞ乗取りける。此時に松浦伊豫守も、討死をぞ仕たりける。高次の家臣山田越中・赤尾伊豆二人、踏留まりて防ぎ戦へども、續く味方のあらざれば、念なく兩人共に二の丸へ引入りて、城中緊しく堅むれば、俄に落つべきとは見えざりけり。斯る處に寄手、三井寺より大筒にて、殿守の二重目を打ちたれば、松の丸殿の女中二人、鐵炮に中つて、吁うんともいはず、微塵になつてぞ失せにける。其有様に、松の丸殿も驚かせ、悶絶し給へば、御口に祕薬を入れ、御顔に冷水を洒ぎしかば、漸く蘇生あらせ給ふ。折節に輝元・増田が計ひにて、高野山の興山上人を大坂へ招き寄せ、一々次第を言合め、大津へ遣し扱せし故、九月十四日辰刻に、城を明渡して、高次は直に三井寺雲光院へ入りにける。是より前にも、和睦の儀ありと雖、高

京極高次
大津城を
開退く

次曾て承引なかりしに、此度の和睦は何故ぞといへば、二の丸の軍臣に、大坂と一味の者ありて、矢狭間を閉ぢて、鐵炮をも打たせざる故に、城中疑をなし、扱をぞ聞きにける。其者は、後西國邊に吟ささひ行きて、果てたると聞えける。君子は義を以て難きに死し、死を視ること歸るが如し。時に望んで臆する則ば、本意を失つて、我家に歸るが如きの勇を忘る。吁惜哉此人、勇を忘れたりといふべきか。

筑前中納言秀秋返_ニ忠于東軍事_一附諸將内通の事

今度中納言秀秋は、伊勢の津の城を攻落し、美濃に打出で、南宮山に城を構へ、要害の山取して控へける處に、關東より、徳永法印が許へ、折々飛脚にて、上方濃州へ出張したる敵方の諸軍を、味方に引入るべき智略を働くべき旨、仰せ含められしに依つて、徳永式部卿法印壽昌が方より、南宮の禰宜右衛門太夫を使にして申されけるは、天下の安否時運到來して、諸國の武將、東軍一味の志を通じ、贄を捧げ聘を獻じて、麾下に屬せんことを冀ふに、貴邊より曾て兎角の音信もなし。不審し。如何な

る御所存に候らん。多年の知音も、斯様の時節、互の是非を相談あるべき爲なれば、一往の儀あらんと待ちけるに、有無の便なし。誠に天下に人多しといへども、繼續といひ、智謀といひ、御邊に過ぎたるはあらず。是に依つて内府公、頼み思召すとの志、深切に候故、遮りて使者を以て申入るゝ所なり。今若し御方に屬し給はゞ、本領安堵の儀相違なく、且又何程の御望も達すべし。毛頭偽なきの段、誓紙を認めて送られけり。秀秋、彼禰宜を陣所へ呼入れて對面せしに、禰宜は立烏帽子に、大紋の直垂を着て、祇候したりけり。秀秋申されけるは、我等内府公とは、日頃別して懇に申し通せし事なれば、内々此方より使者をも進すべきと存する處に、却て返報になりたり。然し乍ら只今の口上、何とも心得難し。天下に身方の士なき間、頼む杯の事ならば、承引致す事もあらんに、諸國の武士附隨ふ程に、參れとの儀に於ては、得こそ參るまじけれ。其上斯様の使節には、名字正しき家の子などをこそ立てらるべきに、長袖の使者、以の外不審とありて、神文をぞ返されける。禰宜歸りて、法印に委細を申届くれば、法印熟思案しけるが、是は如何様、不通切よつぎなる返事には非ず。一

小早川秀
秋、家康
に與す

往武士の意地を含んで、申越さるゝと覺えたり。今一度促し見るべしとて、徳永法印、掃部を呼んで、一々次第を言合め、彼禰宜に相添へて、件の神文を遣しけり。元より秀秋も、誘ふ水あらばと思へしにや、頓て領掌し、東軍方に従ひ、忠義を抽んずべきとの神文に血判して、則ち掃部に相渡し、引出物として、せてん二卷掃部に與へ、黄金一枚右衛門太夫に給はりけり。斯くて法印は、仕濟したりと悦んで、此旨急ぎ關東へ注進し、早々御出駕あらせ給へと、申遣しける處に、公は早相州小田原迄御出張の砌にて、此注進を聞召し、大悦斜ならず思召し、徳永に御書をぞ下されける。

去廿六日之一書、委細遂披見所、其表種々被情入之由令祝着。今月三日小田原迄令出張候。早速其許可使出陣間、各有談合而御待九候。恐惶謹言。

九月三日 御判

徳永法印

偕其頃、毛利宰相秀元吉川駿河守元安、脇坂中務少輔安治、小川土佐守祐忠、朽木河内守利綱等は、初より池田輝政、淺野幸長、藤堂高虎を以て、合戦の最中に、裏切すべき

との旨をぞ内通せられける。三人は悦び合へず、公に由を斯くとぞ申上げけるに、君聞召し、御悦喜淺からざれば、則ち其趣を通じけり。仍つて御方に屬し、軍功を勵まされける。扱此外の大將達は、何故に返忠あられけるぞといへば、最前秀頼公の上意とあるに依つて、後先をも鑒みず、何れも此度と思ひ、武勇を磨き、催促に應ずと雖、天下の様子を見聞するに、石田三成反逆を企て、終には天下の權を、己れ奪ひ取らんとするの謀事、彌顯然すれば、諸將も今は悪き所爲なりと憤りて、其怨を晴らさんとの志とぞ聞えける。

東國軍勢上方に進發するの事

斯くて七月の末、東軍一味の上方勢より、江戸へ言上しけるは、石田治部少輔三成、備前中納言秀家、美濃表へ出張して、岐阜中納言秀信を相語らひ、國中の士卒を駈催し、岐阜と大垣とを根城にして、不破に新關を据ゑ、東海・東山兩道の路を差塞ぎ、西國・北國の往來を斷切りしに依つて、威勢孟賁が如くにして、眼光近國を眩し、事既

家康、江
戸城に於
て軍議を
催す

に大儀に及ぶの間、先づ奥州の軍を暫く差置き給ひて、急ぎ御上り遊され候へと、方方より同時に、櫛の齒を拽くが如くに注進ありけるにぞ、物に馴れざる者共は、此由を聞きて、世は已に大亂になりぬと、魂を冷し肝を銷し、前後を考へ、危^{あやぶ}蹈む者も多かりき。されども内府君は、何となく御快げに見えさせ給ひ、仰せけるは、檜木も兩葉にて去らざれば、必ず斧柯を用ふるとかや。其儘に差置くべきに非ずとて、便ち諸將を江戸の御城へ集められ、最丁寧に饗膳を賜はりて、數獻を勧め、倍上意あるは、各の今度上方の軍立、如何思はれ候や。心底を殘らず申さるべしとありければ、列座の人々承つて、評議區なる所に、徳永式部卿壽正法印進み出でて申しけるは、末座未練の軍談は、歴々の前にて、卒爾千萬には候へ共、存寄りたる趣を申上げざらんも、却て不忠なるべきなれば、某愚案を聊申上候。抑此度西國方の企は、少兒の戯の様に覺え待るなり。其故は四國・西國の大名、數を盡して美濃表へ出張致す事なれば、敵定めて雲霞の如くならん。天下の安危、此一舉にありと存じられ候。さり乍ら大將もなき寄合勢なれば、恐るゝに足らざるなり。熟と測惟るに、備前中納言秀家・安藝

中納言秀元・筑前中納言秀秋彼三人は、皆同位にして國守なれば、互の相談の事はありぬとも、何れを大將として、下知に隨ふべきとは思はれず、又岐阜中納言は小身なりといへども、信長公の嫡孫なれば、其家統を心中に挿んで、今度の諸將の中には、誰の令にも付き申されまじければ、内證の威勢、諍に日暮れて、兎角の異論忽に出來んぞ。幾程か候べき。戰の全勝する所以の者は軍政にあり。士の戰を輕んずる所以の者は、命を用ふるにあり。大將なくして、三軍誰の命に従つて、戰勝つ事を得んや。又石田三成が奉行貌したり共、如何に渠風情が下知に従ふ諸侍あるべきや。誠に三軍は得易く、一將は求め難きなれば、將の心も心、士の心も心、其本亂れて、未何ぞ備はらん。若し下知をなす者あらば、相猜みて要れず。御味方に參る輩多かるべし。假使降參せず共、諸事に就いて面々裁判となり、各の振舞して、一和の議定あるまじければ、心惡き事一つも候はず、御勝利を得ん事、掌を指すが如くに見え候。恐れ乍ら此料簡少しも相違あるまじきなり。然乍ら敵勢共、美濃國に到りて、未だ足を溜めざる先に、討手の勢を向けられんも善からんかと、無碍^{むげべん}辯を以て水を流し

てぞ申しける。君聞き給ひて、道理に叶ひたりとや思食しけん。衆と好を同うすれば、成らずといふこと靡なきなれば、合戦の趣は、偏に勇士の心に任すべしとぞ宣ひける。此御一言に諸大將達、勇む心ぞ顯れけるに、早福島左衛門太夫正則進み出でて申されけるは、今度美濃路の合戦、一方の御先手、仰ぎ願はくは某に御免候はゞ、敵を一當あた抗り見申さんとぞ望みける。内府君許容あらせ給ひて、御心には、諸葛孔明を得させ給ふ様にて、元暦の古、源頼朝卿生食といふ馬を、佐々木に給はつて、宇治川の先陣したりし佳例を思食し、信濃駒の黒栗毛の、五寸いっさに餘つて太く逞きに、貝鞍置かせて御庭前に牽かさせ、正則にぞ下し給はりける。今度の軍の成敗、福島に許させ給ふなり。斯の馬に騎つて、逆徒を思ふ儘に退治すべきとの上意ありければ、正則は骨髓に徹し、謹んで領掌し、忝さは身にも餘りてぞ思ひ奉る。内外の諸士見聞して、羨まざるはなかりける。儲徳永は、濃州の案内者なれば、福島に加はつて、軍忠を勵むべし。殊更諸士に拔んで、軍略を申せし分別の程神妙なりとて、是にも御馬をぞ下されけり。是より段々に上らるべしとありて、御座を立たせ給へば、何

徳川勢江
戸を發す

れも、我屋にぞ歸られて、上方進發の用意とぞ聞えける。同八月朔日に、内府君より、本多中務・井伊兵部を以て宣ひ給ふは、先づ追手の大將には福島太夫正則、搦手は池田三左衛門輝政との由ありければ、兩將豫て願ふ處の幸なりと、慎んで領掌し奉りけり。斯る折節に、正則、井伊・本多を以て訴へけるは、尾州に杉浦と申して、僅に一萬石取る者候。日頃中惡く候へば、今度の障にもなりや仕らんと存すれば、打果し度事に候と望みけり。其儀も、心に任せよとの上意の由、兩人より委細告げ來れば、安堵して、彌支度をぞなしける。扱又井伊兵部少輔直政・本多中務大夫忠勝は、檢使にぞ定め給ひける。是より次第に江戸を打立ちける。大將には一番に福島左衛門太夫正則・加藤左馬助嘉明・細川越中守忠興・黒田甲斐守長政・田中兵部少輔吉政・筒井伊賀守・藤堂佐渡守高虎・京極修理進高知、二番に池田三左衛門輝政・淺野左京大夫幸長・有馬玄蕃頭豊氏・松下右兵衛・山内對馬守一豊・堀尾信濃守忠氏・池田備中守長吉・一柳監物、三番には蜂須加長門守至鎮・生駒讚岐守正俊・寺澤志摩守廣高・金森出雲守重頼、御横目には武藤掃部・津田新十郎・澤井左衛門・平井彌次右衛門・同兵右衛

門・吾孫子善十郎・生駒隼人・森勘解由・林藤十郎・小坂助六・堀小三郎・安井將監・吉田平内・堀内將監・稻熊市左衛門・武藤清兵衛・能勢六左衛門、是等は河越方の軍に附いて働くべしとの仰にて、都合其勢十萬餘騎、天地を響かし、東關を轟かして出立ちけり。大將達は言ふに及ばず、家の子郎等に至るまで、花麗を盡し、鎗・鐵炮・弓・長刀の莊達かざりたちたる形勢は、元弘の昔に増して、夥しくぞ聞えける。同十四日に、尾州の清洲にぞ着きにける。諸軍蟻の集りたる如くなれば、在々處々に屯して、暫く上方勢の働くたて方術を窺ひ、岐阜を攻めんか、大垣を破らんかと、手配の軍議最中に、正則は江戸にて御意を得たる事なれば、時日移さず、杉浦を攻滅さんと思ひ、手勢にて貝を吹立て取圍めば、杉浦も爰を最後と、城戸を押開き突いて出で、命限に戦ひし所に、福島が扨從に間島源次郎・鎗にて衝付けたりしを、杉浦心得たりといふ儘に、手鎗を振廻し、源次が冑の眞向打破れば、深手負うて危く見ゆる所に、香兒伊織入替りて暫く闘ひしが、遂に杉浦が首をぞ取りたれば、福島は勝鬨揚げて陣屋に還り、馬の息をぞ休めける。去程に東將達は、岐阜を攻めんか、大垣を破らんかの詮議決定せざれば、駿府よ

り御駕を發せられよと、毎度羽檄を飛して、勸め申さるゝ處に、内府君より、村越茂助を御使にて、先づ諸將の勞を謝せられ、次に村越に命じ給ふは、諸將若し我出馬を問はゞ、其表の様子に依りて駈上るべし。敵味方の實否を、未だ心得難しと答ふべしとあれば、村越は上意を承り、早々に駈上りて、清洲に到り、井伊・本多に向つて、上意の趣を具に演説すれば、兩人聞きて、君の思召さるゝ處も至極せり。然れども時の運を慮るに、天地の利に如かず、天地の利は人の和に如かず。東軍一和して二心なきは、是れ無妄の象なり。故に諸士動いて健なり。剛中にして應ず。大に亨るに正を以てす。天の命なり。天の下に雷行き、物毎に無妄を與ふ。先王以て茂さかんに、時に對して萬物を育す。萬物を育やしなへば大畜なり。剛健篤實の輝光、日に其徳を新にすと、剛は上にして而も賢を尙び、能く健に止り給へば大正なり。此大正無妄の節に中つて、天命何ぞ邪ならん。是に因つて日月の運行、海水の満干、一として違ふなき於越こなば、内府も御悦喜たらんと、辭を盡して申さるれば、正則も理に伏して、兎角の違亂に及ばず、是にぞ同じける。されども北の方は岐阜に近し。敵必ず出でて

防ぐべし。搦手より合戦を始めば、當手の恥辱ならんと、正則餘儀なくぞ聞えける。兩檢使の判断に、輝政は軍法を堅められ、正則は河を渡り、其後相圖の狼煙を見て、上の瀬河田の涉を越さるべしとありしかば、此議最當然なりとて、各の約をぞ定めらる。

石田軍記卷之五終

石田軍記卷之六

伊藤彦兵衛明^ケ退^ッ於大垣城^ヲ事^附三成移^ニ大垣^ニ事

大垣の城は、伊藤長門守より、子息彦兵衛相續いて城主たりし處に、東國の大軍、既に尾州に參着すと、夥しく沙汰せしかば、石田三成思ふ様は、敵を居ながら待ち受けんこと、策^{はかりごと}なきに似たり。大垣に出張して雌雄を決せんと、則ち使者を以て、伊藤が方へ言遣しけるは、今度關東凶徒の輩を追伐の爲め、秀頼公の御名代として、西國の諸大名を引率し、某美濃表へ出張せしむ。之に依つて其方の城を暫く借りて、關東より打上る軍勢を討夷げんと存候。早速城邊の在郷へ明退きて、城を借し給はらば、莫大の忠儀たるべし。但又一戦を遂げ、軍功を勵まるゝに於ては、恩賞は望に應ずべしと委細述べけるを、彦兵衛使の趣聞届け申しけるは、是は珍らしき御借物な

り。能く料簡もあるべし。事にも依り時にも依るなり。今の時節に大軍を請けながら、我居城を明渡し、要害もなき處へ屯し居らん事、天下の嘲笑、先祖の恥辱、以後までも遁れ難し。斯く存する上は、片時も城を明渡し申すことは、思も寄らざる事に候。聊以て關東の最員にも非ず。此段能々申されよと返答しけるを、三成聞きて大きに腹を立て、先づ借りて見せんと、則ち福原右馬助・平塚因幡守を呼び、急ぎ大垣へ馳行きて、是非の事をいはず、直に城に入るべしと委細申含め、權柄の使者をぞ立てにける。兩人は早々馳行きて、當城を借らん爲、是まで參り向うたり。急ぎ城を明渡し候へと、緯もなげに申しければ、伊藤聞きて、兎角の返答にも及ばず、命を限りに支へんと、更に驚走る氣色もなく、屹と睨んで居たりけり。福原思案しけるは、何とぞして智路を廻らし、干戈を動かさず、城を取らんと慮つて、伊藤が家來を密に招き寄せていふ様は、今度城を借るべきとの事、私の宿意ありて、其を果さん爲に非ず。秀頼公の上意といひ、東軍を誅伐の御名代なれば、前後を能々分別して、主人に諫言を加へられ、早速城を明渡し、近所に居住あらんこそ、忠義にても候

石田三成
大垣城に
移る

はんと、無窮の辯舌を以て説きけるにぞ、分別未練の彦兵衛、福原が巧言に欺かれ、上意といふに行當り、尤なりと納得して、今村といふ邑に搔上の要害を構へつゝ、惡罵惡罵と城を明渡ししてぞ出退きける。跡には福原右馬助直高本丸に移り、平塚因幡二の丸に入りて、佐和山石田が許に、由を斯くと申し遣しければ、高橋右近・秋月長門に七千餘騎を相副へて、城を堅めさせける其形勢は、實の時は倡知らず、先づ嗚しぐぞ見えにける。其より石田三成、さらば大垣に出張せんと、相伴ふ人々には、備前中納言秀家・薩摩侍從義弘・島津中務少輔昌久・同又七郎忠恒・小西攝津守行長・熊谷内藏允直陳・相良宮内少輔頼定・秋月三郎種宗・垣見和泉守家純・高橋主膳長昌・木村宗左衛門・同息傳藏、都合五萬三千六百餘騎、軍令を相定め、大垣の城へぞ移りける。近邊の在々處々透間もなく、小西行長・島津義弘・宇喜多秀家數萬の軍兵、大垣の城押包んで、陣をぞ打つたりける。樂田村は島津持口にて、木曾海道より南は、大垣まで堅めけり。海道より十五町北に當りて、曾根の城あり。東軍方西尾豊後守忠政が居城なり。

尾州犬山城從西軍籠置兵卒事附郡上城攻の事

尾州犬山は、石川備前守城主として之を守りける。加勢の大將には、濃州岩手の城主竹中丹後守重門・同國郡上城主稻葉右京進貞通・同息彦六一通・加藤左衛門・關長門守等、都合其勢一萬餘騎にて楯籠り、二の丸をぞ堅めける。遠藤但馬守・西尾豊後守忠政は、東軍一味たるに依つて、八月廿日稻葉右京が郡上の城を攻むる所に、金森法印・同息出雲守・關東より馳來りて、又此陣に加はりけり。稻葉は犬山の城二の丸を堅めて居たりしが、之を聞き、即時に來り後詰して、早合戦を始め、関の音鐵炮の響、雷の激する如く聞えける最中に、稻葉も豫てより東軍に内通あるに依りて、早速に和睦して、互に陣をぞ引いたりける。關長門守・加藤左衛門、此等も俱に内通して、内府君に降參をぞしたりける。然る所に不慮の事こそ出來にける。此郡上と申すは、稻葉右京進城主たりといへども、遠藤左馬助數代の本領にして、近き頃まで居たる事なれば、案内は能く知つたり。城替の恨もありて思ふ様は、稻葉右京は犬山に

あるなれば、郡上の城には、定めて抄々しき留守居もあるまじければ、密に飛驒國より押寄せて、手痛く攻むる程ならば、如何に勇功の譽ある稻葉なりとも、途方に暮れて降參せんは必定なり。此術は、敵の猛氣を奪ふ所の計略なりといひて、遠藤と金森と牒し合せ、遠藤は濃州升田口より、金森は飛驒より長瀧口へ押出づる。道筋の在々へ相觸れて、夜は松明箒を焼き、嶮岨なる細路共を打通り、漸く國境にぞ駈出でたりける。斯る所に堀尾・福島も、日頃稻葉と懇志なる故、種々に意見を加へつゝ、稻葉御方に參る上は、郡上の城を攻めらるゝ事、更々無用の由、井伊・本多方よりも、遠藤・金森へ急ぎ飛脚を以て言遣すといへ共、金森聞きて、路次の嶮岨を歴て、國境まで駈出でながら、空しく引取るといふも、思へば餘り無念なり。後の難は兎も角もあれ、是非に城を乗取らで舍くべきかと、遠藤へ内通すれば、遠藤も聞くや否やに、早用意して打立ちける。金森は、家來に吉田孫三郎とて、本郡上の者なれば、則ち是を案内にて、尼崎山より郡上の古城山へ打登り、城を目の下に見降して、九月朔日の早天に、長瀧口より攻掛る。城中には、稻葉が末子修理亮・稻葉土佐入道計り留守居

金森法印
郡上城を
攻む

せしが、不意の鯢波に驚き、周章ふためき、誰よ渠よと呼ばはれども、物に馴れたる宗徒の者共は、皆犬山に籠り居ければ、唯十方を失ひ、惘然として居たりけるが、修理亮申しけるは、究竟の截所を持ちながら、一支も支へずして、敵を城へ入れん事、世上の嘲といひ、生涯の恨何か是に過ぎ候はんとありければ、入道聞きて、能くも申したり。我も年は寄りたれども、實盛には劣るまじと、孫が意を勇めらるれば、修理も楠正行が思をなし、今日を命の限りぞと、緋緘の鎧に、五枚甲の緒を縮めて、踊り擧つて上帶し、遣ひ馴れたる十文字の鎗提げて、城の門を押開き、突いて出づれば、適れ若武者かなといふ儘に、柴崎甚左衛門・那波土左衛門・中村太郎右衛門只三人、城山の谷間の截所を頼みに防ぎけり。抑此口は、屏風を立てたる如くなる岩石の岨路一筋を通したれば、寄手の軍兵、攻上らんと勇めども、二人と並ぶ事措はざれば、魁首二三人の外は、皆々見物してぞ罄へける。中村が槍先、只古の栗生・篠塚よりも手痛く衝出せば、寄手も辟易して見えける所に、那波も續いて音を掛くるにぞ、眞先なる兵卒餘されて、逆様に落ちにけり。後に續いて上りし者共、將棊倒しに落重なり、歴々の飛驒武者共、身方の槍長刀に貫かれ、手負死人、さすがの谷も埋もれけり。中村も此勢に破つて入り、一騎當千と戦へば、遂に討死をぞ仕たりける。寄手も是に肝を消し、是は楠正成が再來して、千劔ちよを持つが如きかと續いて乗入る人もあらざれば、柴崎・那波諸共に、城中へぞ引取りける。此時寄手の軍兵共、城には人もなきぞとて、古城に寄せけるが、本城の後に大きな堀ありて、柵の構稠しければ、輒く攻入るべき様もなく、並居ける處を、城中より見澄して、弓鐵炮を打掛ければ、窓雀を射る如く、つるべ打に打ちけるが、空矢は一つもなかりけり。金森が家人牛丸次郎右衛門・今井平助・阿砂賀作十郎も打殺され、手負死人は數知らず、平砂忽ち變じて、紅を曝すが如し。城頭鐵鼓聲猶震、匣裏金刀血未乾と、李白がいひしも此時なり。金森は覺えず尼崎山へ引取りけり。爰に飯沼源左衛門城乗を心掛け、最前よりも堀を越え堀下に着くと雖、同じく續く者もなく、味方既に引取りければ、印を取つて引かんと思ひ、暫く猶豫する所に、城中の體、旗差物を堀際に結付けて置きたる計にて、人音もせざりければ、堀を越えて壘に上つて、旗一本差物共に拔取つて、味方の

陣に歸りしを、城より是を見て、打てや者共と、弓鐵炮を射掛くれども、恙なく引取りしは、實に剛の者とぞ聞えける。遠藤左馬助は、和良口より追手へ押寄せけれども、搦手の勝負を聞きて、卒爾に城へ手差せず、櫻町といふ所に、暫く陣を取りて、兩將よりあつかひ屢を入れたれば、修理も土佐守も、先づ急いで右京進に告知らせ、援兵を得て戦はんと相談して、兩將へ返答しけるは、屢の儀、如何にも仰に隨ひ、是より委細申入るべしと言遣しけるは、謀深くぞ覺えける。三軍に勝つことは一人の勝と、司馬がいひしも、斯様の事にやあらん。偕犬山へ其趣を知らせたく思へども、敵の圍嚴くして、使を外へ出すべき様もなく、案じ煩ひ居る處に、小室傳三郎といひし者進み出で、某不肖には候へ共、何とぞ才覺して、隨分參り見申さん。若し此事を仕損じて、死なんずる命も、戰場にて討死仕るも、忠義に二つはあるまじければ、御暇申す旁とて、何とか謀りけん、大敵の圍を、事なく忍び出でければ、先づ大息を突流し、嬉しやといふ儘に、犬山へ一驢に駈着き、右京に由を斯くと告げければ、右京元來短慮なる上、勇氣盛なる男なれば、得と巨細も聞届けず、我領内へ踏込まれ、生きても何の甲斐あ

船葉貞通
郡上城援
軍

らん。彼奴原、一人も生けては返すまじものを。續けや續けと馬牽寄せ打乗り、一騎駈に駈行きけるは、昔新田義貞、藤島の城へ向はれける風情も、誠ありさまに斯くやと思はれて、早速過ぎてぞ見えにける。總て大將の心緒は、小敵を欺かず、大敵を懼れず、三軍を調へて進む則ば、勝たずといふことなし。故に將たる者、勇を本として輕々しく走るを、霸卒といふとかや。吳子曰く、勇の將に於ける、乃ち數分にして、之一つならんのみ。夫勇者は必ず輕々しく合ふ。輕々しく合うて、利を知らざるは、未だ可ならざるなりと、尤智謀の薄きといふべきか。右京は城本より二里計此方なる借安村に馳着きて、續く勢を待揃へ、九月三日の曉天に、郡上の城へ乗込らんと、齒咬してぞ待明しける。遠藤左馬助は、是をば夢にも知らずして、無異の屢をや調へて、和睦あらんと油斷しける處に、右京が軍勢鬨を吐と揚げ、太鼓を撃ち鐘を鳴らし螺を吹き、鶴の翼を攤げたる如くになつて攻包むに、遠藤思ひ寄らざる事なれば、何の用意もなく、馬に騎れども、絆いであれば打ちても出でず。弓を手に取りたれども、鎧を着る間のあらざれば、中帶計にて走り出で、鐵炮を持ちても火繩なければ、

杵を持ちたる如くにて、算を亂して踏合ひ搦逢うて、我も人も、破れ具足に取付き、曳や〜と拽合ひて、十方を失せ騒動するを、無事なる時に之を視ば、笑に耐へぬはなかるべし。斯りし中より緋緘鎧に鍬形打つたる冑を着、二尺八寸の太刀を眞向に差翳し、粥川小次郎と名乗りて、右京が先陣を目がけ、眞一文字に駈向ひし形勢は、適れ周勃にも劣らぬ程の勇士とぞ見えにける。電光稲妻の如くに飛廻り、馬人の選みなく、波羅里々々々と薙倒し、死狂ひに狂ひける所に、稻葉忠次郎が兵卒に、日比野吉左衛門と名乗り掛け、十文字を以て突蒐れば、小次郎意得たりと打合ひたり。日比野引退き、以て開いて鎧の綿嚼を衝透し、鎌でもぎ倒せば、稻葉忠次走り寄りて、首をば取つたりけり。其より敵味方入亂れ、火花を散らしてぞ闘ひける。太刀の鐔音・鐵炮の響は、地涌千界の菩薩の出現たりし時も、斯くやあらんと、心も言も及ばれず、夥しくぞ聞えける。遠藤方の粥川五郎・鷺見忠左衛門・近藤作助等、思の儘に働きて、敵身方の目を醒し、三人一度に討死をぞ仕たりける。暫時の間に、手負死人は山をぞなしにける。生死は猶臂の屈伸の如しと、東坡がいひしも哀なり。是に因

稻葉貞通
金森法印
和睦

つて遠藤・金森、櫻町の陣を引取れば、稻葉は其儘城にぞ乗込まれける。斯くて兩方唾吐み合ひし所に、愈屢の沙汰になりて、人質を出せば、遠藤・金森も和睦して、郡上を引拂ひけり。稻葉は元來會津出勢の人数なりしかども、秀信の幕下に居れば、心に任せざる事なりと、諸人に其理をいはんもなり難く、世の人口も面目なく思ひて、剃髮染衣の姿となりて、赤坂に來りしを、福島種々に取繕ひしかば、内府君の寛徳に浴せられ、兎角の異議に及ばず、御赦免ありければ、同九月十四日に、公へ出仕を勤めけり。其前犬山の加勢として、稻葉父子・生熊玄蕃・關長門を、秀信より籠置かれしも、郡上の城攻以後は、稻葉・生熊・關三人は和睦して、公へ志ある由を傳へ聞き、略推宣して稻葉を討たんと、内議評定區々なる折節に、稻葉は三州表に、次男修理を以て申上げけるは、御出馬の筋待請け奉らん爲に、大豆戸の渡には、柏原平助、大軍にて出張致させ候。小牧表には、鳥左近二萬餘騎にて磬へ候間、清洲へ御懸らせ給ひて、御進發に於ては、宜しく候はんか。さあらんには御迎に駈出で申さんと、委細に注進し奉るにぞ、内府君も、其議に應じ給ひしとなん聞えけり。

美濃高洲城主高木十郎左衛門退散の事

福島左衛門太夫正則は、濃州西方を打廻り、敵方の要害方術を見分せんと、僅二百餘騎にて、尾州清洲より打つて出で、風水の氣象を伺ひ、天下の盛衰をぞ考へける。夫より市橋下總守在所、西美濃今尾の城に馳行きて、美濃路へ出張したる西軍の強弱を聞合せ、韓信が計を定め、三秦を取りし評定をぞ議しける。先づ高木が居城高洲城をば、計策を廻らし乗取るべし。小事とは云乍ら、一戦して敵の氣を奪はん略ればとて、徳永法印に、斯様々々と低語しければ、徳永則ち領掌して、家臣布家市右衛門并に寶壽坊とて、加納村の一向坊主を、竊に高木が方へ遣し申しけるは、冑を脱ぎ降參し、城を明渡され候へと、委細懇に言送りけるを、高木聞きて思案しけるが、小身故、當城抱へ難く、聞逃したる杯といはれんも口惜し。其上原隱岐守、太田の中島郷に在陣せり。渠に堅く申合せし事なれば、輒く御請を致すべき様なしと返事して、兩使をぞ還しける。徳永は仔細を聞きて、寢食を忘れ、色々に思案を廻らし、又布家

と寶壽坊に、重々申含めて遣しけり。布家は實體なる風俗、司馬欣が景迹に似て、寶壽坊は又法談口の上手、有る事無き事取集めて、微妙の説客、蘇秦・張儀にも劣らぬ辯舌なれば、此兩人亦復高木に對面し、越去行末の、其種品共を、注脚を下して淵底を盡し、色を變へ様を替へ、眞實貌に述べけるにぞ、高木も思の儘に語られて、麾下に屬する志とぞなりにける。高木申しけるは、さあらば追手馬の目口より押寄せ、雙方の鐵炮玉なしに打出し、暫く相戦ふ由をして、颯と引取り、其後福島よりの加勢を相具し、猛勢追手へ攻寄せられれば、其時搦手西の城戸口より、明退き申さんと、密に合圖をぞ定めける。是に依つて八月十九日に、徳永父子・市橋下總守・横井伊織・同孫左衛門・同作左衛門、并に福島に加勢、彼是都合其勢五百餘騎にて、馬の目口へ押寄せけるが、徳永巧みけるは、高木は豫て密契の如くに、西の城戸口へ明退くべし。さあらん於ては、福岡繩手の難所に蒐らんする時、透間なく追攻めて、一人も残らず討取らんと、心の中に思ひ澄して、加勢の援兵にも、家中の諸士にも、此計をば曾て知らせずして、唯我麾次第に戦へと法令を觸流し、武田村より搦手へ押廻り、関を

咄と擧げたれば逸り絶つたる若武者共、人より先に懸入らんと、横井作左衛門並に徳永が兵・河村忠右衛門眞先に進んで入る所に、城兵も何かは油断すべき。高木が宗臣河瀬平左衛門、紺糸緘の鎧に、天衝の冑を着て、鎗提げて名乗掛け、川村忠右衛門と渡し合ひ、請けつ捉んづ、少時突結びしが、何とか仕たりけん、河瀬蹈倒れしを、河村洞と衝伏せて、首をば取つたりけり。其次に徳永左衛門と名乗りて、大荒目の鎧に、二本菖蒲の甲を着、連錢葦毛の馬に騎り、九尺柄の大身鎗を振廻し、眞一文字に駈入れば、寺倉孫左衛門、二間柄の鎗を持ちて、参り候といふ儘に、塵埃を衝立て、天も黒闇になれとぞ勢合ひける。互に名譽の手爪利、祕術を盡し牙を噛みし形勢は、魏豹周勃にも劣らぬ程に見冷し、と、敵も味方も鳴を止め、堅唾を嚙んで居たりけり。此攻口は、弓杖にたらぬ程の隘路、兩旁高藪の截崖なれば、後へ廻らん様もなく、先へ進まんも叶はねば、さてもくと計りにて、後陣になすべき手術もなし。左衛門は、大身の鎗にや徠けん、深手を負ひければ、無念ながらも引退きけり。斯くて高木は、大の眼に稜を立て、徳永といふ入道目に出抜かれ、後悔すれども益もなし。如

何に旁、彼奴原に謀られ、生捕にせられん事、心憂しとは思はずや。敵を間近く引寄せて、餘さず漏らさず討取れと、大音揚げて下知すれば、場中の軍兵ども、承つて候と、今日を最期の戦ぞと、互に眼をいからかし、飛違ひ翔違ひ、鋒長刀も摧けよ折れよと、衝廻し薙倒し、命を露とも思はざこそ、當る所を幸に、右往左往に薙ぎたりけり。本より矢頃は程近し。城より放つ弓鐵炮、時雨の如くに射懸くれば、裊箭の一つもあらばこそ。福島が加勢の兵卒共、小石を並ぶる如くにて、死人の山をぞ築きにける。斯る處に寄手河村所右衛門、二の丸へ攻入るを押取籠め、鐵炮にて打強直め、其儘首をぞ取つたりける。續いて徳永掃部、河村が討たれしをも目に掛けず、無二無三に飛入る所を、城より見澄し、鐵炮にて打倒しけるが、様の具足や着たりけん、其身は恙なく、起揚りて退きにけり。其外深手を負ひて、生死の堺を知らざる者、其數若干にぞ見えにける。福島正則は此荒猿を聞付けて、詮なき戦ひ、大事の前の小事に、多くの人を討たする事、偏に法印目が所爲なりと怒り匂りて、早々に其陣引取れと、敷波の使をぞ立てたりける。是に依つて高洲の城の圍を解き、寄手の

兵、早速に引きたれば、高木は味方の兵卒を呼集め、面々如何思ふぞや。此城郭に大敵を引請けて、後詰の頼もなき所に、討死せんも本意ならず。幸に寄手も引きたる事なれば、一先づ當城を明退き、後日の合戦に、恥辱をば雪がんといいけるにぞ、諸人一同に尤と應ずれば、懸て福岡繩手に差懸り、駒の渡船に棹して、山の手の方へぞ退きにける。高木は何とか思ひけん、其近邊の川船共を、悉切流してぞ捨てたりける。

同州福束城主丸毛三郎兵衛落去の事

今度内府君、奥州御進發に付きて、美濃國中の大名小名、皆悉く其催促に隨ひて、大井・中津川の邊迄打出づるもあり、或は今日よ明日よと閑き合へる衆も多かりき。丸毛三郎兵衛も、疾く打立つべかりしに、吉日良辰を選ぶなどいひて、延引しける所に、石田治部少輔より使節として、河瀬左馬助を福束へ遣して申しけるは、此度三成事、秀頼卿の御代官として旌を揚げ、西國・四國の大名を引率し、美濃國へ出張し、所所に城を構へ根を深くし、本を堅くする謀を廻らし、西國往還の軍使を打止め、奥州

出勢の士卒の心を惱ましなば、東將は戦はずして、咸く軍門に降すべき事、掌を指すが如くならん。吳子が曰、兵を用ふるの害は、猶豫最大なり。三軍の災は、狐疑に生ずと誡めたれば、其方事猶豫の心を止められ、今度奥州發赴の志を翻して、偏に西軍に一味し、戦功を勵まされ候へかし。さあるに於ては、恩賞は宜く望に應ずべしと、委細に示しければ、丸毛も欲心や起りけん、少しも辭退せず、金鐵の好をなしけるこそおろか惹なれ。實に佛經の中に、諸苦の所因は、貪欲を本とすといふ。諸煩惱の障は、必ず癡に由ると説き給ひて、貪欲愚癡よりして、一人三公も其身を喪し、僧俗も是に依つて命を失へり。六韜に曰く、魚は其餌を食つて、乃し縊に牽かれ、人は祿を食んで、乃し君に服す。故に餌を以て魚を取らば、魚殺しつべし。祿を以て人を取らば、人竭しつべしと、太公望がいひしも理なり。今の人、金銀の賄を見ては、非も理に取成し、帛色の重きには、親子よりも大切に思ひて、義を忘れ忠を顧みず、上卿老臣は、君の前を欺き、善者なりといふ。中臣諸奉行は、其欺に諂つて、無窮の利口私の威を振ひ、下の役人は、其心に應甘むねなはんと欲して、晝夜に憐愍を知らず、恥辱を思

はず。御爲なりといひて諸士を讒し、町人百姓等の物を掠め取りて、己れ大福人となつて、公儀を募つて、金銀を遊女に抛ち、財寶を酒宴に盡す。是に依つて猶嚴しく聚斂して、貧民の衣裳を剝取り、鍋釜を賣拂つて、其闕けたるを償ふ。百姓年々に飢渴して、妻子共に路頭に立付ひ、片端より腫れ死するこそ不便なれ。刹利・婆羅門・毘舍首陀の四姓、暫く差別すれども、皆天下の民なり。鳥獸草木・山川・土地に至るまで、天下の有に非ずといふことなし。天下は是が爲め父母なれば、何の不足あつて、一國の主として大人を愛し、小人を卑むるや。富めるを貴み、貧を賤むるは、天下の意に非ず。覇者の情にして、誰か溥天の父母といはんや。富貴を取りて萬民を捨てば、天下の主^に非ず。強勢疆暴を以て、天下の主なりといはゞ、豈桀紂に異ならんや。明君にはあらず。天下の君の心、正に是にあるべきことなり。只萬民豊樂なれば、天下は自ら太平ならんかし。丸毛奥州へ赴く志を引替へて、石田が勸に従ひ、大垣の兵糧運送の便を諾し、又後詰の兵卒を引具して、己が在城福東にぞ楯籠りける。浩る所に尾州赤目横井伊織、多年の知音なれば、此事快からず思ひて、三郎兵衛が宗

臣丸毛六兵衛を招き寄せ、今度不慮に凶徒等と黨類せらるゝの由、定めて眞實の儀にてはあらず。然る上は内府君も、遺恨深重には思召さるまじきなれば、早く悪心を止めて、數百の士卒をも助命し、祖父の跡をも失はぬ様に計らひて、東軍に忠節を盡されば、立身に於ては疑ふ所あるまじき旨、委細に申合めける。六兵衛尤なりと領掌して歸り、丸毛に始終一事をも遺さず、有の儘に申しければ、暫くあつて三郎兵衛、心憂き事を聞くものかな。士たる者一度申合せて、再び違變なるものかといひて、不通切なる返答ありしかば、六兵衛押返し諫言しけるは、横井の申さるゝ所、兼日の昵近を思ひ、御爲を存じての事なれば、是非に奥州發足の儀に、一決遊ばし候へかしと、重々申しければ、丸毛眼に楞を立て、いひけるは、先君秀吉公の御厚恩を蒙りし事、誠に以て莫大なり。今度秀頼公御名代として、石田三成旗を揚げ、逆徒を平げんと欲し、某不肖の身なりといへども、先君の好に依つて、石田兎角の軍議を相略らるゝ事なれば、三成に與し、亡君の恩を報せんと思ふなれば、今更約を違ひつゝ、一旦の榮華に誇ればとて、何迄の身をか保つべき。武運忽ち盡き果て、浮世の秋の

霜の下には名を朽し、傍の人には指をさ、れんこそ口惜しけれ。意見も評議も事に依るとした、かに悪口して、肩を張り拳を握り、六兵衛が面を撃損すべき氣色なれば、重ねていふべき術もなく、横井が方へ、由を斯くと申切つてぞ遣しける。是に依つて八月十六日に、市橋下總守・徳永法印・横井伊織・同孫左衛門・同作左衛門・福東の東加納村船渡の處へ駈向ふ。丸毛も豫て牒し合せし事なれば、早狼煙を揚げたりけり。是を見て大垣の城主伊藤彦兵衛・長松の城主武光式部少輔、并に石田が加勢前野兵庫・高野越中・齋藤左京・雜賀内膳等、時を移さず駈着き、彼是其勢三千餘にて、大藪村と大樽村の間へ騎出し、大河を阻て、對陣し、鐵炮・矢軍・群雀の飛ぶが如く、互に挑み向うて射放ちけり。され共三町餘の大河を阻て、の事なれば、何の勝負かあるべき。其日も暮になりぬれば、互に睨み合うてぞ陣取りける。然る所に市橋下總守が精兵に、金森平左衛門・竹田四郎左衛門兩人を近付けて申しけるは、其方等は素より地侍の事なれば、案内を能く知りたるべし。敵勢の後へ廻り、上下より在家に火を罹はらち、鯨波を揚ぐべし。其時に此方より飛込んで駈合せん。川向の敵勢の姓名

を聞くに、抄々しき兵は一人もなし。皆公事武者の駈かりざむらひ士なれば、下知をも聞入れず騒ぎ立ちて、我れ先と逃げてや行かん、折敷きてや戦はんと、度を失はんは必定なり。其時に咄と川を乗越え、楯衝く敵をば討つて落し、逃ぐる者をば駈散らし、福東の城へは入れも立てず、乗取るべきことは案の内なり。但し兩人が謀に依るべきぞといへば、一言の違變に及ばず領掌し、水練の上手をすぢ選み精つて、十餘人引牽し、十六日の夜半の頃、川上へ押廻り、漲り流る、大河を、事ともせず泳ぎ越し、敵の後なる自蓮坊村・楡役村へ忍び入りければ、家々の門戸を押立てたる計にて、百姓等一人も残らず北げ行きて、鶏犬より外に謹むる者あらざれば、此彼こゝかしこに走り廻り、思の儘に火を付けて焼立て、関を咄と揚げたるにぞ、下總守豫て思案せし如く、大樽村へ張出したる敵兵、鯨波と放火とに周章騒ぎて、散々に裏崩れし、四方八面に北げ走る有様時ならぬ深山嵐に誘はれて、木の葉を落すに異ならず。石田が加勢の兵卒、並に伊藤彦兵衛・武光式部以下、旗差物馬物具を打捨て、北を指して逃走り、大垣の城へ引取りけり。丸毛は田中の細繩手を傳ひ、倒れふたぬ翹いて福東の城へ引退く。川向の敵勢